

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## The meaning of formal patterns of sentences

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 四郎, Wada, Shiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1487">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1487</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



神戸市外国語大学 研究叢書 第44冊

# 文 型 の 意 味

和 田 四 郎 著

神戸市外国語大学外国学研究所

2008

# 文 型 の 意 味

和 田 四 郎 著

## はしがき

半世紀近く前になる英語の授業で *John put the light on.* は *John put on the light.* と  
言うことができるが、*John put it on.* と代名詞になると \**John put on it.* とは言えな  
いと教わったことを覚えている。その時珍しく私は教師にその理由を尋ねた。  
するとその先生は「*John put it on* と *John put on it* を発音してみなさい。前者の方  
がリズムがよい」と教えてくれた。私は口の中で何度も反復し発音したが、音  
楽的才能もリズム感もない私は、半信半疑ながら「そうかなー」と納得せざる  
を得なかった。

また、文型を習った頃には、*John is a student.* は SVC、*John wrote a long novel.*  
は SVO という文型であり、*John is writing a long novel.* も *is writing* が V に相当す  
るから SVO 型であると教わった。同じ *be* 動詞がなぜ一方で V とみなされ、他  
方では文型から除外されるのかわからない。それでは *John is loved by Mary.* の受  
動文の文型は何か、*John is allowed to leave.* の文型は何か、等々中学生あるいは高  
校生なりに疑問を抱き続けた英語の授業であった。私にはその記憶はないので  
あるが、本年の授業である学生が *John is allowed to leave.* のような文の不定詞 *to*  
*leave* は *is allowed* という V の目的語であるから、この不定詞は名詞的用法であ  
ると高校で教わったと話してくれた。

学校文法にはできるだけ効率よく英語を教えるという明確な目的がある。従  
ってある意味では作りようのないところに道を付けるという荒療治が必要な場  
合もあるであろう。それはある程度やむをえないと認めるとしても、上のような  
素朴な疑問にはある程度筋道の通る「理屈」が必要ではないかと思う。しかし  
この学校文法の最大の問題点は文の要素を S、V、O、C という記号に押し込  
め、文を5つあるいは7つの「文型」にまとめること自体が目的化しているこ  
とにある。Chomsky のかつての言葉を借りれば「無限にある文」がこの5つか7  
つの型に分けようとする試みは土台無駄なことであることは誰しも経験してい  
る。

しかし学校文法の文型論の最大の問題点は S、V、O、C などという記号が何  
を意味しているのか教える側も、したがって教わる側も完全に理解してはいな  
いということにある。S は主語、V は動詞、O は目的語、そして C は補語とは  
いうが、主語、目的語、補語とは何か、動詞と述語動詞は何が異なるのかとい  
う問題に明確な定義を与えることは学問的にも極めて困難なことである。

このようなことから、本書では S、V、O、C という抽象的な記号を使用せず、

純粋に形態的・形式的特性から文を見るとどのような文型が現れるかという試みを行った。当初は Comsky の言葉に恐れ、到底不可能ではないかと危惧していたが、ある程度見通しが開けた。それから少しずつ授業でも使うようになった。全体像が一応完成した数年前から講義で確かめ修正を加えた。

従って本書は講義録が土台となっている。しかし、実際にキーボードに文字を打ち込む作業は難渋し、如何に話し言葉がいい加減であるかということを思い知らされる毎日であった。私の指導教官は私に「僕はね、話した言葉がそのまま本になるのだよ」と語ったことがある。受け取りようによっては誤解されかねない内容であるが、私は感心するばかりであった。そして、その言葉が今の私の辞書には登録されていないことが口惜しい。それだけに私の講義に辛抱強く耳を傾けてくれた学生諸君には感謝したい。

少しは修正を加えながら書き進めたのであるが、不備なところ、考察不足の箇所が予想以上に多い。書き終わった今からそれらは補うつもりである。

当初はまったく別の内容での執筆を想定していたが、急遽本書のテーマとした。何度か講義で行った内容ということもあり、それほど時間はかからないであろうと高をくくっていたのであるが、これが油断であった。研究所長佐藤教授はじめ辛抱強く脱稿を待ってくれた研究所の職員の方々、とりわけ木下氏に心からお詫びと感謝の念を表したい。

## 目次

第1章	文型の前提	1
1.1	語類	1
1.2	句の重要性	4
1.3	動詞句	7
1.4	形容詞句	10
1.5	文法的主要部と意味的主要部	12
1.6	前置詞	15
第2章	5文型の問題点	19
2.1	文型の誕生— C. T. Onions	19
2.2	Quirk <i>et al.</i> 1985 の文型—7文型	21
2.3	主語・目的語・補語の定義	23
第3章	<i>Be</i> 動詞型	32
3.1	<i>be</i> 動詞の特質	32
3.2	等号文： NP[+Def] – <i>be</i> –NP[+Def]	36
3.3	属性文： NP – <i>be</i> – XP	38
3.3.1	NP – <i>be</i> –NP[–Def]	38
3.3.2	NP – <i>be</i> –AP	40
3.3.2	NP – <i>be</i> –PP	41
3.3.3	記述の対格構文	42
3.3.4	NP – <i>be</i> –AP –PP	43
3.3.4	NP – <i>be</i> –AP – <i>to</i> –V	45
3.3.5	NP – <i>be</i> –Ved – <i>by</i> –NP	47
3.3.6	NP – <i>be</i> –Ving	48
3.4	非定形（原形、 <i>ing</i> 形、 <i>en</i> 形）の用法	49
第4章	<i>Have</i> 型	52
4.1	「所有」ということ	52
4.2	「所有」の記号化	53
4.3	<i>Have</i> の意味	56

4.4	NP– <i>have</i> –NP 型	57
4.5	NP– <i>have</i> –NP–XP	58
4.5.1	NP– <i>have</i> –NP–PP	58
4.5.2	NP– <i>have</i> –NP –VP	59
4.5.2.1	NP– <i>have</i> –NP– <i>Ven</i>	59
4.5.2.2	NP – <i>have</i> –NP–V(–NP)	59
4.5.2.2	NP– <i>have</i> –NP– <i>Ving</i> (–NP)	60
5.	他動詞型 (1)	62
5.1	他動詞構文の意味	62
5.2	NP–V–NP	64
5.2.1	「状態」を表す他動詞	65
5.2.2	場所句と受動文	67
5.2.3	受動文と対応しない場合	70
第 6 章	他動詞型 (2)	72
6.1	NP+V+NP+XP	72
6.1.1	NP + V + NP + PP	72
6.1.2	NP+V+NP+ <i>to</i> +VP 型	76
6.1.3	NP + V + NP + VP	77
6.1.4	NP+V+NP+AP	80
6.1.5	NP + V + NP + PP/ NP + V + NP + NP	82
6.1.5.1	前置詞の種類	82
6.1.5.2	中核的前置詞の意味特性	84
6.2	所有構造	86
6.3	所有関係と叙述関係の間	92
6.4	所有関係と前置詞の選択	93
6.5	NP+V+XP	95
6.5.1	中間構文の特性	95
6.5.2	二種類の間構文	98
第 7 章	自動詞型	102
7.1	NP+V 構造の多様性	102

7.2 NP+V+AP	110
7.3 NP+V+PP	110
7.4 NP+V+ <i>to-do</i>	118
第8章 結びにかえて	122
8.1 文の単位	122
8.2 形式の意味	124
8.3 まとめ	125
8.4 例示	126
参考文献	130





# 第1章 文型の前提

## 1.1 語類

文型を考える上で前提となるのは語である。現代英語では語が分かち書きされていることからわかるように、語を認定することは容易である。それに対して日本語を考えてみると、語を特定することは考えられるほど容易な作業ではない。例えば「走って来た」という例を考えてみる。我々はこの表現が<走る>+<て>+<来る>+<た>という語（正確には形態素）から成り立つことを知っている。しかし、「走って」という場合にどこからどこまでを語と考えるのかということに対して明快な解答を出すことはできない。さらに<赤い花>と<きれいな花>における<赤い>の<い>と<きれいな>の<い>とが同一の形態素ではないのはなぜか、<きれいな>の<な>は何か、など、語（形態素）という単位の認定がそれほど簡単な作業ではないことが分かる。

その点英語では語は空白によって区切られており、音声的にはともかく視覚的に明快である。しかしこの分かち書きは英語ではむしろ絶対的な要件であるともいえる。もし分かち書きされていなければ、例えば“amanwhohasdied”が“a man who has died”であると分かるにはかなりの時間を要する。逆に日本語では分かち書きはむしろ避けなければならないといえる。例えば上の「走って来た」を「走って来た」と表記すると理解の妨げになるだけである。

このように日本語と異なり、英語では語の認定は単純といえるほど容易であるが、このことはすべての語が意味的にも機能的にも同質的であることを意味するわけではない。例えば小石を一行に並べたものを構造と呼ぶことは出来ないように、質的に全く同一の要素が線状的な連鎖を形成するだけでは言語としては不十分である。構造には互いに他と区別する異質な要素の存在が前提条件である。その質的な相違が品詞の相違である。例えば次を見てみよう。

(1.1) SIR Sean Connery today backed calls by the SNP<sup>1</sup> for a separate Scottish Olympic team.

The James Bond actor, a supporter of Scottish independence, gave his backing to the calls as he launched his memoirs in Edinburgh on his 78th birthday.

---

<sup>1</sup> Scottish National Party(スコットランド国民党)。スコットランドの政党。英国からの独立を唱えている。

He told the audience at a question and answer session: "Scotland should always be a stand alone nation at whatever, I believe."

Connery was launching his autobiography *Being A Scot* in front of a sell-out crowd at the Book Festival in his native Edinburgh. . . .

Connery told the audience that he had been a Celtic supporter when he was younger, after being introduced to the club by his father who supported the club.  
—*The Scotsman*, Wednesday, 27th August 2008

上の例文を構成している語が以下の語類に分類されることにはそれほど大きな問題はないであろう。

### (1.2) 語類(Word Class)

- a. 名詞(Noun): SIR Sean Connery, calls, SNP, team, James Bond, actor, supporter, independence, calls, memoirs, Edinburgh, birthday, audience, question, answer, session, Scotland, nation, whatever, Connery, autobiography, *Being A Scot*, front, crowd, Book, Festival, Edinburgh, Connery, audience, Celtic, supporter, club, father, club
- b. 動詞(Verb): backed, gave, backing, launched, told, believe, launching, told, introduced, supported
- c. 形容詞(Adjective): separate, Scottish, Olympic, Scottish, 78<sup>th</sup>, stand alone, sell-out, native, younger
- d. 副詞(Adverb): today, always
- e. *be* 動詞: be, was, been, was, being
- f. *have* 動詞: had
- g. 助動詞(Auxiliary Verb): should
- h. 代名詞(Pronoun): his he his his He I his his he he his who
- i. 冠詞(Determiner): the a The a the the a a a the a the the
- j. 接続詞(Conjunction): as and that when after
- k. 前置詞(Preposition): by for of to in on at in of at in the to by

英語の語類は品詞(Parts of Speech)とも呼ばれ、伝統的には名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接続詞、前置詞、間投詞の 8 つが認められている。これは

古典ギリシャ語やラテン語の文法における分類を受け継いだものであることはよく知られている。品詞を意味的あるいは概念的な範疇として考えるのであれば、言語 A に存在する概念は言語 B にも何らかの形で対応しているはずであるから、ギリシャ・ラテンの古典語の範疇が英語にも当てはまる、あるいは当てはめようとするのは決して間違いとはいえない。一例を挙げるならば「動作を表す語」を動詞とすると動詞はどの言語にも存在するのである。B 言語に対応する語彙がない場合には A 言語をそのまま借用するという手段もあり、英語の語彙の多くがこの方式を採用している。身近な日本語では「アイデンティティー(identity)」が典型的な例である。しかし、言語は意味のみによって成り立つわけではなく、音声や文字という形式を持つ。そして意味と形式の二つを具備することによって成立する。文法は第一義的には後者の形式を分析することを目的とする。従って、言語によってその種類は異なることになる。本書では Quirk *et al.* (1985) にならい語類(Word Class)と呼び、(2) の 11 種類を認めることにする。

これは、当然、この 11 種類が理想的な分類であるということではない。他にも数詞や間投詞など他の語類も考えられる。(1.2) で列挙した語類にしても少し考えると問題はすぐにてでくる。特に副詞は実は重大な問題を含んでいる。(1.2) では *today* と *always* を例示しているが、これを見てもなぜこの二つが同一の語類に属するのかという疑問は誰も持つであろう。実際のところ *today* と *always* の間にはほとんど共通する特性はないといってよい。<sup>2</sup> 副詞はこのように多様性を極めるために「副詞と見なすことができない語」も副詞に含まれ、語類全体として定義を与えることは不可能である(*cf.* Quirk *et al.* 1985: 438)。ついでながら文型という観点からみると副詞はそれを構成する要素と見なすことはできない。伝統的に場所を表す副詞、例えば *John lives in a very old house.* などにおける *in a very old house* を副詞句と見なされることがある。しかし、これを *very* と同じ副詞ということができないのは上の *today* と *always* の場合と同様である。動詞 *lives* に後続する *in a very old house* はその必須の要素であり、*very* が *old* を修飾するように、*lives* を修飾しているわけではない。従って本書ではこのような必須要素は副詞とは見なすことはせず、また、修飾要素としての副詞に言及することはない。Quirk *et al.* (1985: 67)は *be* 動詞や *have* 動詞を *do* と共に Primary

<sup>2</sup> 実際のところ副詞は多様であり、それらを単一の類として認めるには無理がある。詳しくは Quirk *et al.* (1985: 478 ff.)を参照されたい。

Verb と呼び、ひとつにまとめているが、本書では両者を区別するが、その理由は以下で述べる。

さて、英語ではこのように 11 種類の語類を認定することが可能であるが、名詞や形容詞、動詞といった語類の相違のほかの上の (1.2) には今ひとつ重要な区別が必要である。それは (1.2a, b, c) とその他との区別である。その相違は前者の語類は語彙の増減が可能であるのに対して後者ではそれができないということにある。その証拠ともいえることが、(1.2a, b, c) の語彙のほとんどがアングロサクソン語以外の言語からの借用であるのに対して、それ以外の語彙はそのほとんどがアングロサクソン語に遡ることができる事実である。すなわち、前者の名詞、動詞、形容詞といった語彙はその時代の優勢な文化の影響を受けやすく、語彙は絶えず増減を繰り返す。それに対して後者の類はこれ以上成員が増えることも減ることも期待できない。助動詞が新しく造られることも代名詞のあるものが英語から消え去る可能性は、少なくとも当分はない。前者は「開かれた類(Open Class)」、後者の類は「閉ざされた類(Closed Class)」と言われる。この二つはそれぞれ「内容語(Content Word)」「機能語(Function Word)」とも呼ばれることからわかるように、「開かれた類」の語が文の実質的な意味を担うのに対して、「閉ざされた類」の語は文法的な情報に関与する。言語が意味と形式から成ると上で述べたが、英語の語類にこのような二つの類があることはその縮図とも言えるであろう。

## 1.2 句の重要性

語は文型を考える上で前提であることを述べた。しかし、これはあくまでも前提であり、実は語そのものが文型を形成する要素となるわけではない。語は実際に使用される、すなわち言語表現として用いられる場合には常に句(phrase)の形をとる。具体的に (1.1) で見てみよう。(1.3) は名詞を中心とした句である。句は 2 語以上の意味的な単位であるが、代名詞や固有名詞等はおそらくその特性から修飾語などを伴うことは原則的にはないことから一語でも名詞句と見なされる。

- (1.3) SIR Sean Connery, (by) the SNP, (for) a separate Scottish Olympic team, The James Bond actor, a supporter, (of) Scottish independence, his backing, (to) the calls, his memoirs, (in) Edinburgh, (on) his 78th birthday, He, the audience, Scotland, (at) a question and answer session, a stand alone nation, (at) whatever,

his autobiography, (in) front (of) a sell-out crowd, (at) the Book Festival, (in) his native Edinburgh, the audience, a Celtic supporter, (after) being introduced, (to) the club, (by) his father, the club

さて上の名詞句を見るとその先頭には *the, a, his* など限定詞類(Determiner、以下 Det)とも略記がある。この限定詞は大きく分けると「定(Definite、以下 Def)」とそうでないもの、言い換えると「不定(Indefinite、以下 Indef)」の二種類がある。従来の文法では定冠詞と不定冠詞に分けられ、*the* と *a(n)* がそれぞれの代表的なものとされている。すべての名詞句は定か不定であるといわれる(Quirk *et al.* 1985:64)。しかし、よく考えると *the* と *a(n)* が果たす意味機能はこのような単純な対立関係にあるのではないことが分かる。つまり「定」の反対概念は「不定」であるが、だからといって、*the* の反対概念が *a(n)* と考えることはできない。「定」か「不定」かという対立は発話の文脈において特定の指示対象を有するか否かの対立であり、それは *the* かゼロかという対立でなければならない。それに対して、*a(n)* は名詞が可算か不可算という名詞の下位類に関する標識であり(Quirk *et al.* 1985:245ff.)、これは文脈的概念ではなく、名詞固有の意味に関わる概念である。従って、次の (1.4) のようにまとめることができる。

## (1.4)

文脈上の 概念 名詞固有の 意味	定	不定
可算	the _____s	a _____ _____s
不可算	the _____	Ø _____ Ø

これをみると名詞は不可算名詞が不定の文脈で用いられない限り限定詞が複数語尾を常に伴うことになる。従って *Even a thoughtless person can appreciate beauty.* (COBUILD<sup>1</sup>)における *beauty* のような抽象概念は不可算名詞であり指示対象を持つとは考えられないために限定詞はつかない。注意すべきは本来であれば可算名詞であり、何らかの限定詞を伴う *school* や *church* も *I went to school here.* (*ibid.*)/ *His parents go to church now and then.* (*ibid.*) のような場合には学校や教会

という具体的な建物を意味せず、その本来的な機能をあらわすために限定詞を伴わないということである。

「定」と「可算」はこのようにレベルを異にする二つの概念であるとする、(1.4) から英語では「定」は「有標(marked)」であるのに対して、「不定」は「無標(unmarked)」、同様に「可算」は「有標(marked)」であるのに対して、「不可算」は「無標(unmarked)」と考えることができる。しかし、「無標」は単に標識がないということを示しているわけではない。「無標」は「有標」に対立する概念であるから、有標の標識があるのであればその対立概念を表す標識もあるはずであるが、おそらく経済性の点から「ゼロ」であり、ゼロ形式(=0)が無標を表す標識であると考えべきであろう。

名詞は以上みたように文の中で用いられる場合には常に（ゼロ形式を含め）何らかの「語」と共起し、句の一部となる。ここで名詞と共起する「語」について考えてみる。認知文法を引き合いに出すまでもなくすべての言語記号は何らかの「意味」を持つ。しかしこの *the* や *a(n)* などの語が持つ「意味」と名詞が持つ「意味」との間には、同じように空白で挟まれている語であるにもかかわらず、根本的な相違があると言わなければならない。それは名詞等の開かれた類に属する語が言語外の外界にその指示する対象を有するのに対して、限定詞等の閉ざされた類に属する語は外界を指示するのではなく言語内でのみ機能するということである。<sup>3</sup> そのことを理解するためにはそもそも「定」とはどういうことか考える必要がある。今教室の中にいるとする。そこには黒板があり、窓があり、プロジェクターなどがある。これらはすべて教室に在る人々にとっては「それとわかる」(安井 1996: 136) ものであり、これらの名詞を言語表現として取り込む場合には定の限定詞 *the* を用いなければならない。一般に *the* は定の限定詞、*a(n)* は不定の限定詞といわれる。しかし上で述べたように、この二つは一方が文脈的な概念であるのに対して他方が（英語の）名詞固有の意味に関わる概念というように質的な相違が存在していた。定を表す記号として有標の *the* を英語は持つのに対して、不定を表す記号はゼロである。その場合には名詞固有の記号として可算か不可算のどちらかがデフォルトの値として出てくることになる。つまり不定冠詞は不定を表す記号ではなく名詞の意味的な記号が不定という文脈で出てくると考えられる。

このように考えると、*the* という限定詞はある状況で文を発話する発話者の判

<sup>3</sup> *De re* (事象的), *de dicto* (言表的) とも言われる。

断と密接に関連することになる。文は発話者によって初めて生ずるものであるから、定か不定かという判断は発話者にのみ可能な判断にほかならない。結論として、名詞とともに共起する限定詞は発話者の主観を表す機能を持つとすることができる。限定詞類はこのように名詞を文の一部として取り込むことを表している。「辞書の中の語は意味がない」という逆説的なことばもこのように考えると逆説ではなくなるのである。

### 1.3 動詞句

名詞句は限定詞で始まり名詞で終わる句である。句には主要部(Head)があり、名詞句の主要部は当然名詞である。句型を考えると名詞句(NP)が重要な働きをすることはいうまでもないが、以下では他の語類を主要部とする句についても簡単にみておく。まず動詞句について考える。

動詞において特に重要なことは定形と非定形との区別である。この区別は日本語ではそれほど意識されることはないが、英語では極めて重要な意味を持つ。定形とは一言でいうならば基本的には主語（の人称と数）との関係において定まる述語動詞の形式である。英語ではその形式の区別は現在時制においてのみ見られ、過去時制は人称にかかわらず *ed* 形しか存在しない。過去形ではこれは何らかの理由で主語の人称との関係を区別する必要がなく、中和されていると考えられる。

さて、主語との関係において形が定まるということは、誰が行う（または行った）行為か、または対象となる状態の主体は誰かを、人称・数によって区別することによって更に正確に伝える、ということでもあり、これらの要素を形式的に明示することは文としての最小限の条件を備えるということを意味する。言い換えるならば、定形のそれぞれの形式は話者の判断がそれだけ直接的に動詞の形式に反映した形式といえるであろう。その意味においてこれらの形式は法性(Mood)の一つであると考えることができる。一人称二人称のゼロ形式は、従って、単純な原形ではなく、特に不定詞における原形とは厳密に区別しなければならない。この点に曖昧性を残すのが Quirk *et al.* (1985) である。同書は動詞の基本形(Base Form)は定形にも非定形にも用いられるとしたうえ、定性(Finiteness)の特徴に関して次のように述べる。

#### (1.5) Finite Verb Phrases

- (a) 独立節の動詞句となる。



- (b) 現在形と過去形の区別がある。
- (c) 主語と動詞の間に人称と数の一致がある。
- (d) 定形動詞句は必ず操作詞(Operator)<sup>4</sup>を含むか、現在形か過去形の動詞を含む。
- (e) 定形動詞句は直説法、命令法、仮定法という法(mood)を持つ。直説法は無標(unmarked)であり、命令法、仮定法は有標(marked)である。(p.149)

さらにこれを元に次のような表にまとめる。

(1.6)

	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
INDICATIVE	+	+	+	+	+
SUBJUNCTIVE	+	?	-	-	+
IMPERATIVE	+	-	-	?	+
INFINITIVE	-	-	-	-	-

—Quirk *et al.* 1985:150

その結果、定性は、もっとも定形性の強い直説法から定形性をまったく持たない不定詞まで段階性が見られるとして、次のように述べる。

- (1.7) '... the finite/nonfinite distinction may be better represented as a scale of 'FINITENESS' ranging from the indicative (or 'most finite') mood, on the one hand, to the infinitive (or 'least finite') verb phrase, on the other. The imperative and subjunctive have in some respects more in common with the infinitive (a nonfinite form which like them consists of the base form, and typically expresses nonfactual meaning).'
- Quirk *et al.* 1985:150

ところが(1.6)の表は定形性という観点からみる限り段階性があるということであるが、これを法性という観点から見ると直説法、仮定法、命令法のグループと不定詞との二つに明確に区別されることができると考えることができる。法(Mood)は出来事や事態に対する話者の判断・査定に関わる文法的現象であり、その意味

<sup>4</sup> 疑問文や否定文において通常の動詞とは異なる振る舞いをする一群の助動詞や *do* など。

からするならば直説法は「無標」とはいえ、「断定」という法性を含み、仮定法や命令法と質的に変わるところは何もない。また定形が主語との関連において定まる形式であるとするならば、そこに法性が関係していると考えerことは自然である。むしろよく考えるならば、いわゆる定形という概念は、直説法であることを示す標識であるとみなすことができる。仮定法や命令法が特有の形式を持つように、直説法は定形という形式をとり、主語の人称や数によって変化すると考えることができるのである。

事を複雑にしているのが、原形に対する捉え方である。Quirk *et al.* (1985) では命令法と仮定法においても「原形」が共通に用いられると考える。しかしながら、今みたように、命令法や仮定法に用いられる原形と不定詞に用いられる原形とは本質的な相違がある。前者は法性に直接関連する形式であるのに対して、後者の不定詞は法性とは全く無縁の形式であり、むしろ不定詞における原形が「原形」的であり、命令法と仮定法（正確にはその一部）における原形の使用は偶然の一致と考えるべきであろう。<sup>5</sup> もし命令法や一部の仮定法の形式を原形と考えるならば、一般動詞の現在形における1人称と2人称の単数複数両形、3人称複数における動詞の形式も原形と考えても間違いではなくなるのである。しかし、少なくとも分類的な観点からみるならばこれらは区別して考えるべきである。定形性に段階性が見られるとするならば法性に関わる用法の範囲において当てはまるのであり、不定詞は法性の範疇からは除外すべきである。

以上のことから動詞の形式は次のような再分類が可能となる。<sup>6</sup>

### (1.8) Verb forms

#### Modal Forms (=Finite)

{	Indicative	{	現在形： 0 (zero)	(1, 2人称, 3人称複数)
			-s	(3人称単数)
			過去形： -ed	
	Subjunctive: 0 (zero)/ -ed			
	Imperative: 0 (zero)			

<sup>5</sup> 原形が命令法や仮定法の一部で用いられるのは偶然とはいえ、何らかの理由があることは十分に考えられる。この点については後述する。

<sup>6</sup> (1.8)に関連して変則定形動詞(Anomalous Finite Verbs)と呼ばれる一群の助動詞, *be, do, have* 動詞の変化形式についての問題が思い起こされるが、この点についてはここではふれない。

## Non-modal Forms (=Non-finite)

}	-en-form
	-ing-form
	Infinitive form: Bare infinitive/to-infinitive

(1.8)から定形とは実は法性と密接に関連する形式であるのに対して、非定形とは法性とは異質の形式、いわば非法的形式であるということが分かる。

さて、このように見てくると、動詞を文の中で使用するためには法性に関する要素を伴う必要があるということになる。言い換えると直説法現在時制のように法性に関与する形態素が存在しない(すなわち無標の)場合においても話し手の主観は反映されているということになる。また仮定法は過去形もしくは原形(ゼロ形式)が代用され、命令法は原形である。

動詞句は法性要素と主要部としての動詞によって形成される。<sup>7</sup>

#### 1.4 形容詞句

これまで名詞と動詞がそれぞれ主要部となる名詞句と動詞句について述べた。副詞は上述したように文型に関与することはないためにここでは省略してもよいであろう。従って形容詞について最後に検討する。

名詞が文の中で用いられる場合には限定詞と常に共起し、動詞はゼロ形式、三人称単数現在を表す*s*、過去形などの法性要素を伴わなければならない。形容詞には対応する要素があるであろうか。急いで付け加えるが、今考察しようとしている形容詞は修飾語としての形容詞ではなく、文型に関与する形容詞、つまり(1.1) から拾うならば *when he was younger* のように主として *be* 動詞に後続する述部要素としての、言い換えると叙述用法としての形容詞である。ついであるが叙述用法の対概念であるところの限定用法について述べておく。「叙述用法」という用語は英語の“*predicative use*”を訳したものであるが、「限定用法」に対応する英語は“*attributive use*”である。英語の“*attribute*”は「属性」という意味であるからこの用法の呼称としてなぜ「属性用法」という日本語が定着しなかったのであろうか。

---

<sup>7</sup> この点で、Fillmore(1968)が文の構成要素として *Modality* を認めたのは当時としては慧眼といえるであろう。

形容詞には限定的(restrictive)な用法がある。例えば、*a certain person/the chief excuse/the principal objection/the exact answer/the same student*などの形容詞は名詞の対象を限定していると言えるであろう(Quirk *et al.* 1985: 430)。少なくとも名詞を叙述してはいないということは理解できる。しかしなぜ“attributive use”が日本語では「限定的」として定着したのであるのか。その理由は実際のところは不明であるが、この名称は形容詞の前置用法の実態を表しているとは言えない。

安井(1996: 479)はこのような形容詞の語順には一定の傾向があり、「名詞との関係が密接なものほど名詞の近くに置く」として以下の例を挙げている。

### (1.9) a useless bulky red English book

つまり名詞の直前から左に「材料・所属」(*English*)、「色彩」(*red*)、「大小・形状」(*bulky*)、そして「評価」(*useless*)の順に並ぶ。ここから言えることは、「材料・所属」「色彩」「大小・形状」は名詞の特質すなわち属性そのものを表すということである。安井(1996)が「関係が密接なもの」というのはこの意味である。

しかも、これも傾向性の問題であるが、*bulky*と*red*の語順を考えると*a red bulky book*よりは*a bulky red book*の方が自然である(cf. Quirk *et al.* 1985: 1339)。これは主観性の観点から見ると興味深い。色彩を表す語彙はある程度一般的な常識として合意が成立しているという意味で客観的であるのに対して、大小の判断は相対的であり、主観的である。すなわち、主観性の強い語は主要部としての名詞からは遠ざかる傾向がある。上の*useless*のような「判断」を表す語が最も左に置かれるのはそのためである。

ある意味ではこの主観的な判断は名詞句内部つまり限定詞と主要部の間にはなじまない可能性があることも否定できないように思う。というのは上で述べたように限定詞はそれ自体が法的な特質を持つ要素でもあり、名詞句は一つの法的な世界を成しているともいえる。従って、すでに一定の法性に拘束された句の中にさらに主観的な判断を盛り込むことは余剰となるのである。<sup>8</sup>

---

<sup>8</sup> 条件を表す接続詞 *if* に導かれた節内では助動詞の生起には一定の制約があることが知られている。例えば、*If it will be fine tomorrow, ...* は非文とされるが、これも *if* 節は発話者の世界を表し、その中にさらに法性を表す助動詞を用いるのは余剰であることが理由である。日本語でも「もし明日雨だらうならば」という表現は引用でない限り非文とってよいであろう。

以上みたように、名詞に先行する形容詞は名詞の属性と密接に関連する形容詞であるとするならば、属性用法と呼ぶのが実態に即していると思われる(cf. Bolinger 1967)。

叙述用法の形容詞に話しを戻そう。「限定用法」とは異なり「叙述用法」という用語は主語の状態等を文字通り叙述することによって由来する。名詞や動詞は既に述べたように指示する対象を持ち、それは言語外の客観的物理世界、あるいは客観化された観念世界に存在すると考えることができる。<sup>9</sup> それに対して叙述用法の形容詞はその対象の存在が前提条件として必須である。<sup>10</sup> その対象の状態や状況に対する発話者の判断を形容詞が受け持つことになる。

名詞句や動詞句は主要部とそれぞれの法性に関わる要素によって形成されていた。形容詞句においてはそのような要素は見当たらない。この理由はこのような用法の形容詞がそれ自体で発話者の判断と関わる意味を持つことから、さらに法性をあらわす要素を必要とはしないことにある。

### 1.5 文法的主要部と意味的主要部

以上名詞、動詞、形容詞などの主要な語類は句として文中に取り込まれることをみてきた。

現代英語では文法的多義性(grammatical homonymy—Jespersen 1927:84 (Part VI))ともいわれる同一形態の語がいくつかの品詞に用いられるケースが少なくない。例えば *like* という語は動詞、形容詞、副詞、前置詞、接続詞などいくつかの品詞で用いられる。ということはこの語の語類は共起する要素によって決定されるということになる。例えば、*like* は以下のように「多義的」である。

- (1.10) a. Would you *like* me to get something for you? (Verb)  
 b. We must strive for greater uniformity so that *like* offenders should be treated in similar fashion. (Adjective)  
 c. He didn't identify himself, *like* deliberately, and we all sat there for an hour. (Adverb)  
 d. People expect rulers to live *like* rulers. (Preposition)

<sup>9</sup> 指示対象を外界に存在するか否かに関しては今少し慎重に考える必要がある。この問題を整理するには安井 (2001) が参考になる。

<sup>10</sup> 認知文法では概念をモノの実体(Thing)と関係の実体(Relation)に分けられ、形容詞は関係

- e. You look *like* you'd seen a ghost. (Conjunction)  
 f. Try to discover your guests' various *likes* and dislikes with regard to food.

—COBUILD<sup>1</sup>

上の *like* について我々はそれぞれの語類の違いを理解することができる。その根拠は、(a)では *like* の前に助動詞 *would* があること、(b)では主語名詞句 *like offenders* の *like* が *offenders* を「限定」修飾していること、(c)の *like* は *deliberately* という副詞を修飾し、(d)では名詞 *rulers* の前に位置しているという点では形容詞ともいえるが、動詞 *live* の直後という位置から *like* は前置詞であり、(e)では *like* に節が後続していることから接続詞、最後に(f)では *likes* が複数形であることは該当の句が *your guests'* という限定詞で始まっていることからわかる。この *like* は名詞である。すなわち語類はその語が生じる環境によって決まるということになる。

特にここで重要なのは動詞(a)と名詞(f)である。<sup>11</sup> この二つの *like* の環境を次のように記す。

(1.11) a. [would + like . . . ]<sub>VP</sub>  
           M + V

b. [your guests' + likes]<sub>NP</sub>  
       Det + N

(1.11a)では動詞(V)と法要素(M)が動詞句(VP)を形づくり、(1.11b)では名詞(N)と限定詞(Det)が名詞句(NP)を形成している。ここで注意したいことは、MとV、DetとNはそれぞれ互いに相互依存的であるということである。MはVを動機付け、逆にVはMを動機づけている。DetとNのペアについても同様のことがいえる。さらに、MとN、DetとVとの間にはそのような相互依存関係は存在してはいないことから、MとDet、VとMは相補的な関係にあるといえる。このような関係がみられることは(1.11a)と(1.11b)はさらに一般化が可能であることを強く示唆し

---

の実体といわれる。Langacker (1987: 183ff., 215ff.) 等を参照されたい。

<sup>11</sup> (b)の形容詞は叙述用法ではなく、副詞(c)と接続詞(e)は文型の構成要素とは考えないために対象とはしない。

ている。すなわちある語彙X（例えば*like*）があるとす。これは語類に関しては未指定である。XはMと共に初めてVとなり、XはDetと共に起ることによりNとなる。MとDetは相補的な関係にあるからこれらもさらに抽象的な範疇に一般化することも可能で、これを今仮にYと表記することにする。すると(1.11)は次の(1.12)のような式型となる。

$$(1.12) \quad \begin{array}{l} \text{a. } [Y + X]_{\text{ZP}} \\ \text{b. } Y \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{M} \\ \text{Det} \\ \emptyset \end{array} \right\} \\ \text{c. } Z \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{V / M} \underline{\hspace{1cm}} \\ \text{N / Det} \underline{\hspace{1cm}} \\ \text{A / } \emptyset \underline{\hspace{1cm}} \end{array} \right\} \end{array}$$

(1.12a)は、YとXはある句ZPを形成することを意味し、(1.12b)はYは矢印の右辺のM、Det、 $\emptyset$ のどれかを選択しなければならないことを意味する。ここで矢印の右辺の要素の数は有限であることに注意する必要がある。というのは、これは本書では語類を決定する要素という位置づけを与えているからである。従って(1.12c)のような一種の書き換え規則によって、Mを選択するとXは動詞として具現化し、Detを選択すると名詞として実現する。(1.11b)右辺の「 $\emptyset$ 」印は「ゼロ」形態素である。これを選択された時の句は（叙述的）形容詞句(AP)となる。

さて、(1.12)ではXは句の意味的な主要部であることから、これは変数的であり、その数も種類も無限である。Xは開かれた類に属する語彙がその位置に生ずる。それに対して、Yは統語的な範疇の種類を指定する機能を有し、これに属する語彙はごく少数の閉ざされた類である。ある抽象的な語は文として言語化するには常にこの閉ざされた類に属する語彙から該当する種類を選択し、それによって初めて文の中に取り込むことができることになる。その意味でYは語類を決定する要素と見なすことができる。従って、(1.11)において句の種類をVP、NPと表示し、以後本書でもこの習慣的な表示を用いるが、厳密さを期すならば次の(1.13)下線部のようにMP、DetPと表示するのが言語事実を良く反

映しているといえる。<sup>12</sup> 意味的な主要部は X としての *like* であるが、その統語的な種類を決定するのは Y なのである。

(1.13) a. [would + like ...]<sub>MP</sub>

M + V

b. [your guests' + likes]<sub>DetP</sub>

Det + N

## 1.6 前置詞句

これを最も良く物語るのが前置詞句である。本書で扱おうとする文型の観点から重要な範疇となる前置詞句について最後に述べなければならない。

英語では例えば *John lives in Kobe.* といった文の前置詞句は単なる修飾語としての副詞ではないことは上でも述べるところがあった。*John loves Kobe.* において目的語である *Kobe* が省略できないのと同じようにこの *in Kobe* は動詞 *lives* にとっては必須要素である。前置詞句は次のような構造を持つ。

(1.14) [P + NP]<sub>PP</sub>

この(1.14)の構造は、(1.12)でYに相当するPが全体の句の種類を決定していること、そしてPが有限の（おそらくはごく限られた数の）前置詞からなるということなどから(1.12)と整合的である。<sup>13</sup> 従って、(1.11)は前置詞に関する式型を加えて次のように修正する必要がある。

<sup>12</sup> 句の主要部が何かという議論は重要であるが、本書では機能範疇がその種類を決定するという立場をとる。

<sup>13</sup> 前置詞が閉ざされた類であるかどうかについては実際のところ慎重に考える必要がある。前置詞が他の代名詞、冠詞、助動詞などのように語彙にほとんど増減がないというのは事実ではないという報告もある。問題は前置詞の定義及び分類の問題でもあり、前置詞の中にも語彙の増減を許す類とそうではない類とを認めるべきである。



(1.15) a. [Y + X]<sub>ZP</sub>

$$b. Y \rightarrow \left\{ \begin{array}{c} M \\ \text{Det} \\ \emptyset \\ P \end{array} \right\}$$

$$c. Z \rightarrow \left\{ \begin{array}{c} V / M \text{ _____} \\ N / \text{Det} \text{ _____} \\ A / \emptyset \text{ _____} \\ P / \text{ _____ NP} \end{array} \right\}$$

以上本章では文型に関与する要素としての句の特質をみてきた。前置詞句については未解決の問題が多く残るとはいえ、当面のところ以下の三種類の句範疇を認め、これによって論じて行く。

- (1.16) a. NP (名詞句)  
 b. AP (形容詞句)  
 c. PP (前置詞句)

以上本章において文型を考える上で前提となる句について述べた。要点をまとめると次のようになる。

- (1.17) a. 語には開かれた類と閉ざされた類がある。  
 b. 文は句(Phrase)によって形づくられている。  
 c. 句は閉ざされた類の語と開かれた類に属する語によって成り立つ。  
 d. 語及び句の種類は閉ざされた類の語彙によって決定される。

文型は一つの動詞を中心にいくつかの種類 of 句が一定の配列に並ぶことによって生まれる形式である。英語では主語の後に定形動詞が位置することと句の種類が3種類と限定的であるためにその配列には一定の型があることが想定される。事実一見複雑多様な印象を抱くが、名詞句(NP)、形容詞句(AP)、前置詞句

(PP)の3種類のみが文型に関わることから英語は以下の(16)の文型に形式上まとめられるように思われる。

(1.18) 形からみた文型

I. *Be* 動詞型

- i. NP *be* NP[+Def]
- ii. NP *be* XP<sup>14</sup>
- iii. NP *be* AP PP

II. *Have* 型

- i. NP *have* NP
- ii. NP *have* NP XP
- iii. NP *have* VP

III. 「他動詞型」

- i. NP V NP
- ii. NP V NP XP
- iii. NP V NP PP
- iv. NP V NP PP
- v. NP V PP PP

IV. 「自動詞型」

- i. NP V XP
- ii. NP V

V. *to* 不定詞型

この(1.18)は *that* 節など節を後続させる文型が含まれていないなど完全とはいえず、場合によっては修正も必要であるが、形からみた文型としては大体は網羅している。具体的には次章から順に述べて行くが、このような純粋に形式に基づく文型はほとんど研究されてはこなかったように思われる。その理由は文

---

<sup>14</sup> XはN(名詞)、A(形容詞)、P(前置詞)のいずれかを表す。

型という用語からは学校文法でいうところの文型あるいはその変種が想起され、それですまされていたことを挙げるができる。これについては以下で論ずるが、もう一つの理由として、理論言語学の影響（の強さ）も考えることができる。例えば生成文法初期の能動文と受動文の対応関係に関する議論は実際は全く異なる複数の構文間の対応関係を見ようとするものであり、受動文における *be* 動詞の意味や機能に関する考察は全く欠落していた。本書は形式を重視する立場から受動文も *be* 動詞型の構文としてみなし、その他の *be* 動詞構文との関連性を考察するものである。

## 第2章 5文型の問題点

### 2.1 文型の誕生— C. T. Onions

文型という概念は英米ではそれほど一般的ではなさそうである。「5文型」という用語も筆者の印象では確立したものと受け取られてはいない。

5文型はC.T.Onionsの *An Advanced English Syntax* (1904)に由来するといわれるが、ここではその改訂版 Onions(1971)を検討する。同書は述部の形式として次の5つを提示している。

#### (2.1) ‘The five forms of the predicate’

a.	Subject	Predicate
	He	died
	My hour	is come
	The shades of night	were falling

b.	Subject	Predicate
		<i>verb    predicative adjective or predicative noun or predicative pronoun</i>
	Many	lay      dead
	Seeing	is      believing
	To err	is      human
	The meeting	stands      adjourned

c.	Subject	Predicate
		<i>verb      object</i>
	Rats	desert      a sinking ship
	Nobody	wishes      to know
	He	can      tell
	They	do think      what we are

c'.    Abel                      was killed (*verb*) by Cain (*adjunct*)

d.	Subject	Predicate
		<i>verb      two objects</i>

We	taught	the dog	tricks
I	ask	you	this question
We	asked	him	to speak

e.	Subject	Predicate		
		<i>verb</i>	<i>object</i>	<i>predicative adjective or predicative noun</i>

They	elected	him	Consul
He	thought	himself	a happy man
The thought	drove	him	mad
	Leave	me	alone

e',	Subject	Predicate		
		<i>verb</i>	<i>predicative adjective</i>	<i>adjunct or predicative noun</i>

He	was declared	a traitor	by the Court
----	--------------	-----------	--------------

—Onions 1971: 4-8

この Onions の特徴は一言でいえば細かなところにとらわれない鷹揚さにあるといえるであろう。具体的には以下の点が注目される。

- (2.2) a. 下段の *verb/predicative adjective or predicative noun or predicative pronoun* は *verb* など品詞としての概念と *predicative adjective or predicative noun or predicative pronoun* など機能的な範疇が混在。
- b. 文型(a)では *verb* がない: *is come/were falling* 全体を Predicate としている。
- c. 文型(c)では助動詞 *can* を‘*verb*’と見なす。
- d. 文型(c')の受動文では *was killed/was declared* を‘*verb*’として認定。

まず(c)の *can* が動詞と見なされている点からみていく。これは、英語母語話者の直感のある意味で反映しているのではないかと思われる点で興味深い。助動詞が語源的には動詞に由来するが、*OED* では見出しの語類としては動詞(v.)と指定されている。事実 *can* は ‘To have knowledge, to know of’の意味で、

**a1875** *KINGSLEY Poems, Little Baltung* 82 That cunning Kaiser was a scholar wise, And could of gramarye. (下線筆者) —*OED*, s.v. *can*

のように 19 世紀まで動詞として用いられている。

*OED* は *will* についても次の例を挙げている。

1820 *Gifford's Compl. Engl. Lawyer* 672, I..do hereby will and direct that my executrix..do excuse and release the said sum of 100*l.* to him.

一方 Jespersen(1961, IV)には *will* に関して以下のいずれも 20 世紀初頭の例がみられる。

How then does one *will* one thing, one another?

Whatever God *wills* is holy, just and good.

If only I *willed* to move away, I could move away. But, no! I shall not *will* it.

—Jespersen 1961, IV: 235-36

助動詞 *will* の動詞としての用法は現代英語にもみられ、*BNC* にも次のような例がある。

CB0 972 He *willed* us to do it.

—<http://sara.natcorp.ox.ac.uk/cgi-bin/saraWeb?qy=willed>

このように *can* には 19 世紀まで、そして *will* にはまれではあるが現在も動詞としての用法がみられることから *can*、*will* のような助動詞について英語話者は動詞的な直感を部分的には持つように思われる。

その他細かな点であるが *be* 動詞の扱いに一貫性がみられない。例えば(a)では *is coming* を一つの単位と見なしている（と思われる）が、(b)の *is believing* では *be* 動詞を *verb* と見なし、(c')と(e')では *was killed* と *was declared* がいずれも全体が *verb* と見なされている。

これは、機能的な概念であるところの述部(*predicate*)と語類範疇としての動詞(*verb*)の区別、あるいはそれぞれの概念規定がなされていないことが原因である。一般的に考えてもある分類を行なうに際して、その基準となる前提条件が簡潔であり、均質的であることはもっとも重要である。文が主語と述部からなるという場合の主語及び述部は伝達上の機能的な概念である。しかしこれはどの文についても当てはまる特性であるから、分類的な概念としては機能しない。それに対して、動詞(*verb*)は語類を区別するための用語である。機能的な方式の不備を形式上の用語によって補完する必要があったのである。

## 2.2 Quirk *et al.* 1985の文型—7文型

機能的な方式を一步進めたのが Quirk *et al.*(1985)の次の 7 文型である。

- |       |    |                                                  |               |
|-------|----|--------------------------------------------------|---------------|
| (2.3) | a. | The sun is shining.                              | S + V         |
|       | b. | The lecture bored me.                            | S + V + O     |
|       | c. | Your dinner seems ready.                         | S + V + C     |
|       | d. | My office is in the next building.               | S + V + A     |
|       | e. | I must send my parents an anniversary card.      | S + V + O + O |
|       | f. | Most students have found her reasonably helpful. | S + V + O + C |
|       | g. | You can put the dish on the table.               | S + V + O + A |

—Quirk *et al.* 1985: 721

5文型との最大の相違は範疇‘A(dverbial)’の導入である。上の(2.3d) (2.3g)におけるAは一般的な‘Adverb’とは区別され、主として場所を表す句であり、しかも、既に触れた*John lives in Kobe*の*in Kobe*.と同様、上の*in the next building*と*on the table*はそれぞれの文では不可欠の要素である。

この副詞的な範疇Aの導入によって、ある意味では飛躍的に文型の説明力が増したことは事実である。ついでながら同書は動詞*get*は6種類の文型が可能であるとして、次の例を挙げている。

- |       |    |                                 |               |
|-------|----|---------------------------------|---------------|
| (2.4) | a. | He'll get a surprise.           | S + V + O     |
|       | b. | He's getting angry.             | S + V + C     |
|       | c. | He got through the window.      | S + V + A     |
|       | d. | He got her a splendid present.  | S + V + O + O |
|       | e. | He got his shoes and socks wet. | S + V + O + C |
|       | f. | He got himself into trouble.    | S + V + O + A |

—Quirk *et al.* 1985: 720

この7文型は用語のほとんどが主語(Subject)、目的語(Object)、補語(Complement)など機能的な概念によりまとめられていることも評価してよいであろう。しかし、ここでも動詞(Verb)という語類の概念が使用されている。これはおそらく述部(Predicate)という用語が動詞を含めてその右側の要素をすべて含めた構造を意味するために避けられた緊急避難的な方策であると思われる。

このように用語上の問題はある程度は解決されているともいえるが、細かにみるならばまだすべてが解決されているわけではない。ここでは、第一に *be* 動詞の扱いが不徹底という点、第二に副詞的範疇 A の問題、の 2 点を考えてみ

る。

まず、上(2.3a)では *is shining* 全体が V と考えられていることは明らかであろう。すると *This book is interesting.* の下線部も V と見なされるのであろうか。いわゆる補語の位置にある *shining* と *interesting* は互いに別の文型に属するほど異質な要素なのであろうか。さらに受動文で用いられる *be* 動詞はさらにその区別は困難となる。例えば、*The shop was closed.* という文は「(その時) 閉められた」という受動態として動詞的な解釈と、「開いてはいなかった」という状態的つまり形容詞的な解釈が可能である。この *was* に二つの文型を与えるのは直感的に無駄であろう。

次に、副詞的範疇(A)は文型の一部として（つまり必須要素として）認定されているが、これが必須要素であるのは *put* や *live* など動詞に限られることではない。形容詞にも必須要素を要求する類がある。例えば、*Mary is fond of Lucy* などにおける *of Lucy* を副詞的範疇とみなすことはできないであろう。その他にも *He is willing to pay* / *Take care of yourself* などの必須要素をどのように扱うのかは大きな問題である。

ここで注意したいのは‘Adverbial’とはいえ、これは形式としては実質的には前置詞句(PP)であることである（この点に関しては後述）。もちろん前置詞句ではない *there* とか *here* のような語もあるが、これらは代名詞的であり根底には場所を表す前置詞句があると考え、場所を表す要素は前置詞句ということになる。Adverb はその定義上文型を構成する要素とはいえ、Adverbial という紛らわしい名称は避けるのが望ましい。

### 2.3 主語・目的語・補語の定義

Quirk *et al.* (1985) の 7 文型は一定程度評価できる面があるとはいえ、機能的概念である主語(S)、目的語(O)、補語(C)について今一度吟味しておいた方が良いでしょう。我々は S、O、C という用語はほぼ所与の前提としてとらえ、ことさらに問題にすることもない。例えば次の(2.5)の文では *Sir Sean Connery* が主語であるという。

(2.5) SIR Sean Connery today backed calls by the SNP for a separate Scottish Olympic team.

そしてこの主語が「支持する」という行為を行い、その行為の対象である「要



求(calls)」が目的語である、という説明を行なう。しかし、行為を行なうものが主語かといえばそうではない。そのことは次の(8)からも明らかである。

- (2.6) a. You resemble your mother very closely. —CIDE  
 b. It's Sunday today

このような例は枚挙にいとまがない。安井(2004:51)の言葉を借りると主語には「万能薬的処方箋はない」のである。以下では、このような「主語」「目的語」そして「補語」といった機能的な概念が句型を考える上ではたして有用な概念であるのかどうかという点を検証してみる。

Quirk *et al.* (1985)は主語について統語的特性と意味的特性という二つの観点から次のようにあげている。

(2.7) SYNTACTIC FUNCTION of Subject

- a. A subject is obligatory in finite clauses except in imperative clauses.  
 b. In finite clauses the subject determines the number and person.  
*Nancy knows my parents.*  
 c. The subject normally determines number of the subject complement.  
*Caroline is my sister.*  
 d. The subject determines the number and, where relevant, the person and gender of the reflexive pronoun as direct object, indirect object, subject complement, or prepositional complement.  
*I shaved myself.*  
 e. The subject requires the subjective form for pronouns that have distinctive forms.  
*I like him.*  
 f. There is a systematic correspondence between active and passive clauses.  
*My son has prepared lunch today.*  
 ~Lunch has been prepared by my son today  
 g. The subject is repeated in a tag question by a pronoun form.  
*The milk is sour, isn't it?*  
 h. The implied subject of a subjectless nonfinite or verbless clause is normally identical with the subject of the superordinate clause.

Susan telephoned before *coming over*. —Quirk *et al.* 1985:725-6

ここでのポイントは主語は文(Clause)では欠かすことのできないものであり、主語の数と人称により動詞の形態が決まるという点である(2.7a, b)。動詞の形態を決める要素として他に時制があるが、英語では時制形式は過去形と非過去形の二つしかなく、そのどちらの形をとるのかは発話者の判断によっている。従って、動詞の形式を決めるという明確な特性を有する主語は文法分析の点でも意味のある用語のように思われる。

一方 Quirk らは主語の意味的な特性についても次のように述べている。

#### (2.8) SEMANTIC PROPERTIES of Subject

- a. The subject is typically the theme (or topic) of the clause.
- b. It typically refers to information that is regarded by the speaker as given.
- c. In a clause that is not passive, the subject is agentive if the agentive role is expressed in the clause.

—Quirk *et al.* 1985:726

この(2.7)と(2.8)の記述をみても、(2.7)の統語的な特性が具体的であるのに対して、(2.10)の意味的な記述には断定を避ける表現(*typically* など)が目立つことがわかる。意味的な特性については形との関連で後に触れることもあるが、少し上の(2.6)で言及したようにすべての主語が(2.10)のような特性を示すわけではない。

ところで、主語の形式上の特性が有効性を持つことを述べた。しかし、これは注意を要する。なぜならば、形式主義を徹底するならば主語は名詞句(NP)以外の何者でもなく、動詞(正確には定形動詞)の直前に生ずる名詞句が主語であるという述べ方が正しいからである。そして上でみた特性も主語という機能的な用語を用いることなく、「定形動詞の左側の名詞句がその形式を決定する」というように規定することができる。

次に目的語(O)についても Quirk らは統語的及び意味的特性を挙げているのでそれらを簡単に検討する。まず統語的特性としては以下である。

#### (2.9) SYNTACTIC FUNCTION of Object

- a. The object function requires the objective form for pronouns that have distinctive case forms.

*They amuse me.*

- b. If an object is coreferential with the subject, it usually requires a reflexive pronoun.

*You can please yourself.*

- c. The object of an active clause may generally become the subject of the corresponding passive clause.

*We have finished the work.* ~ *The work has been finished.*

- d. The indirect object generally corresponds to a prepositional phrase.

*I'll send Charles another copy.* ~ *I'll send another copy to Charles.*

- e. The indirect object can generally be omitted without affecting the semantic relation between the other elements.

*David saved me a seat.* ~ *David saved a seat.* ~ *David saved me.*

—Quirk *et al.* 1985:726-7

目的語（ここでは直接目的語に限定する）を統語的に特徴づける場合最も重要な点は目的格の形式をとるという(2.9a)であろう。しかし、目的格は代名詞にしかみることのできない特徴であり、通常の名詞には主格との区別は存在しない。しかも代名詞の主格と目的格をみると、主格は主語の位置でのみ使用される格であるのに対して、目的格は目的語に限られるわけではない。例えば、よく知られた次の例を見よう。

#### (2.10) It's me. / Me?

ここでは「目的格」の代名詞が補語の位置に生じ、同じ「目的格」*me* が単独で用いられ、場合によっては主語の位置でも可能である。我々はどちらかという主格と目的格では主格が無標の格で、目的格は有標の、つまり特殊な格であるかのような印象を持つ。そのような印象をもたらす要因は辞書の見出しとして *him* という目的格形ではなく *he* という主格形が採用されていることがあるのではないかとと思われる。

しかし、上のようにみると主格がいかに特殊な有標 (marked) の格であり、目的格が使用範囲の広い無標(unmarked)の格であるということがわかる。そうする

と一つの想定として、目的格には無標の形態の名詞が生じ、主格に有標の形態の名詞が生ずると考えることも可能である。すなわち特定の形態的变化をすることのない最も中立的な無変化の名詞を目的語とするのである。元々格変化は語順が固定しない言語の特性である。古英語時代がそれにあたる。しかし次第に格変化語尾が弱化し、同時にその過程で語順の固定化が進行した。その結果 SVO の語順に固定することとなったが、二つの名詞句の間に動詞が割り込んでいる。これは動詞の前か後ろかという位置によってそれぞれの名詞句の機能的な分化を示すことが可能となることであり、格変化語尾による主格や目的格といった形態的な区別が不要となる土台が準備されたことになる。人称代名詞の二つの変化形は過去の痕跡と考えてよいであろう。従って人称代名詞の格変化形は例外的な現象であり、それ自体にはそれほど重要な意味はないといってよい。

むしろ「目的語」ということばから我々がすぐに連想するのは「動作の対象」を表すということではないかと思う。そのことは Quirk らでも目的語の意味的な特性として次のように述べられている。

#### (2.11) SEMANTIC PROPERTIES of Object

- a. The direct object typically refers to an animate being that is the recipient of the action.

*Norman smashed a window in his father's car.*

- b. The indirect object typically refers to an animate being that is the recipient of the action.

すなわち、意味的には目的語は動詞で表される動作の「受け手(recipient)」となるのが典型であるという。これも'typically'という修飾語が含意しているようにすべての目的語に当てはまるわけではない。例えば上の(2.6a)の動詞'resemble'の目的語が「受け手」と見なすことができないのは自明であり、また次のような例も「受け手」でも「動作の対象」でもない。

- (2.12) a. Mary painted a flower.

- b. John built a house of his own.

この例の目的語は動詞で表される動作の結果もたらされたもの（「結果の目的

語」といわれる)であり、*flower* や *house* に対して何らかの動作が加えられたわけではない。

以上みたように、「目的語」は統語的には目的格である必要はなく、意味的にも動作の対象や受け手である必要はない。言い換えると便宜的な用語である。ただ一つすべての目的語を特徴づけていることはそれが名詞句(NP)であるという形態である。

最後に「補語(C)」について検討する。補語は主格補語と目的格補語との二つがあるが、ここでは主格補語について検討する。Quirk *et al.* では補語の統語的特性として次のような点を挙げている。

### (2.13) SYNTACTIC FUNCTION of Complement

- a. If it is a noun phrase, the subject complement normally has concord of number with the subject, and the object complement normally has concord of number with the direct object.
- b. If it is a reflexive pronoun, the subject complement has concord of number, person and, where relevant, gender with the subject.
- c. Unlike the object, the complement cannot become the subject of a corresponding passive clause.
- d. The complement can be questioned, but there is no one general way of doing so.

(Cf. What is John? Who is John? How is John? —SW)

- e. If the subject complement is pronoun, there is distinction between subjective and objective forms.

This is *he*. <formal>      That's *him*.

しかし、この特徴付けに関する限り、実は、この文法書にしては珍しく、かなり重大な問題あるいは見落としといっても良い点が二つある。それは補語が名詞あるいは代名詞であるという前提に立っているという点である。第一の問題は、特に(2.13c)で言及されている補語は受動文の主語になることはできないという点である。これは名詞という前提に立つ限り触れざるを得なかったという印象すら受けるのであるが、補語を受動文と関連づけることには何ら意味はないことである。なぜならば補語は一般動詞とは対立するともいえる*be*動詞と共

起することを原則とするからである。後に触れるように一般動詞と共起する可能性もあるが、これはあくまでも例外である。

この点は Quirk *et al.* が挙げている次の補語の意味的な特性から垣間みることができる。

#### (2.14) SEMANTIC PROPERTIES of Complement

The complement typically identifies or characterizes the referent of the clause element to which it is related. —Quirk *et al.* 1985:729

この記述は「補語は主語や目的語を同定するか特徴づける」ということを述べているのであるが、「同定する」と「特徴づける」とは本質的に全く異なる特性である。「同定する」は基本的には「AはBである」ということである。この場合注意しなければならないことは、この「AはBである」には次の二つのタイプがあるということである。

- (2.15) a. John is the teacher.  
b. John is a teacher.

(2.15a)では‘John’という人間と‘the teacher’という人物はもともとは別々の人間あるいは概念を表している。例えば今学校で最も教師らしい教師あるいは人気のある教師は誰かなど特定の教師が話題となっているコンテキストがあるとする。この段階ではまだ *John* との直接的な関係はなく、‘the teacher’という概念のみが存在するにすぎない。(a)はその特定の教師という概念と *John* とを結びつけていることになる。この文は「等号文(Equative Sentence)」<sup>1</sup>と呼ばれるが、その名の通り、 $A=B$  ∴  $B=A$  という関係が次のように成立する。

- (2.16) John is the teacher. ⇔ The teacher is John.

それに対して(2.15b)は「Johnは教師をしている」すなわち *John* という人間が

---

<sup>1</sup> Anderson(1977: 54)は等号文として *The man I want to marry is the guy in the corner.*を示し、このような文は主語も補語も意味的には差がなく、主題的な相違のみがあるとしている。この文も主語と補語の位置を入れ替えることは可能である。その他安井(2008)等参照。

持っている特質・属性を述べている文である。そのため、(a)の等号文とは異なり、むしろ所有文に類似している。従って(2.16)のような関係は成立しない。

(2.15b)の‘a teacher’は名詞句であるが‘the teacher’とは異なり特定の対象を指示しているわけではなく、教師という特質あるいは抽象的な概念を表している。その点「一人の教師である」という日本語は誤解を招きやすい。このような不定冠詞を用いた場合には「同定」しているわけではなく、*John* の特徴付けを行っている。すなわち *a teacher* は抽象的な概念を表している。本書では(2.15a)を等号文、(2.15b)を属性文と呼ぶことにする。但し、不定冠詞を用いた名詞句すべてが属性文ということでは当然ない。

第二の問題は補語に最もふさわしい語類は実は名詞ではなく形容詞であるということである。上の(2.15b)は主語の属性を表すと述べた。属性はその名称が示すように、具体的なモノを指し示すのではなく、抽象的な特質を表す。従って、語類としては形容詞が最もふさわしいことになる。

さて以上のことから、補語として *Quirk et al.* が列挙した特性のほとんどは当てはまらないことになる。これは文型を表す用語として補語(C)は使用することは望ましいことではないことを意味する。補語は特に上で触れることがあったように *be* 動詞の構文に生ずるものであることを考えるならば、*be* 動詞と補語は相互に依存的な関係にあることになり、記述として補語を使用することは余剰でもある。*Be* 動詞構文は後続の要素として形容詞をとることを明示しておけばよい。

5文型あるいは7文型はともに機能的な概念と形式的概念とが混在している点で文型の記述としては不徹底な面があることを述べた。しかも、特に英語学習という観点からすると、機能的な概念は特に文の意味が分からなければそれが補語なのか目的語なのか判別することができないということがある。例えば、次を見てみる。

(2.17) a. John turned the table.

b. John turned liberalist.

この文は語の配列としては「名詞-動詞-名詞」で同一である。しかし、動詞に後続する名詞が(a)では定冠詞が先行し、(b)では無冠詞であるという形式的相違がある。このことから我々は(a)は具体的な物体に対して何か動作を行ったこと

を理解し（本書第三章参照）、(b)の *liberalist* は具体的な人を指し示してはいないと判断できる（第一章(4)参照）。そして類例として *John turned red* を思い浮かべる場合もあるであろう。すなわち、問題の名詞が目的語であるのか補語であるのかという判別には形式上の判断が前提として存在することになる。

しかも動詞に後続する要素としては実際のところ次の 3 つの要素しか存在しない。

- (2.18) a. 形容詞句  
 b. 名詞句  
 c. 前置詞句あるいは副詞句

そのそれぞれにおいて次のような意味的な特性を観察することができる。

- (2.19) a. 形容詞句が後続する場合は、基本的には、主語の状態あるいは特性等を表す。→<である(BE)>型  
 b. 名詞句が続く場合は、基本的には、動詞によって<影響>を受ける対象を表し、動作的である。→<する(DO)>型  
 c. 副詞句（前置詞句）が来る場合はそのどちらにもなる。

以上のことを前提として形に基づく文型を述べたいと思う。



## 第3章 Be動詞型

### 3.1 Be動詞の特質

従来の5文型では *John went to London.* / *John hid himself behind the curtain.* における必須の前置詞句の問題や *Mary is fond of Lucy* / *Take care of yourself* / *He is willing to pay.* などの形容詞補部の扱いの問題は説明が不可能であることをみた。また7文型においても場所的意味を表す必須要素としての前置詞句は問題がないが、上の (*fond*) of *Lucy* / (*take care*) of *yourself*、及び (*willing*) to *pay* などは副詞要素 (Adverbial) と見なすことには無理があることをみた。

動詞、主語、目的語、補語といった用語は機能的な概念を表す。しかしその場合当然、これらの用語の定義付けが必須であるが、それは統語的にも意味的にも不可能であった。それにもかかわらずこのような文型が採用され、教育現場のみならず場合によっては文法研究の専門分野においても頻用されている理由をつきつめれば「便利である」という実用的発想ではないかと思われる。

それに対して、これらの機能的な概念は定義が不可能ではあるが、形式的な曖昧性は全くない。しかも機能的な概念と思われる主語や目的語といった用語はむしろ不要であり、主語の場合は実質的には述語動詞の前の名詞句、目的語の場合は述語動詞の直後の名詞句と考えても何ら支障はなかった。また補語では共起する述語動詞が *be* 動詞など状態を表す動詞であり、補語の語類にも形容詞という特性があることを述べた。

以上のようなことから文型は純粋に形式的用語を用いて記述し直すことが必要である。

以下 *be* 動詞の構文を考えるが、その前に *be* 動詞構文は実際のところ予想以上に多様に富むことをみたいと思う。特にその主語に生ずることが可能な語類は単純な名詞とは限らない。

まず *be* 動詞構文の主語には前置詞句が生ずることができる。

- (3.1) a. *Behind the hedge* is difficult to see. -Jaworska 1986  
 b. *Between six and seven suits* her fine. -*ibid.*  
 c. *During the vacation* is what we decided. -Quirk et al. 1985:685  
 d. *On Tuesday* will be fine. - *ibid.*

(3.1a)をみてみよう。ここで「見ようとしている」対象は *the hedge* そのもので

はなくその背後の場所である。従ってここでは *behind* という前置詞が特定の場所的な意味を持ち、その意味が主語となっているといってもよい。(3.1b)(3.1c) もそれぞれ「6時と7時の間」「休暇中のこと」など前置詞自体が持つ意味が重要である。その点(3.1d)では前置詞 *on* は省略することも可能であることから、この *on* と *behind, between, during* といった前置詞との間には何らかの相違があると思われる。

前置詞句主語文は時に *be* 動詞以外の一般動詞でも次のように可能である。

- (3.2) a. *Under the table* pleases our dog. –SW  
 b. *Under the sink* stinks. –SW  
 c. *Across the street* is swarming with bees. –Jaworska 1986  
 d. *In capital letters* will have the best effect. –*ibid.*

しかし、これらの動詞もここでは状態的な意味を持つことが前置詞句を主語としていることを可能にしていることが考えられるが、正確な理由は不明である。

一方、前置詞 *to* は主語となることは困難である。

- (3.3) a. *In Paris* seems to be where they first met. –Jaworska 1986  
 b. \**To Paris* seems to be where they went. –Chametzky 1985  
 c. \**To Jamaica* seems like a good goal for our boat trip. –*ibid.*

しかし、次のような場合には可能である。

- (3.4) a. *To York* is not very far. –Quirk *et al.*  
 b. From here to Philadelphia is only a hundred miles. –*ibid.*  
 c. It's only a hundred miles from here to Philadelphia. –*ibid.*  
 d. It's not far to York. –*ibid.*

「遠くはない」という判断には<起点>が含意されていることは明らかである。従って、(3.4a)には「ここから」が省略されていると考えられる。(3.4b)のように<起点>と<着点>が明示されると(3.4c)のように形式上の主語 *it* を用いた構文が可能となる。従って(3.4d)においても例えば *from here* などの<起点>が省略さ

れていることになる。

<起点>と<着点>は概念としては対等であるが、言語的には対等ではない(池上 1984 参照)。(3.4)では、表現としては<着点>のみが指定されているが、<起点>が含意されていた。しかし、次の(3.5)では<起点>が明示されているが、ここでは<着点>は含意として含まれているとはいえない。この非対称性がなぜもたらされるのかについてここで議論する余裕はないが、興味ある現象である。

- (3.5) a. \*From Iowa City makes an odd origin for our boat trip. –Chametzky 1985  
 b. \*From Paris seems to be where they came. –*ibid.*

ついでながら(3.4c, d)における *it* は「距離」を表すとされる。また、*It's Sunday today.* のような文では「時間」を表すともされる。しかし、この *it* にそのような意味があるとは思われない。むしろこのような *it* は後続の前置詞句を受ける仮の主語ではないかと考えられる。その意味では通常の形式主語構文である次と変わるところがないのである。

- (3.6) a. *It's wrong to tell a lie.*  
 b. *It's foolish to do such a thing.*  
 c. *It's a pity (that) you can't come.*  
 d. *It depends on you whether we go or not.*

(3.6)で *it* は後続の斜体部を受ける形式主語である。後続の意味上の主語が(a) (b)では不定詞、(c) (d)では節であるが、このうち不定詞も形式としては前置詞句であることに注意しなければならない。このような *to* は不定詞の標識といわれるが、語類としては前置詞である。

以上見てきたように、ある種の前置詞句は文の主語となることができる。そしてその場合前置詞の(特に場所的な)意味が重要となることでもあった。しかし、前置詞 *to* を伴う句が主語となるケース、すなわち不定詞主語構文では事情が異なる。

- (3.7) a. *To arrest her on insufficient evidence would be dangerous.*

–Jespersen MEG

- b. *To have seen him again would have pained me.*
- c. *To argue that, as primates, we should be able to fall back on a herbivorous or vegetable diet without any damage to ourselves is to miss the point.*

-D. Morris, *The Human Animal*

この(3.7)における前置詞 *to* はほとんど意味を持たない。紙幅の都合で詳しく述べる余裕はないが、ここでの *to* は因果関係を表している。つまり(a)では「彼女を逮捕すれば危ないことになる」という意味であり、(b)では「もし再会していたら当時は苦しんでいたでしょう」という意味であり、(c)では「草食をしていれば安心だなどと考えると大事な点を見落とすことになる」という意味である。因果関係は基本的には出来事と出来事との間に成立する関係である。従って、この意味関係は *to* 不定詞に限って見られるわけではない。*and* などの接続詞を用いることによって、また分詞構文などにおいても因果関係は成立する。すなわち、因果関係はもっぱらその意味を持つ特定の語彙を使うことがなくても、動詞が二つ含まれる文ではほぼ常に成立する意味関係といえる。ということは前置詞 *to* あるいは接続詞 *and* は何らかの補助的な役割を果たし、それら自身が積極的に意味的貢献をしているわけではないということになる。

以上 *be* 動詞の主語には前置詞句も生ずることが可能であることを見てきた。しかしこの構文はさらに形容詞や副詞も主語として可能なようである。Radford(1981: 210)には次のような例が見られる。

- (3.8)
- a. *Rather plump seems to be how he likes his girlfriends.*
  - b. *Why she is leaving seems to be an obvious question to ask.*
  - c. *In Paris seems to be where they first met.*
  - d. *On Tuesdays seems to be when she goes shopping at Harrod's.*
  - e. *A little too carefully seems to have been how he addressed the judge.*
  - f. *For the Prime Minister to resign seems to be unthinkable.*

特に(3.8a)と(3.8e)はそれぞれ形容詞と副詞である。前置詞句主語文にしても、このような形容詞あるいは副詞主語文にしても、それぞれの動機付けについてはまだ不明のところが多い。しかし、これまで述べてきたところから *be* 動詞の特質の一端は明らかになったと思う。一般的に例えば *drink* という動詞であればその主語は人であり、目的語は液体状の物質という意味的な制約が働く。それ

が *drink* 自身が持つ意味であるといってもよい。しかし *be* 動詞について上でみてきたような事実は *be* にはそのような意味的な制約を課す能力は持たないということの意味する。それでは *be* はいかなる意味・機能を有しているのだろうか。

*Be* 動詞は「繋ぐためのことば」ということから繫辞(Copula)とも呼ばれる。その意味では動詞も程度の差こそあれ何かと何かをつなぐ機能は果たしている。例えば *drink* の場合はその動作を行なう主体とその動作の対象とを何らかの行為によって繋ぐが、この繫辞を含む文では何らかの具体的行為は存在しない。従って、言い換えると *be* は関係自体を表し、それ自体に語彙的な意味があるわけではない。この語彙化は言語によって多様である。Tagalog 語のようにまったく *be* 動詞に相当する語彙を持たない言語もあれば、いくつかのタイプの語彙を持つ言語もある(cf. Pustet 2003)。

それに対して英語は *to become big/to feel good/to look nice/ to remain intact* など疑似的繫辞を含めるとかなりの表現を持つ。これらの表現に共通してみられることは「A は B である」という状態的判断であり、*be* はその判断に直接的に関わる記号ということになるであろう。

### 3.2 等号文: NP[+Def] – *be* – NP[+Def]

第2章で言及したように、「A は B である」文には等号文とそれ以外のタイプとの二つの種類がある。ここでは等号文をみる。この文の最大の特徴は次のように主語・補語ともに「定」の名詞句が来ていることである。

- (3.9) a. The pride of the village is the swimming pool. –BNC  
 b. The bridge is the council's responsibility. –BNC  
 c. If the Universe is the sort where an astronaut can do a round trip in a straight line, it has no edge or boundary. –BNC

前章でみたように、補語に生じる語類として形容詞が最も適切なのはであるにもかかわらず、この等号文の場合は名詞句である。その点でもこの文は特殊であるが、主語にも補語にも定の名詞句が生じているということは、この文には二つの別々の定の概念が前提として存在しているということに注意すべきである。(3.9a)では「村の誇り」と「(特定の) プール」であり、(3.9b)では「(特定の) 橋」と「議会の責任」である。つまりこの等号文は数学の等号のように二

つの独立した概念が等価であることを示す。従って順番を入れ替えた文も成立する。

- (3.9') a. The swimming pool is the pride of the village.  
The council's responsibility is the bridge.
- b. If the sort where an astronaut can do a round trip in a straight line is the Universe, it has no edge or boundary.

それに対して等号文ではない *be* 構文は主語の属性を表すことが基本であるので以後これを属性文と呼ぶ。従って、あえて数学記号を使用すると  $A \subset B$  と表記することができるであろう。これは「A は B に含まれる」ということを表す。つまり、主語 A は属性 B に含まれその範囲の外に出ることはないということになる。<sup>1</sup> 属性文は主語となっている名詞についての叙述であるからその他に対象とする実体を必要とすることはない。

等号文では主語も補語も等価であるため次のような疑問文では二つの回答が可能である。<sup>2</sup>

- (3.10) “Who is the leader?”
- a. John is the leader.
- b. The leader is John.

英語の疑問文は *wh* 要素の前置と主語と操作詞倒置という二つの操作を必要とする。<sup>3</sup> すなわち(3.10)の疑問文は

- (3.11) a. Who is the leader

<sup>1</sup> この点で興味深いのは後に触れる *have* 構文との関係である。例えば *A have B* という文では *be* 動詞構文とは逆に、B が A に含まれることは明らかであろう。つまり  $A \supset B$  という関係になる。この場合も基本的には「A は B という属性を持つ」という意味を持つ。すなわち、*be* 構文も *have* 構文も属性を表すという共通の特性を持つことになる。

<sup>2</sup> 等号文については安井(2008)が詳しい。尚、Huddleston and Pullum(2002: 266)は等号文の特性を「特定の(specifying)」と呼ぶ。

<sup>3</sup> Subject-operator Inversion と呼ばれる。操作詞(Operator)とは *be* 動詞、助動詞、*do* 等、別に変則定形動詞(Anomalous Finite Verbs)とも呼ばれる 24 個の動詞。

## b. The leader is who

のような二つの構造が基底となっていことになる。(3.11a)では主語が疑問の対象であるからこれ以上の操作は関係しない。しかし(3.11b)は補語が疑問化されている。英語では疑問詞は常に文頭に来なければならないため、*who* を文頭に移動する。また英語の疑問文は主語と操作詞を入れ替えなければならない。すなわち(3.11b)は次のようなプロセスを経ることによって(3.10)の疑問文となることになる。

(3.12) The leader is who ⇒ Who the leader is ⇒ Who is the leader

ついでながら助動詞が含まれている場合はこのような曖昧性はない。次参照。

(3.13) a. Who will be the leader?

b. Who will the leader be?

いずれにせよ等号文は *be* 動詞型としては特殊である。*Be* 動詞型の基本的特性は主語についてその特性や状態の観点から叙述することにある。

3.3 属性文: NP - *be* - XP3.3.1 NP - *be* - NP[-Def]

*Be* 動詞型では *be* に後続する要素は形容詞が典型であるが名詞句が生ずる場合がある。しかしこの場合の名詞句は等号文とは異なり不定の名詞句(-Definite)である。Huddleston and Pullum(2002: 266)は *be* 動詞文には等号文に相当する「特定の(specifying)」と属性文に対応する「帰属的(ascriptive)」用法があるとして次の例を挙げている。

(3.14) a. His daughter is very bright / a highly intelligent woman. [ascriptive]

b. The chief culprit was Kim. [specifying]

(3.14a)から明らかなように *a highly intelligent woman* は名詞句であるが、客観的に一人の女性という人間を表すのではなく、*his daughter* が「聡明である」ことすなわちその属性を表し、それは抽象概念である。そのことは関係詞を後続させた場合その関係代名詞は次のように *who* ではなく *which* が用いられることか

らもわかる。

- (3.15) His daughter is a highly intelligent woman, *which*/\**who* he has wanted her to be.

Quirk *et al.* (1985) にも以下のような例がある。

- (3.16) a. He imagined himself to be an artist, *which* he was not. –Quirk *et al.* 1985:1246  
 b. Anna is a vegetarian, *which* no one else is in our family. –Quirk *et al.* 1985:1258  
 c. He is a teetotaller, *which* I am not. –Quirk *et al.* 1985:1260

(3.16)の関係詞 *which* の使用は主節と関係節ともに補語である場合に限られるようであり、まだまだ検討すべき余地があるが、いずれも *be* 動詞に後続する不定の名詞句が生物としての人間を表さない場合があることを示している。

このように *be* 動詞に後続する名詞句が抽象概念である属性を表すとすると、無冠詞の名詞句が上の *Worcester* の例のようにその位置に生じてもおかしくはない。

また次の例は無冠詞であることによって動詞の意味も変えられた例である。

- (3.17) I would never have believed you'd turn *traitor*. –*CIDE*

動詞 *turn* は次のように他動詞用法を持つ動詞である。

- (3.18) a. He *turned* his head at the sound of her voice.  
 b. She *turned* the door knob and opened the door quietly. –*CIDE*

これらの用法の *turn* は具体的な動作を表すことから後続の名詞句は常に冠詞を伴う。従って、(3.17)のように無冠詞の名詞が続く場合は他動詞の用法ではなく、自動詞的な用法ということになる。後にも触れるが、一般的に次の(19)のような構造は他動詞の構文である。



## (3.19) NP + V + NP

しかし、この構造で、目的語としての名詞句 NP に名詞句であることを示す記号ともいふべき冠詞や複数語尾を欠いている場合は名詞が抽象化すると同時に動詞は非他動詞化する。従って、例えば *become* のように本来から自動詞の場合は、普通名詞には冠詞が伴う。この *turn* のような現象は形式と動詞の意味との関係が直接的に反映したケースである。

3.3.2 NP - *be* - AP

以上述べたように *be* 動詞に後続する不定名詞句は抽象的な属性の意味を持つ。Quirk *et al.* (1985: 412)に次のような例がある。

- (3.20) a. that concrete floor ~ That floor is concrete.  
 b. Worcester porcelain ~ This porcelain is Worcester.  
 c. those apple pies ~ Those pies are apple. <informal>

これらの例は *be* 動詞の直後と名詞の直前という二つの位置の特性を物語るものとして興味深い。形容詞が名詞の直前に生起する場合「名詞との関係が密接なものほど名詞の近くに置く」という法則性があることについては既に触れた(第1章参照)。「名詞との関係」という点では属性がもっとも「密接」であることは自明である。属性には「形」「色」「形状」「国籍」「材料」などがあるが、これらを表す語はいずれも名詞の直前に生起すると同時に、*be* 動詞の直後にも生ずることができることを(3.20)は例示している。すなわち名詞の直前という位置と *be* 動詞の直後という位置には意味的に共通する特性があるということである。

*Be* 動詞に類似した動詞に *seem* があるが、この動詞は形容詞を後続させるのが通常であるが、次のように名詞も可能である。

- (3.21) a. He seems a fool. [= foolish]  
 b. Your remark seems (complete) nonsense to me. [= nonsensical]  
 c. His friend seems very much an Englishman. [= very English]

-Quirk *et al.* 1985: 412



- c. She is *on the phone*.
  - d. on sale [air, strike]
- (3.26) a. I was *at school*, then.
- b. He should be *at home*.
  - c. at table/lunch/ease/war/peace

(3.24)は前置詞 *in* の例である。例えば(a)では *hospital* という物理的な建物の中にいるということではなく、入院中という状態を表し、(3.25)の *on* では *She realises he is on the slippery slope towards a life of crime*. –BNC における場所的な意味はない（この例では比喩的であるが）。また(3.26)の *at* では特定の学校を指し示すのではなく「学校で勉強していた」などその機能的すなわち抽象的な側面が前面に出ている。<sup>4</sup>

### 3.3.3 記述の対格構文

最後にいわゆる「記述の対格(Accusative of Description)」と呼ばれる次のような構文についても触れておこう。

- (3.27) a. The plank is not *the right width* (= of the right width).
- b. The towers were exactly *the same height*.
  - c. The door was *a dark brown*.
  - d. *What price* is that article?
  - e. *What age* is she?
  - f. *What trade* is he?
  - g. *What part of speech* are these words?

Onions(1971: 87)は上の文は前置詞 *of* のある形が元々の形式であると述べ、その目的語であるために補語の名詞は対格であると考え。本書では名詞の格は既に述べたように現代英語では消失しているため対格か主格かは問わない。ここで興味深いのは、補語の名詞が、それぞれ、*width, height, brown, price, age* のように主語名詞の属性や特性と密接に関わるということである。上例の *trade, part of speech* も同じことである。従って '*I'm fish.*' という表現は「潜在的に使われうる（池上 2000 : 32）」としても、よほど限定的な文脈でない限り破格な文と

---

<sup>4</sup> *Be* に後続する前置詞句として *to* 不定詞も含まれる。

いってよいであろう。英語の *be* 動詞構文は、繰り返し述べているように、補語が主語の属性を述べることからして ‘fish’ が ‘I’ の不変の属性であることはあり得ないことである。

この構文で *of* が元々確かに存在していたことを示す証拠については実は疑わしく、近藤(1975)によれば、OE 期にすでに *heo was fifteen geara*. ‘she was fifteen years old’ のような文が見られるとされている。しかし、歴史的事実は別にしてこの構文が次のような構文と関係していることは無理な想定ではないであろう。

- (3.28) a. I am quite *of* your opinion.  
 b. This matter is *of* considerable importance.  
 c. We are *of* the same age.  
 d. He seems (to be) *of* a sound mind. -以上 Curme 1931:35

前置詞 *of* が「所有」と関係していることはよく知られている。上の文では、一方で *of* が有する「所有」を表す機能と、他方で *be* 動詞の補語の位置が「属性」を表すというそれぞれの特性が何らかの関係があることは容易に推定することができる。従って、*We are of the same age*. では *of* を省略することができるが、これは年齢が人間の属性そのものであることによる。一方 *I am quite of your opinion*. では省略できない。これは *your opinion* を属性と考えることには無理があるからである。従って、所有の標識である *of* によって主語との所有関係、すなわち主語がそのような属性を持つことを明示する必要がある。これは *a man of courage* などの表現にも当てはまる。このように、属性は補語と極めて密接な関係を有する意味特徴である。

### 3. 3. 4 NP -*be* -AP -PP

これまでみてきた構造は主語の属性や状態などを表すという意味的な特性を有していた。特に属性の場合は主語に本来的の備わっていることがその言葉の意味であり、上で見た状態の場合も主語の属性としての状態であり、外的な原因によってそのような状態がもたらされるわけではない。しかし「状態」にはもう一つのタイプがある。それが本節以降で扱う構文である。次の文を考えてみよう。

- (3.29) a. She is good.

## b. She is good at mathematics.

上の(3.29a)は主語の特質を述べている属性文である。しかし(3.29b)は主語名詞に本来的に備わった永続的な属性というよりは、後天的に獲得した能力と考えられる。前置詞句 *at mathematics* はその能力の対象を表している。*Be* 動詞に形容詞が後続する構文ではこのように主語の属性を表す場合と、何らかの対象、より正確には補部(Complement)<sup>5</sup>を必要とする場合の二つの構文がある。

補部を必要とする形容詞については、Quirk *et al.* (1985: 1221-2)は要求する前置詞によって以下のように分類している。

(3.30) He was very worried *about* her reaction.

angry, glad, happy, knowledgeable, mad, reasonable;  
aggrieved, annoyed, delighted, frightened, pleased, worried

(3.31) She was bad *at* mathematics.

angry, brilliant, clever, good, hopeless, terrible;  
alarmed, amused, delighted, disgusted, pleased, puzzled

(3.32) The village is remote *from* the bustle of city life.

different, distant, distinct, free, remote

(3.33) She was aware *of* his difficulties.

afraid, ashamed, capable, certain, conscious, empty, fond, full, glad, proud,  
short, worthy;  
convinced, scared, tired

(3.34) Their plan was based *on/upon* cooperation.

contingent, dependent, intent, keen, reliant, severe;  
based, bent, set

---

<sup>5</sup> 補部とは、学校文法における補語とは異なり、動詞あるいは形容詞に後続する必須要素を表す。

(3.35) All capital gains are subject *to* taxation.

answerable, averse, close, due, liable, similar;  
accustomed, allied, inclined, opposed

(3.36) This plan is not compatible *with* our principles.

angry, busy, comfortable, compatible, content, familiar, friendly, furious,  
happy, impatient, incompatible, sick, uneasy;  
annoyed, bored, concerned, delighted, depressed, disappointed, disgusted,  
dismayed, distressed, drunk, enchanted, obsessed, occupied, overcome,  
pleased, satisfied, taken

これらの形容詞を意味的に整理することは困難であるが、*angry, glad, happy, aggrieved, annoyed, delighted, frightened, pleased, worried* など感情を表す形容詞が代表的なものである。感情はそれを引き起こす原因となる要素が必要であり、その原因は前置詞句によって表されることになる。その他 *aware, bad, afraid, ashamed, capable, certain, conscious, convinced, fond, proud, scared, short, tired, worthy* など対象を表すものも多い。

ところで動詞に自動詞と他動詞の 2 種類がある。その相違は当然目的語（あるいは補部）を必要とするか否かという点にある。これまで見てきたことは形容詞にも同様の区別があることを示唆している。NP-*be*-XP の構造で X が形容詞の場合、その構造は主語の属性を表すという特性を持ち、従って後続要素を必要とはしなかった。それに対して NP-*be*-AP-PP の構造は形容詞が何らかの補部を必要とする。その意味で前者の形容詞は自動詞的形容詞、後者の形容詞は他動詞的形容詞と呼ぶことができる。<sup>6</sup> このような他動詞的形容詞構文で述べられている状態は、多くの場合、何らかの外的な原因などによってもたらされた状態である。

### 3.3.4 NP - *be* - AP - *to* - V

このような構文の形容詞に後続する前置詞句としては *to* 不定詞も例外ではない。上で形容詞が補部を要求する他動詞的形容詞の構造を見た。そこでこの補部

<sup>6</sup> 例えば *The bowl is near the fireplace.* における *near* は前置詞とも見なされるが、他動詞的形容詞(transitive adjective)と考えることができるという議論がある。Anderson(1997: 74ff.)参照。

は名詞句であった。本節で述べる他動詞的形容詞の補部は動詞句である。

一般的に文と文あるいは動詞と動詞が隣接している場合、そこには因果関係が成立している場合が多い。例えば次の例を見てみる。

(3.37) a. I had trouble with the car yesterday. The carburettor was dirty.

b. I had trouble with the car yesterday. The ash-tray was dirty.

–Radden & Dirven 2007: 52

テキスト解釈の一貫性の観点から文と文の間には論理的な関係が成立していなければならない。上の(a)では、「車を使えない」という事態と「キャビュレーターが汚れていた」という事態との間には因果関係成立していることは明らかであるが、文(b)でそのような論理的な関係を読み取ることは困難である。不定詞構文は一つの文の中に二つの動詞が用いられている構文である。言い換えると一つの文の中で二つの事態を述べていることになり、その二つの動詞で述べられている二つの事態の間に因果関係が成立していることは十分に予想できることである。

(3.38)a. Bob is splendid to wait.

b. Bob is sorry to hear it.

c. The food is ready to eat.

–Quirk *et al.* 1985: 1226

(a)では「Bobはすてきな人だから待っていてくれる(それほどほどすてきな人)」、(b)は「それを聞いて残念に思う」、そして(c)は「食事の用意ができたから食べられる」というように因果関係は明らかである。

このような不定詞の構文がすべて因果関係の意味を持つわけでは必ずしもない。以下の例をみてみよう。

(3.39) a. Bob is slow to react.

b. Bob is hesitant to agree with you.

c. Bob is hard to convince.

–Quirk *et al.* 1985: 1226

上の不定詞は原因や理由を表しているわけではなく、それぞれ *Bob* がどのような点で *slow*, *hesitant*, *hard* であるのかを指定し、既にも上(3.28b)でみた対象を限定する構造に相当する。しかし、ここで考える必要のあることは、主節の形容

詞部は、限定された対象となる事態を達成するための前提条件として機能しているということである。従って、(3.38)は前提と帰結という関係が成立していると考えられることができる。ここで詳述することはできないが、前置詞 *to* はその前後の要素をそれぞれの意味的な必然性によって結びつける機能を持つ。*to* 不定詞の場合はその結びつけ方にはいくつかのタイプがあり、前提条件と帰結という関係も必然的な論理関係であると考えられる。

### 3.3.5 NP - *be* - *Ved* - *by* - NP

形容詞に後続する前置詞として *by* も見落とすことはできない。いわゆる受動文である。動詞の過去分詞が形容詞的な用法を持つことは知られている。用法を持つだけでなく、実際に形容詞に品詞が転換しているという可能性もある。例えば次の例を見てみよう。

(3.40) The results were unexpected. ~the unexpected results

—Quirk *et al.* 1985: 413

この *unexpected* は動詞 *unexpected* の過去分詞ではない。なぜならば *unexpected* という動詞はないからである。<sup>7</sup> 一方接頭辞 *un* は形容詞にのみ付く接頭辞であるから *expected* という過去分詞に *un* が付加したとしか考えることができない。これは過去分詞は形容詞と共通の特性を持つことを意味する。一般に派生接辞と言われる接辞は語幹の右側に付加されて品詞を変換する。つまり右側の要素は品詞を決定する能力を有することになる。従って、過去分詞形成接辞 *-ed* は動詞を形容詞に変換する機能を持つといってもよいであろう。<sup>8</sup>

<sup>7</sup> 但し、興味深いことに BNC には次のような「受動文」が存在する。

- a. **HJ0 12166** Most empirical research into the effects of controls proceeds on the basis that the decision is *unexpected* by those operating within the economic system.
- b. **HP2 1173** This was *largely unexpected* by civil servants at the Board, though not by Churchill, but it meant that the educational problems of an extension and perpetuation of the existing system were minimised. —BNC

<sup>8</sup> 過去分詞形成語尾 *-ed* は過去形形成語尾 *-ed* とは区別される必要があるため *-en* と表記する。また、次の *-ed* 形にも注意したい。

- a. All his friends are talented. ~ his talented friends
- b. His lung is diseased. ~ his diseased lung —Quirk *et al.* 1985: 413

この *-ed* 形は名詞に付加することにより形容詞を派生させる派生形態素であるが、これは語源的には異なる。一種の同音異義語(homophone)的形態素が文法的にはほとんど同一の分布を示すのは興味深い。



Quirk *et al.* (1985)は過去分詞と形容詞との間には段階性があるとして、次の例を挙げている。

(3.41) The passive gradient

- a. This violin was made by my father.
- b. This conclusion is hardly justified by the result.
- c. Coal has been replaced by oil.
- d. This difficulty can be avoided in several years.
  
- e. We are encouraged to go on with the project.
- f. Leonard was interested in linguistics.
- g. The building is already demolished.
- h. The modern world is getting more highly industrialized and mechanized.
- i. My uncle was / got / seemed (very) tired. -Quirk *et al.* 1985:167

上の例では大まかには(a)～(d)を動詞の過去分詞、(e)～(i)を形容詞と見なすことができるが、それぞれの過去分詞のグループ、形容詞のグループにも「動詞性」と「形容詞性」に相違がある。例えば(a)では人間を表す *by* 句(*by my father*)が存在することにより「父親がバイオリンを作る」という動作的含意があり、(b)では *by* 句が *the result* のように人（動作主）ではないため(a)に比べて受動態性は低い。(c)は同じように無生物名詞が *by* 句となっているが文全体の意味が現在の一般的状況を述べている。(d)では「数年後この問題は起こらないだろう」の意味で、この場合は「誰かが何かをする」という意味は全くない。

受動文は他動詞に限定された構文である。そこには行為者としての主語がその行為を受ける目的語に対して影響を与えるという意味が存在するはずであるが、上の文では(a)から(d)に下がるに従ってそのような含意は少なくなり、受動文の主語の状態を述べる文となっているのである。

(e)から(i)ではそれが顕著である。特に(h)では過去分詞であるにもかかわらず比較級の副詞 *more* によって修飾されていることから形容詞的な要素が強調されている。

### 3.3.6 NP - *be* - *Ving*

*Be* 動詞構文が以上見たように主語の属性あるいは状態をあらわすとすれば

次の進行形は状態を表す。しかし、この *ing* 形も *ed* 形と同様に動詞と形容詞の間であいまいである。

- (3.42) a. She is (very) calculating (but her husband is frank).  
 b. She is calculating (our salaries).  
 c. She seems very calculating.  
 d. \*She seems calculating our salaries. –Quirk *et al.* 1985: 414

上の(a)(c)の *calculating* は形容詞であり、(b)(d)は動詞である。注意すべきは *ed* 形の形容詞は属性の意味を持たず、一時的な状態を表すのに対して、*ing* 形の形容詞は主語の特質を表し、属性的な解釈となるということである。この相違は当然受動文が外的な原因によってもたらされた状態であり、従って、属性とは根本的に異なることに起因する。

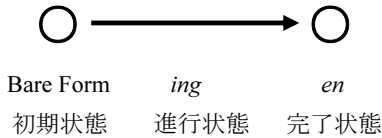
一方、いわゆる進行形の *ing* 形は動詞であり、一時的な進行状態を表す。動詞が他の名詞や形容詞等の主要品詞と異なる点は時間的な概念が含まれるか否かという点にある。例えば *walk* という語は名詞では「歩行・散歩」という動作の種類を表すが、これを動詞に使うと「歩行する」という動作を表す。動作には基本的には開始点と進行中もしくは継続中の状態、そして終結点があり、これには必然的に時間の経過を伴う。進行形における *ing* 形はいずれは終結する（すなわち一時的な）進行状態を表す。

### 3.4 非定形(原形、*ing*形、*en*形)の用法

動詞には原形と *ing* 形と *en* 形の3つの形態がある。この後者二つの *ing* 形と *en* 形は、その形自体としては上で見たように形容詞と動詞の間で曖昧ということになる。それはどちらも進行中であれ完了的であれ、どちらも「状態」という意味と関連しているからである。

一方、原形は動作あるいは変化の開始点（あるいは初期状態）を表し、*ing* 形は進行状態、*en* 形は終結状態をあらわす。このように動詞が有するこれら3つの形式はこのような時間的な概念をそれぞれ言語化したものといえる。図示すると次のようになる。

## (3.44) 時間的概念としての動詞



動詞が時間的な概念であるとするれば何らかの意味で開始時点と時間的な経過すなわち進行状態、そして終了する時点を持つはずである。それが形容詞とのあるいは名詞との唯一の相違点であるといっても良い。<sup>9</sup>

この3つの動詞の形態はさらに注目すべき点に関連している。それはそれぞれの形態が動詞、形容詞、名詞の用法を持つことである。

## (3.45) 3形態と品詞の対応



まず原形を見てみよう。原形の動詞的用法とは不定詞としての用法であり、助動詞や知覚動詞・使役動詞に後続する用法である。そして *ing* 形と *en* 形はそれぞれ進行形、受動文における用法が動詞としての用法である。

次に、形容詞としての用法は、原形は不定詞として名詞を修飾すると言われる *the book to read* のような用法がそれに相当し、*ing* 形では *a craving baby*、*en* 形では *people killed in the war* などがある。

最後に、名詞的用法は原形ではやはり不定詞として *To err is human* のような用法があり、*ing* 形ではいわゆる動名詞が、*en* 形では *the diseased* などがある。

ついでながらこれらの3つの非定形は副詞的な用法も共有している。例えば、原形は不定詞の結果や目的、あるいは原因を表す用法、そして *ing* 形と *en* 形ではいわゆる分詞構文と呼ばれる構文が対応する。

<sup>9</sup> 例えば Langacker (1987), Givón(2001)など参照。

従来特に（日本の）学校文法では不定詞の名詞的・形容詞的・副詞的用法のみが注目されている。しかしこのように動詞の非定形はそれぞれの品詞に対応した用法を持つのである。

## 第4章 *Have* 型

### 4.1 「所有」ということ

前章では *be* 動詞構文には等号文、属性文、そして状態文の3つのタイプがあることを述べた。本章で扱う *have* 構文には興味深いことに *be* 動詞構文との類似点がいくつか見ることができるが、*have* の代表的意味とされる「所有」についてまず見ておく。

Swan(1997:228-33)では *have* の用法として助動詞(Aux)としての用法、「所有(Possession)」を表す用法、「動作あるいは経験(Action or Experience)」を表す用法、「義務(Obligation)」を表す用法、そして「因果関係(‘Cause’)」を表す用法があるとして、次のような用法を挙げている。

- (4.1) a. *Have you heard about Peter and Corinne?* [Aux]  
 b. *They have three cars.* [Possession]  
     *Have you got any brothers or sisters?*  
     *Do you often have headaches?*  
 c. *I'm going to have a bath.* [Action or Experience]  
     *We're having a party next weekend.*  
 d. *I had to work last Saturday.* [Obligation]  
 e. *He soon had everybody laughing.* [‘Cause’]  
     *I must have my shoes repaired.*  
     *We had our car stolen last week.*  
     *I had a very strange thing happen to me when I was fourteen.*

ここでは(b)の「所有」について考えたいと思う。今、例えば *John read the book.* という事態があるとき、*John* は *read* という動作を行なっているということを表している。また *The statue stands on the hill.* という文で *stands* は主語 *the statue* が丘の上に立っていること、つまり主語の状態を表している。このように動詞は主語の動作あるいは状態を表しているのであるが、「所有」も動詞によって表される。これはわざわざ改めて言うまでもない当然のことのようと思われるかもしれないが、「所有」という意味は極めて特殊な文法的現象を呈する。それがこの章の目的でもある。所有を表す動詞は *have* に限らず *own*, *possess* などがあるが、ここでは *have* と *own* を比較してみる。両者の相違を端的に表しているのが

次の対比である。

(4.2) a. \*The house owns a roof.

b. The house has a roof.

—小西 1985, sv. ‘own’

この相違は直感的には *own* が「人が所有する」の意味を明確に持つのに対して *have* には(4.1)でみたように種々の用法がありその意味の範囲は広いと言うこともできるが、それだけではない。例えば次の文を考えてみる。

(4.3) I have a pen.

この特に変わったことがない文は実は *Do you have a pen?* のような問いに対する回答の場合と *I have a pen in my right hand.* が含意されている場合以外は、特に単独で用いられると、少々不自然な文である。それに対して上の(4.1b)の文にはそのようなコンテキストからの制約はないといってよい。その理由は(4.1b)がいずれも主語の属性・特性を述べているのに対して、(4.3)は主語の一時的な状態を述べていることに求められる。すなわち *I have a pen.* では主語の属性や特性を述べていることにはならないが、(1b)の「家族がいる」「頭痛がする」ということは単なる一時的な状態というよりは家族の場合は恒常的な、頭痛の場合は習慣的な状態である。また「車を3台持っている」ことは例えば「それほど豊かである」という特性を述べていると言えるであろう。従って(3)でも *I have quite a lot of pens.* となると不自然さは幾分解消される。

属性や特性を表す文とそうではない文との間に境界線を明確に引くことは困難であるが、その区別の一つとして場所を表す副詞句が後続するかどうかを考えてみると幾分分かりやすい。例えば、*I have three brothers in Kobe.* とはいえ属性を表す文ではなく、神戸には兄弟が3人いるが大阪には1人という対照的な意味が加わる。一方 *I have a pen in my hand.* では(3)の不自然さは全く消え、対照的な意味もない。

このように *have* 構文に副詞句が全く後続しない文では主語の属性や特性が述べられ、単なる「所有」の意味ではなくなり、むしろ存在文に極めて類似していることになる。

## 4.2 「所有」の記号化

動詞 *have* が(4.1)に示したように多様な意味・機能を持つのは概念としての「所有」の特殊性に起因すると思われる。所有は動詞 *own* によっても表すことが可能であった。それは所有という事態を語彙化しているということの意味する。しかし、所有は特定の語彙によらずに表すことも可能である。例えば「所有格」と言われる<sup>5</sup>である。Quirk *et al.* (1985)は「所有格の意味(Genitive meaning)」として以下のような整理を示している。

#### (4.4) 'Genitive meanings'

##### a. POSSESSIVE GENITIVE

my wife's father	My wife has a father.
Mrs Johnson's passport	Mrs Johnson has a passport
The earth's gravity	The earth has (a certain) gravity.

##### b. SUBJECTIVE GENITIVE

the boy's application	The boy applied for . . .
her parents' consent	Her parents consented.

##### c. OBJECTIVE GENITIVE

the family's support	(...) supports the family.
the boy's release	(...) released the boy.

##### d. GENITIVE OF ORIGIN

the girl's story	The girl told a story.
the general's letter	The general wrote a letter.

##### e. DESCRIPTIVE GENITIVE

a women's college	a college for women
a summer's day	a summer day, a day in the summer
a doctor's degree	a doctoral degree, a doctorate

##### f. GENITIVE OF MEASURE

ten days' absence	The absence lasted ten days.
-------------------	------------------------------

##### g. GENITIVE OF ATTRIBUTE

the victim's courage	The victim had courage/was courageous.
the party's policy	The party has a (certain) policy.

##### h. PARTITIVE GENITIVE

the baby's eye	The baby has (blue) eyes.
the earth's surface	The earth has a (rough) surface.

–Quirk *et al.* 1985:321-322

所有格を表す *s* については必ずしも上の分類で十分というわけではなく、極端に言えば分類方法も十人十色といっても過言ではない。しかも例えば次のような例はどのような分類が適切であるかを定めることは困難であろう。

- (4.5) a. *Tennis's* Henry Austin dies at 94                      –*The Scotsman*, 28 August 2000  
 b. Letters written by the *children's* author Lewis Carroll shortly before his death have been found in a locked journal and are being heralded as an important literary discovery.                      –*The Scotsman*, 22 August 2000

このように *s* が「所有」の意味があると考えることに問題はないと思われるが、同一の形態素が他の種々の意味・機能を有することは *have* の意味・用法と並行的な現象であり、興味深い。

さらに所有に関して注目すべき現象は、所有は *have* や *s* などそれに関する形態素を用いることなく文法的に表すことができるということである。次の例では文の構造（語順）によって「所有」が表されている。

- (4.6) a. John got Mary a ticket.  
 b. I'll save you a little popcorn.

動詞 *give* 等とは異なり、*get* や *save* は本来所有とは無関係な動詞であるが、上の例で *Mary* と *ticket*、及び、*you* と *popcorn* とが所有関係にあることは明らかである。これは動詞に後続する〈人〉+〈モノ〉という構造自体が所有関係の意味を持つと考えることができる。そのように想定することにより次の *deny* や *lose* も説明することができる。

- (4.7) a. If you regularly take snacks instead of eating properly, you will *deny* yourself the important nutrients that your body requires.                      –*Cobuild*<sup>2</sup>  
 b. The incident *lost* him the seat.



動詞 *deny* には「否定する」の意味と「あげない」という意味がある。<sup>1</sup> しかしここで注意しなければならないことは、この二つの意味があるということが *deny* が多義的であることを必ずしも意味しないということである。つまり *deny* は「否定する」という意味しか持たず、(4.7a)の *deny* が「否定」しているのは *yourself* と *the important nutrients* との「所有関係」という一種の命題(Proposition)である。すなわち、この例は「マイナスの所有(Negative Possession)」を表しているといえる。文(4.7b)の *lose* も所有と意味的には何ら関係のない語彙である。それにも関わらず「失わせる」という意味が含意されるのは構文の力と考える他はないであろう。<sup>2</sup>

### 4.3 Have の意味

「所有」は上で見たように *own* や *have* といった語彙によって表すことができる一方で、*is* のような非語彙的形態素によっても、さらにそれに関係すると思われる証拠を一切残すこともなく構造的に表すことも可能であるという点で、特異な意味的現象である。本書ではこのような所有関係はある限られた種類の関係概念の一つであり、命題を形成する基本的な概念であると想定する。

*OED* は *have* について次のように述べている。

(4.8) ‘From a primitive sense ‘to hold (in hand)’, *have* has passed naturally into that of ‘hold in possession,’ ‘possess,’ and has thence been extended to express a more general class of relations, of which ‘possession’ is one type, some of which are very vague and intangible. For just as the verbs *be* and *do* are the most generalized representatives of the verbal classes *κείσθαι* (*situs*) and *πράσσειν* (*actio*) in Aristotle’s classification of verbal predications (*κατηγορίαι*), so *have* is the most generalized representative of the class *ἔχειν* (*habitus*, having). For although *have* in its primitive sense of ‘hold’ was a verb of action, in the sense ‘possess,’ and still more, in the weakened senses 2, etc. below, no notion of any action upon the object remains, what is predicated being merely a static relation between the subject and object. In the older languages this relation was often

<sup>1</sup> *Collins Cobuild on CD-ROM* には次のように記されている。

1 When you deny something, you state that it is not true.

2 If you deny someone something that they need or want, you refuse to let them have it.

<sup>2</sup> 「所有」については本書第6章を参照。

predicated not of the possessor but of the thing possessed, the possessor standing in the dative, thus *L. est mihi liber*, there is to me a book, I have a book. The extended use of *have* and its equivalents to express this relation is a general feature of the modern languages. Like the two other generalized verbal types *be* and *do*, *have* also tends to uses in which it becomes a mere element of predication, scarcely capable of explanation apart from the context, and at length an auxiliary verb.’  
 –OED（下線部筆者）

この説明によれば *have* がいかにその語彙的な意味が希薄化したかが分かる。本来 *have* は「(手に) 持つ」ことを意味していた。それがより一般的な種類の関係を表し、さらに抽象的な関係を表すにまで拡張したこと、そして、‘hold’ という動作的な意味が失われ、主語と目的語との間の静的な関係を表すようになったのである。しかも注目されるのは *be* と *do* がアリストテレスの述語分類でいうところの‘*situs*’と‘*actio*’にそれぞれ対応するならば、その‘*habius*’に対応するのが *have* であるという指摘である。この三つの語は今や「単なる叙述を行う要素(mere element of predication)」であり、従って言い換えると、文を文たらしめるための述語として機能し、それ自体の意味は希薄化していると言えるであろう。

このように見てくると英語には述語のタイプとして *be* 型と *have* 型、そして *do* 型の 3 タイプがあることになるが、*be* 型と *have* 型は静的な関係を表し、*do* 型は動的な関係を表すといえる。*Be* 型と *have* 型は主語と補語あるいは目的語との間に「属性」関係が成立していることは既に見てきた。逆の言い方をすると、特に「属性」のようなある意味では **Inalienable Possession** と見なすことができる関係は、特定の語彙的な要素を使用することなく言語化できるということである。

#### 4.4 NP – *have* – NP 型

*Have* を述部として用いた構文ではまず NP–*have*–NP 型と NP–*have*–NP–XP 型との相違に注意しなければならない。目的語 NP の後に要素が後続していない前者では、上で述べたように、主語は目的語で述べられている特性をその本質的な「属性」として本来的に有するという意味を持つ。従って、その点で *be* 動詞型文において NP–*be*–AP 型が同様に「属性」を表すのと共通する。*Have* 型と *be* 型との相違は *have* が NP を後続させるのに対して、*be* が AP を後続させるという点にすぎないといえる。

このタイプの典型的な文は次のようなものである。

- (4.9) a. Mary has blue eyes.  
 b. The room has four windows.  
 c. Intelligence work has one moral law – it is justified by results.

–John le Carré, *The Spy Who Came in From the Cold*

(4.9a,b)が *Mary* と *the room* の属性を表すことは既に見た通りである。(4.9c)は「スパイの仕事には破ってはならない規則がある。結果がすべてということだ」という意味であり、スパイにはそのような特性が常にあるということを述べている。

#### 4.5 NP – have – NP – XP

それに対して NP–have–NP–XP 型は、主語の状態を述べるという点では NP–have–NP 型と共通するとも言えるが、主語の状態は、恒久的な属性ではなく、単なる一時的な状態を表す。この X には前置詞(P)、動詞(V)、過去分詞(en)、現在分詞(ing)、等が生ずる。

##### 4.5.1 NP – have – NP – PP

一般に、動詞の直後の名詞句(NP)はそれに後続する前置詞句や動詞句(VP)との間に主述関係（小節 ‘small clause’）を形成する。

- (4.10) a. John has a pen in his right hand.  
 b. She has people around at all times. –小西 1980  
 c. The provost had the students out of his office in ten minutes. –*ibid.*

文(a)は「John は右手にペンを持っている」という意味であるが、構造としては「ペンが一本 John の右手にあるという状態に John はある」という意味であり、(b)は「いつも人が周囲にいるという状況に彼女はいる」という意味が基本である。(c)は「10 分後学生たちは学長室から出て行ったという状況に学長はなった」という同様の意味が基本にある。しかし、この「出て行く」という事態が学長が自らの意志によるものなのか、あるいは学生たちが自主的に出て行ったのかという曖昧性が残るが、この文だけでそれを判断することはできないであろう。

あえて対応する日本語としては「出て行ってもらった」ではないかと思う。動詞 *have* の主語は行為者を表さず、「そのような状態に主語がある」という意味が *have* 構文の意味であるからである。

#### 4.5.2 NP - *have* - NP - VP

このタイプでは、動詞句(VP)には動詞の過去分詞形(*en*)、現在分詞形(*ing*)、そして原形が生ずる。

##### 4.5.2.1 NP - *have* - NP - *Ven*

まず、過去分詞が後続する場合である。この構造では動詞に後続する要素が受動態の命題を形成している。

(4.11) a. John had a book *stolen* from the library.

b. He had his shoes *shined*.

—小西 1980

c. My friend had his watch *stolen*.

—*ibid.*

動詞の過去分詞は前章(3.44)で示したように完了的状态を表す。他動詞の完了的状态は外的な原因によってもたらされている。それが受け身の意味をもたらす要因である。従って、上の例文(4.11a)は「本が図書館から盗まれたという状態を John が有している」、言い換えると「John は本が図書館から盗まれたという状態にある」という意味が根底にある。つまり「John は図書館で本を盗まれた」あるいは場合によっては「本を盗ませた」という意味になる。そのどちらとなるかはコンテキスト次第である。同様のことは(4.11b,c)についてもあてはまる。「靴を磨いてもらった」のか「靴を磨かせた」のかのどちらかという点にまでこの英文自体は意味してはいない。但し、(4.11c)では「自分の時計を盗ませた」という状況は不自然であるため「盗まれた」という解釈となる。*Ven* で言い表されている受動的状況が主語の主體的な働きかけによってもたらされた(すなわち使役的)かそれとも意図せずに被った状況なのかは用いられている動詞の意味などが関係し、この構文自体はそこまで責任を持つものではない。

##### 4.5.2.2 NP - *have* - NP - V (-NP)

この構造も基本的には上の NP-*Ven* 形とは異なり補文の命題部が受動態ではない。しかし、主語が NP-V(-NP)で述べられている命題的な状況にあるという

点は共通している。また、この構文でも命題部分で述べられている状況が主語の意図によるものか意図せずに生じた状況なのかということについても明確ではない。

- (4.12) a. The magician had the card disappear without lifting a finger. –小西 1980  
 b. I had an extraordinary thing happen to me. –*ibid.*  
 c. I would have you know that I am ill. –*ibid.*

(4.12a)では「トランプが消えたという状況が手品師にある」ということから手品師が自分の意図で作りに出したことではあるが、*have* を用いることにより手品師の意図が消され、あたかも自然にそのような状況が作り出されたかのような印象を与える文である。(4.12b)の文ではそのことがよくわかる。主語の意図とはかかわりなく起こるのが「とんでもない」ことである。(4.12c)は一見使役のような印象を与えるが、*would* という過去形の使用によって「私の体調が良くないことを理解してくれたら良いのだが」という意味となる。

このようにこの構造は主語の意図が積極的に関与しないということが特徴であり、そのことは次の例文のように意図的に事態を生じさせる修飾部との共起が困難であることからわかる。動詞 *make* による使役文では問題ない。

- (4.13) a. \*The trainer had the lion enter the cage by beating it up with a whip.  
 b. The trainer made the lion enter the cage by beating it up with a whip.  
 –小西 1980

#### 4. 5. 2. 2 NP – *have* – NP – *Ving* (–NP)

基本的に *Ving* の形態は継続状態を表す。次例を見てみよう。

- (4.14) a. They had a few supporters *helping* them.  
 Cf. There were a few supporters helping them. –小西 1980  
 b. I won't have you *saying* such things about my sister. –*ibid.*

(a)では「恒常的に支援してくれる人がいた」ということであり、ここでの *have* は *there* 構文とほとんど変わらない。(b)では「いつも君はそんなことを言っているが、それは許さない」という意味である。しかし、次のような場合には少々

注意を要する。

- (4.15) a. If you have children, it will be sensible to tell them how lucky they are to have Granny *coming* to live with them, and they should be encouraged to give her a warm welcome. -BNC
- b. We shall soon have the mists *coming* down on us. -小西 1980
- c. we used to have ships *coming* from Casablanca -BNC

(a)の *coming* は「来た」わけではなく「来つつある」という状態である。これは文全体が非現実の事態を予想しているため、「来る」という出来事は開始されることを前提としてはいるが、まだ到着してはいない、すなわち進行状態にあるということを述べている文となる。(b)の文も同様の解釈が基本にある。それに対して(c)は過去の出来事を述べているため、多くの船が到着したことを述べている。

後でも言及する機会はあるが、NP + XP 構造では XP には純粹の形容詞が生ずる。*Have* 構造で形容詞が不可能であるのは、「目的語 (=他者及び自分) が何らかの属性を有するという状態を主語が所有するあるいは主語にそのような状態がある」ということがあり得ないからである。

## 第5章 他動詞型(1)

### 5.1 他動詞構文の意味

これまで述べてきた *be* 動詞構文、*have* 構文にはそれぞれ基本的には属性か状態を表すという意味的特性がみられた。この特性には *be* 動詞、*have* 動詞自体が持つ意味的特性が大きく関与していることは当然であるが、*be* 動詞と *have* 動詞のみがそのような意味を持つという結論にはならない。なぜならば属性や状態は必ずしも語彙形式あるいは特定の形態素等を用いることなく表すことができるからである。例えば、属性は名詞に前置された形容詞（あるいは名詞）によっても表わすことが可能である (3.3.2 参照)。これは名詞の前という位置が属性の意味と関わることを示している。一方、状態は、例えば *the stars visible/the man afraid of dogs/the book on the table* など名詞に後置する形容詞や前置詞句、*the statue standing on the hill/the book written by John* のように名詞に後置された動詞句 (*Ven, Ving*) など語順のみによって表すことも可能である。勿論 *be* や *have* を用いた構造は文という形式をとり、そうではない語順のみによって表された形式は文の一部となる構成要素であるという違いはあるが、属性あるいは状態を表すという点では区別することはできない。このことは換言すれば、*be* や *have* は文を文として成立させるための機能、つまり叙述という機能を担っているという考え方もできるということである。さらに誤解を恐れずに言い換えると、*be* や *have* はそのような意味しか持たないと考えてもあながち間違いではないであろう。

それに対して本節以下で述べる他動詞構文は、当然のこととはいえ、他動詞そのものの意味が最も重要な働きをしている。そして用いられている他動詞の意味によって構文の形式が決定される。Goldberg(1995)は動詞 *kick* は次のように他動詞用法、自動詞用法を問わず多様な構文が可能であるとして以下の例を挙げている。

- (5.1) a. Pat kicked the wall.  
 b. Pat kicked Bob black and blue.  
 c. Pat kicked the football into the stadium.  
 d. Pat kicked at the football.  
 e. Pat kicked his foot against the chair.  
 f. Pat kicked Bob the football.

- g. Pat kicked the football to Bob.<sup>1</sup>
- h. The horse kicks.
- i. Pat kicked his way out of the operating room. –Goldberg1995:11

Goldberg は明言をしてはいないが、上の(a)-(i)は動詞がとる構文の形式としてはほぼすべての可能性を示しているといつてよい。以下これらの構文について順を追って検討するが、その前に他動詞構文の特性をみておく。Lakoff(1977)は他動詞あるいは他動詞構文の意味的特性として以下のような点を列挙している。

### (5.2) 'Transitivity'

- a. there is an agent, who does something
- b. there is a patient, who undergoes a change to a new state (the new state is typically nonnormal or unexpected)
- c. the change in the patient results from the action by the agent
- d. the agent's action is volitional
- e. the agent is in control of what he does
- f. the agent is primarily responsible for what happens (his action and the resulting change)
- g. the agent is the energy source in the action; the patient is the energy goal (that is, the agent is directing his energies toward the patient)
- h. there is a single event (there is spatio-temporal overlap between the agent's action and the patient's change)
- i. there is a single, definite agent
- j. there is a single, definite patient
- k. the agent uses his hands, body, or some instrument
- l. the change in the patient is perceptible
- m. the agent perceives the change
- n. the agent is looking at the patient – Lakoff 1977

要は「主語(agent)は自らの意志によって目的語(patient)に対してエネルギーを

---

<sup>1</sup> 例(g)は筆者による追加である。



発し、その影響を受けた目的語は顕著な変化を被る」ということにまとめることができるであろう。Lakoffはこれらの14の特性を備えた動詞が他動詞のプロトタイプであると述べる。形式的な観点からみると NP-V-NP という構造はそれ自体が上のような動的な意味を持つということになる。

## 5.2 NP -V -NP

この構造はいわゆる他動詞の大多数がとる典型的な形式である。例えば、*The enemy destroyed the church* は「*enemy* が行なった意図的な *destroy* という行為によって *church* が壊滅的な影響を受けた」という意味である。この構造は日本語では<一は一を一する>にほぼ相当し、逆に日本語の<一は一を>は英語のこの形式に対応する。

ところで英語ではこの他動詞の形式は言うまでもなく語順によって表され、(例えば日本語では<は><を>が必要とされるのとは異なり)何ら形態素は必要ではない。認知文法を持ち出すまでもなく、*destroy* という動詞は行為者としての主語とその行為を受けるものとしての目的語という二つの概念が必要である。すなわち、*destroy* という event が成立するためには二つの参与項(participant)すなわち名詞句が必要であり、これらの参与項はその event 全体の必須の部分構成すると考えることができる。換言すると文として表された event を全体と考えると参与項としての名詞句はその部分であり、両者は全体と部分という関係を構成していることになる。

我々は英語では主語と動詞と目的語がその順番で配列されるということを実際の規則として認識し、その理由までは考えない。一方、上で特に属性を表す表現ではそれを示す形態素は必ずしも必要とは限らないということを見てきた。このような全体とその部分という関係は言語外の客観世界の現象であるが、これが言語内の構造に反映されているという想定は類象性(Iconicity)として知られている。<sup>2</sup> 属性表現はある実体とそれが有する属性という二つの概念を前提とすることを考えると、これも全体と部分の関係にあるとあってよいであろう。つまり、属性表現が特定の形態素に頼ることなく成立するのと同様に、英語において NP-V-NP のように特定の形態素に頼らず語順のみに依存した形式が可能であるのは、動詞(V)を中心とした事態が全体とするならば、二つの名詞句がその部分を形成するという具合に全体と部分という関係にあることが最大の理

<sup>2</sup> 類象性については Langacker(1987), Radden & Dirven(2007)等を参照。



*become, suit, fit* の受動文は不可能である。これは後続の目的語が動詞によって影響を受けず、従って何らかの結果的状态がもたらされる可能性がまったく存在しないことによる。それに対して(f), (g), (h)では数値が目的語となっている。数値が動詞によって何らかの変化を被るという可能性がまったくないのは当然であろう。ほぼ同様のことは後述する場所的な概念を目的語として後続させる *approach* や *reach* では後述の場合を除いて対応する受動文が存在しないことにもあてはまる。

また、目的語が影響を受けるかどうかという点は Lakoff(1977)の観察のとおり主語の意図性と関係する。ところで、*suit, fit, hold, cost, weigh* のように受動文として用いることができないとされる動詞も、人間を表す名詞が主語となることが可能であり、その場合の受動文は不可能ではない。

(5.4) a. You can *suit* yourself about going or staying here. –

—『活用辞典』

b. Of particular advantage during repeated application is further the possibility to use sol-gel systems of different composition so that the resultant surface properties can *be suited by the artisan* in a very precise manner in accordance with respective requirements.

— <http://www.patentstorm.us/patents/7247350/description.html>

(5.5) a. I managed to *fit* the bookcase in between the windows. —『活用辞典』

b. Smoke alarms are small plastic devices which can *be fitted by most people* in their homes.

—BNC

(5.6) a. He *held* his head in his hands.

—『活用辞典』

b. She would not *be held by a man* ever again.

—BNC

(5.7) a. I got a shock when I *costed* the whole holiday out. —『活用辞典』

b. It breaks my heart to advertise but financially I have not option. All I seek to do is cover what it has cost me thus far. Packing & freight charges will *be cost by me*. A very upset and disgruntled prospective ufo gyrocopter owner ::: Dave the Pick.

—<http://www.rotaryforum.com/forum/showthread.php?t=3804>

(5.8) a. They have *weighed* our luggage. —小西 1980

b. The fish must *be weighed by an official weighmaster* (if one is available) or by an IBSRC official or by a recognized local person familiar with the scale.

—<http://www.freedive.net/ibsrc/rules.html>

但し、注意すべきことはこれらの他動詞文はいずれも能動文では Lakoff が列挙した他動詞性の特性を示し、受動文の主語は何らかの影響を受けると考えることができることである。(5.7)の *cost* は興味深い。この意味は「(コストを)見積もる」であるが、その場合は過去形も規則変化の *ed* 形である。<sup>4</sup> これは他動詞構文特有の意味が動詞 *cost* の意味に影響を与えていることを示し、構文の強制力によるものであろう。

### 5.2.2 場所句と受動文

上で、*approach* や *reach* は受動文としての用法がないことを述べた。例えば次のような受動文は不可能である。

- (5.9) a. \*New York *was approached* by the plane.  
(The plane approached New York.)  
b. \*The hotel *was reached* by us at midnight.  
(We reached the hotel at midnight.)

場所の定義は実は決して容易ではないが、ある事態が生ずる背景と考えることは出来るであろう。従って、基本的にはそのような背景としての場所が動詞によって何らかの影響を受けるということはあり得ないことであり、そのことが(5.9)の各文が非文法的な原因であると思われる。

通常そのような背景は前置詞句として現れる。これらの二つの動詞ではなぜ場所を表す名詞句が直接目的語の位置に生じているのであろうか。ところで、この二つの動詞は次のように受動文は不可能ではない。

- (5.10) a. After one of early games he *was approached* by a strange looking character who proposed a meeting `;which would be to your advantage, senor';  
-BNC  
b. He was carrying the American Frank Connor's bag when he *was approached* by Nick Faldo to join up with him again.

---

<sup>4</sup> その点では(5.7b)の *will be cost by me* はややくだけた英語ということになるであろう。

- c. As she waited for her mother to pick her up, she *was approached* by a man who tried to kiss her.
- b. The hill can be easily reached by car. – 『ジーニアス』

動詞 *approach* は主語として無生物と人間など生物名詞の場合がある。無生物名詞が主語の文では次の(5.11a)のように主語の意図性が見られないのは当然であるが、(b)と(c)では「近づく」という行為には何らかの意図が秘められている。これは他動詞構文には目的語に対して影響を与えるという意味があることから、単に「接近する」だけではその要件をみたさないため、目的を明示する必要があるためである。

- (5.11) a. Bush's humiliation *approached* that of George McGovern in 1972, when he won only two seats in his attempt to oust Richard Nixon. –BNC
- b. After that I will *approach* the Australian tour management with a view to speaking to David Campese.
- c. Some guys *approached* us and gave us one (tablet) each!; –BNC

受動文が意図的な用法の *approach* であることはいうまでもない。従って受動文の主語は *by* 名詞句の行為者によって何らかの影響をうけることになる。(5.10)の例文ではそれが後続の *to* 不定詞以下によって明示されている。

一方 *reach* はどうであろうか。動詞 *reach* の語源的意思是「腕などをのばす」であり、その結果、*OED* によれば‘To succeed in touching or grasping with the outstretched hand (or with something held in it), or by any similar exertion.’のように「手に入れる」など獲得の意味を持つ。従って「到達する」という意味は *approach* とは異なり到達すること自体を目的とした意図性の高い行為である。*OED* ではこの意味の初出が 1330 年頃であることは、そのたの用例の初出が 1000 年前後であることから考えると、これが後に発展した意味であることを示している。

- (5.12) a. Its decision, which *was reached* a week earlier than expected, came despite threats to kill 10 judges for every trafficker extradited. –BNC
- b. The house *was reached* by a stony drive more than half-a-mile long, furrowed and rutted by the drainage from the hill, but they had electricity, oil-fired central heating and no neighbours. –BNC

以上みたように、*approach* と *reach* は場所的な要素を目的語としてとるが、主語に意図性があるかどうかという点が、受動文の容認度に関連しているといえる。両者の相違点は *approach* が単なる距離的な接近を表すのに対して、*reach* は接近し、さらにそこに到達することを目的とする意識的な行為であるという点にある。

場所句と受動文に関しては次のことも触れておく必要がある。英語には次のように前置詞句を必須項としてとるいわゆる前置詞動詞がある。

- (5.13) a. The engineers went very carefully into the tunnel.  
 b. They eventually arrived at the splendid stadium.  
 c. Somebody slept near this bed.  
 d. John lived in England.

場所を表す語句は出来事の背景をなすことを上で述べた。(5.13)の前置詞句は、しかし、出来事の背景と考えることには無理があり、動詞の必須要素であり、動作の対象と考えられないこともない。しかもその動作は主語の意志によって行なわれ、主語は行為者(Agent)である。しかし、このような動詞は次のように受動文で用いることは不可能である。また動詞の必須項ではあるが、前置詞句全体を受動文の主語とすることもできない。

- (5.14) a. \*The tunnel was very carefully gone into by the engineers.  
 b. \*The splendid stadium was eventually arrived at.  
 c. \*This bed was slept near.  
 d. \*England was lived in by John.

前置詞には(すべての前置詞というわけではないが)その一つの機能としてモノとしての名詞を場所に転換するということがある。例えば *tunnel*, *stadium*, *England*, *bed*などはそれ自身が場所ではなく、*in(to) the tunnel*, *at the stadium*, *in England*, *near the bed*のように前置詞によって場所となる。しかしながら受動文はその主語について動詞の結果的な状態を述べることを特質として持つ。従って、(5.14)の受動文はそのような特質がみられないことが非文の理由として考えられる。その想定の裏付けとなるのが次の文である。

- (5.15) a. The problem was very carefully gone into by the engineers.  
 b. The expected result was eventually arrived at.  
 c. This bed was slept in.  
 d. England was lived in by 55 million people.

(5.15a)は調査することによって *problem* が解決される可能性があり、(b)は得られていなかった結果(*result*)が得られ、(c)ではきちんとしていたベッドのシーツなどが乱れていたなどの含意がある。(d)は当時 *England* には 5,500 万の人口があったという主語についての属性文である。次の文も同様である。

- (5.16) a. This room was slept in by George Washington.  
 b. This room was slept in by Mary.

(a)は「この部屋は George Washington が寝た特別の部屋」という意味であり、その意味においてのみ可能である。従って(b)では Mary が誰をさすかによって容認度は変わるであろう。

### 5. 2. 3 受動文と対応しない場合

繰り返し述べているように受動文は *be* 動詞構文の一つであるから主語についての特性を述べる。従って、出来事を述べる能動文とは根本的に異なる。さらに、次のような場合には能動文と受動文では意味が異なる。

- (5.17) a. Every schoolboy knows one joke at least.  
 a'. One joke at least is known by every schoolboy.  
 b. John willingly beat his wife.  
 b'. His wife was willingly beaten by John.  
 c. John cannot do it.  
 c'. It cannot be done by John.  
 d. \*Winston Churchill has twice visited Harvard.

d'. Harvard has twice been visited by Winston Churchill.

e. Beavers build dams.

e'. ?Dams are built by beavers.

文(a)では「どの生徒も何かジョークを一つ知っている」という意味であり、(a')は「ある一つのジョークはどの生徒も知っている」という意味である。(b)の二つの文は前者では *John* が喜んでいるのに対して、後者で喜んでいるのは *his wife* であり、(c)の *can* は前者では主語の能力を表し、後者では「はずがない」発話者の判断を表す。(d)では *Winston Churchill* という過去の人物のことを語るにもかかわらず *has* という現在形を用いているために、一種の時制の不一致が生じている。(e)はいわゆる総称文である。総称文は主語の特性を述べる文であり、前者ではビーバーという動物の習性を表しているのに対して後者では通常ダムはビーバーによって造られるわけではないという点で矛盾を引き起こしている。

このような事実はやはり能動文と受動文の構造的及び意味的な相違を示唆している。同時に他動詞が本来的にはその目的語に何らかの変化や影響を及ぼすという意味を持ち、過去分詞はその受けた変化や影響の結果的な状態を表すという他動詞と過去分詞それぞれが持つ基本的な意味の接点において受動文が成立することも示唆している。その仲介をしているのが *be* 動詞である。



## 第6章 他動詞型(2)

### 6.1 NP + V + NP + XP

NP+V+NP という形式は、目的語は何らかの影響を受け、状態の変化を被るという意味的な特性を持つことを上では見てきた。本章では NP+V+NP+XP、すなわち、目的語 NP にさらに XP すなわち前置詞句(PP)、動詞句(VP)、形容詞句(AP)、そして名詞句(NP)が後続する構造の特性を考える。結論的には目的語 NP と XP との間には主述関係と所有関係の二つのタイプがあることを見る。

#### 6.1.1 NP + V + NP + PP

この形式の代表的な構文が次の文である。

- (6.1) a. John put the books in the box.  
 b. He hid the toy behind the curtain.

動詞 *put* は目的語 NP が位置する場所を表す前置詞句を必須項としてとる動詞であり、場所句を欠いた文は非文である。同様に *hide* も場所句は義務的である。従って同じ PP ではあるが、次のような手段を表す *with* 句などの付加語(adjunct)は義務的な要素ではないためここでは触れない。<sup>1</sup>

- (6.2) He broke the window (with a hammer).

上の(6.1)の文は述部の行為の結果目的語が前置詞句で表されている場所に位置したことを表し、主語自身が行なった *put* あるいは *hide* という行為がその原因となっている。すなわち主節の[John put]、[He hid]という event が原因となり、[the books (be) in the box]、[the toy (be) behind the curtain]という結果をもたらしているということになる。

しかし、以下の文では目的語 NP が前置詞句で表されている場所に位置していることには変わりがないが、主語自身が述部の行為や動作を行なっているわけではない。

---

<sup>1</sup> 構文的に必須項として前置詞 *with* を伴う形式も存在するが、それについては後述する所有関係の構文で扱う。

- (6.3) a. They stood the statue on the pedestal. –Levin 1993:32  
 b. Sylvia jumped the horse over the fence. –*ibid.*:31  
 c. The scientist ran the rats through the maze. –*ibid.*:31

この構文は Levin(1993)などが言及するいわゆる Causative Alternation と類似の現象を呈しているが、今少し詳細に見る必要がある。例えば典型的な使役構文では次のような含意関係が成立している。

- (6.4) a. The visitor rang the bell.  
 b. The bell rang.

上の(a)では *visitor* が *ring (the bell)* という行為を実際に行った結果(b)の結果的な事態がもたらされている。しかし、(6.3)ではそれぞれ事情が異なる。(a)では主語 *they* が *stand* しているという状況ではない。一方(b)では *Sylvia* が馬に乗り、馬と *Sylvia* が *jump* という動作を行っていると言われる(Levin 1993:31)。それに対して、(c)は *scientist* がネズミと一緒に走っているわけではない。(c)の *scientist* が *run* している状況でもなく、実際に走っているのはネズミのみである。この興味深い現象については詳細な検討が必要であるが、このような構文では実際に文の主語が(6.3b)のように目的語と同じ動作や行為を行うという事態は例外的な現象ではないかと思われる。

Lakoff(1977)が述べているように他動詞構文の主語は「エネルギーの発信源 ((5.2g)参照)」であり、そのエネルギーは目的語に向けられ、その結果目的語はそれとわかる変化を被るという特性を持つ。従って、再帰的な用法は別として、主語と目的語が述部と同じ行為を行うことは不可能なことである。(6.3b)の例は我々のプラグマティックな知識が勝っていることを示している。

このように、この構文は、基本的には、主語は述部の動詞によって表されている出来事の原因をつくり、必ずしもその行為そのものを実行しているわけではない。出来事を実行するのは目的語であり、その目的語となる名詞が意味的な主語であるという特性を持つ。つまり主語はこの文に含意されている命題 ((6.3a)を例にとると) [the statue stand on the pedestal]を引き起こす「エネルギーの発信源」として機能していることになる。

さて、上の文では動詞(*stand*)の参与名詞句(*participant*)としては主語(*They*)、目

的語(*the statue*)、そして場所句(*on the pedestal*)の三つである。そして英語では構造上の制約としてこれ以上参加者を増やすことはできない。<sup>2</sup> 通常であれば主語が *stand* という動作を行う主体であるが、ここではそうではない。それではこの述部で用いられている動詞 *stood* はどのような機能を果たしているのだろうか。

上で、目的語と場所句は主述関係をなしていることを述べた。この場合の主述関係とは「目的語(*the statue*)が場所句(*on the pedestal*)にあること」という状態的な主述関係である。このような状態的主述関係は述語動詞に後続する NP+XP には普遍的に見られる現象である。動詞 *stand* はこのような状態的主述関係の原因あるいはその前提条件として機能していることが考えられる。「目的語(*the statue*)が場所句(*on the pedestal*)にあること」は *stand* という動詞によって保証されているように一見思われる。しかし、事情はそれほど単純ではない。

動詞 *stand* は通常他動詞用法としても自動使用法としても可能であるが、このような動詞は基本的には自動詞と考えてよいであろう。<sup>3</sup> なぜならば上の例からも明らかであるが *They stood the statue on the pedestal.* は *The statue stood on the pedestal.* を含意として有するからである。このような自動詞が関与した使役構文の特徴は、自動詞であるために通常の参与名詞句は一つでよいはずであり、問題の構文では参与名詞句がひとつ増加することになる。しかも、主語である *they* が直接 *stand* という行為を行なっていないということは何を意味しているのだろうか。

この点で参考になるのが Anderson(1977, *etc.*)が提唱している場所論的格文法(Localistic Case Grammar)である。Anderson の格文法によれば意味的格である絶対格(absolutive、以下 abs と略)は次のような定義が与えられている。

(6.5) "The absolutive is the argument most intimately associated semantically with its predicate, with which it enters into the potentially most specific selectional restrictions: with location or movement predicate it introduces the located or moving entity; with action or experience it is that which is acted upon or experienced; with processes or description it is undergone or described."

<sup>2</sup> 既に Emonds(1976)では変形規則は句構造規則によって生成される基底となる節点に余分な節点を付け加えることはできないという主張を行っている。これは英語の構造には一定の形式上の制約があることを示唆したものである。

すなわち *abs* は発話ではそれを欠くことはあり得ない要素であり、かつ、動詞とは最も意味的に密接な関係を持つ。従って自動詞にはこの格を有する名詞句が存在し、その名詞句が主語となり、他動詞構文ではその目的語が *abs* の格を持つ。そして、動詞 *stand* はその主語名詞句は[*abs*]という意味的な格を持ち、それは(表層的)形式上の位置に影響されたり、消失や他の格に変化するなど変質するという事はない。

この点は使役構文を考えると極めて重要な意味を持つ。問題の *stand* 文においてもこの動詞と最も密接な意味関係を持つのが *abs* としての *the statue* である。動詞 *stand* の主体は *the statue* であることを意味するからである。言い換えると、*They stood the statue.* という文では；

(i) 動詞 *stand* の参与名詞句は一つであること、

(ii) その目的語が動詞 *stand* と最も密接な意味関係を有していること

という二つの条件により[*The statue stand*]という含意を変わずに持つということになる。

以上のことから、(6.3)の各文の主語は次のように最も外側にある「外項」として[*the statue stand on the pedestal*]という事態を引き起こす原因として機能することとなる。

#### (6.6) *They [stood the statue on the pedestal]*

この分析は三つのことを意味する。一つは[*they stood the statue*]が NP+V+NP という他動詞の形式となり、構造的に他動詞性が確保され、その結果主語である *they* は「エネルギーの発生源」としての意味を持つこと、<sup>4</sup> 二つ目は、意味的な[*the statue stand on the pedestal*]という命題は、形式的に *the statue* が *stand* ともっとも意味的な関係が強い *abs* であることによってその主体としての解釈が保証されていること、そして最後に、その結果、文の主語である *they* は意味的にその命題文全体を引き起こすことになるということである。英語のこのような使役文はこのように意味的な事実と形式的な事実との接点において初めて成立

<sup>3</sup> Dixon(1991, 2005)参照。

<sup>4</sup> Anderson は他動詞の主語の意味的格は能格(ergative)と呼ぶ。

する意味的な現象である。

### 6. 1. 2 NP + V + NP + *to* + VP 型

不定詞の標識とされている *to* は語類としては前置詞であり、従って *to* 不定詞部は形式としては前置詞句(PP)である。これには次のタイプがある。

- (6.7) a. I want you to come with me.  
 b. We expect you to study hard.  
 c. We considered Mary to be honest.  
 d. He persuaded her to be examined by the doctor.

上で述べた使役構文とは異なりこれらの文では形式と意味の関係が比較的わかりやすいといえるであろう。この形式は直接目的語の格が対格(Accusative)であり、その後に *to* 不定詞を従えていることから伝統的に「不定詞付対格構文(Accusative with Infinitive)」と呼ばれる。

不定詞付対格構文は動詞に後続する名詞句はその目的語であると同時に、*to* 不定詞の意味上の主語であるという特徴を持つ。<sup>5</sup> しかし、このように形式上は同一であるが、この構造には上の 4 つのタイプがある。それぞれの相違は次の文で明らかである。

- (6.8) a. \*I want that you come with me.  
 b. We expect that you will study hard.  
 c. We considered that Mary was honest.  
 d. He persuaded her that she should be examined by the doctor.

(a)以外は *that* 節による言い換えが可能であるが、(b)の *expect* は *that* 節内の動詞が動的な意味を持つ動詞が典型であり、(c)では逆に *be* 動詞など状態的な意味を持つ動詞が用いられる。また(6.7b)、(6.7c)の目的語 *her* と *Mary* はそれぞれ(6.8)の(b)、(c)の主語位置から繰り上げられたとされる。それに対して(d)では目的語 *her* は動詞 *persuade* の対象であり、元から直接目的語の位置にある。このような

<sup>5</sup> 唯一の例外と思われるタイプは不定詞の直前の名詞句がその意味上の主語ではない

ことから(6.7)は概略次のような意味的な構造を持つことになる。

- (6.9) a. I want [you to come with me].  
 b. We expect [you to study hard].  
 c. We considered [Mary to be honest].  
 d. He persuaded her [to be examined by the doctor].

この(6.9)の構造からまず(a)–(c)のタイプと(d)のタイプに分けることが可能である。前者からみると、このタイプはさらに動作型と状態型と仮に呼ぶことができるタイプに下位区分が可能である。動作型は *to* 不定詞として用いられる動詞が動作を表す動詞に限られ、(a)と(b)がそれにあたる。それに対して(c)は不定詞部の動詞は状態を表す動詞に限定され、状態型と呼ぶことができる。動作型は不定詞部の出来事に対して主語がその実現を積極的に望むあるいは期待する動詞が述部に生ずる。実現に積極的な動詞があれば、それに消極的な動詞も当然この構文をとる（例えば *She hates you to smoke a cigarette.*）。一方状態型は命題部で述べられている状態に対する中立的な判断を表している。この動作型も状態型も実は主語の命題部に対する態度あるいは査定を表しているということができる。

それに対して(d)は主語と述語動詞が目的語に働きかけることによって命題部を実現させるという意味がある。逆に言えば *to* 不定詞部の実現には主語と述語動詞で述べられている出来事が前提条件となるということである。すなわち(d)は前半の NP+V(+NP)と後半の命題部(NP+)*to*+VP との間には因果関係が成立している。後述するが不定詞が関係する構文ではこの因果関係が極めて重要な概念である。

### 6.1.3 NP + V + NP + VP

目的語名詞句に直接動詞が後続する形式には次の(6.10)と(6.11)の二つのタイプがある。

- (6.10) a. His jokes made us all laugh.  
 b. Have him come.  
 c. Let her go.

---

*John promised Mary to quit smoking.* である。

- (6.11) a. I saw him walk into the building.  
 b. I heard Mary scream.  
 c. I felt the house shake.

(6.10)は使役構文、(6.11)は知覚構文である。まず使役構文から見て行く。ここでの使役構文は既に述べた構文的な使役構文と、*make/have/let* など特定の語彙を用いている点と後続の不定詞が原形不定詞である点が異なる。既にみたように動詞が文で用いられる場合には定形となる必要がある。定形は発話者の陳述に対して、それを過去の出来事として伝えるのか現在の出来事として伝えるのか、断定的に伝えるのかそれとも断定を避けた判断を伝えるのかといった発話者の態度を表すものであるからである。従って文の中で動詞が二つ用いられている場合には、それぞれの動詞に関して別々の判断をしたものとして伝えるのかそうではないのかのどちらかという二者択一の選択となる。もう一つの動詞が不定詞(=to 不定詞及び原形不定詞)の形式で用いられている場合は、当然後者のケースとなる。すなわち、二つの動詞によって述べられている二つの事態は話者の一つの判断の世界に含まれていることになる。具体的に述べよう。

- (6.12) a. Nowadays, campers *carry* filters *to make* the water from streams safe *to drink*.  
 b. The body had been discovered by the cleaning woman who *came* in regularly every day *to clean* up the studio.  
 c. If you keep it (= bullying) up, I will tell the police, and I *will follow* you everywhere *to make* sure that your future is dead.

(6.12a)では「フィルターを持ち歩いて川の水を飲めるようにする」という意味から明白であるが、述語動詞 *carry* の現在時制形で示された話者の判断は後続の不定詞 *make* を取り込み、(b)の「毎日決まって掃除に来ていた掃除婦」は *came* という過去形によって不定詞の *clean* も過去の出来事として支配されている。(c)では助動詞 *will* によって *follow* と *make* が支配されている。これは当然のこのように思われるが、次を見てみよう。

- (6.13) She did not tell the truth to save her child.

「否定」も発話者の判断に関連する。(6.13)は「自分の子供を救うために本当の

ことを言ったわけではない」という意味であるが、これからわかるように否定辞 *not* はそれに続く [tell the truth to save her child] 全体を作用域としている。<sup>6</sup>

以上は *to* 不定詞のケースである。*to* 不定詞では二つの事態が一つの判断の下に統括されているのであるが、(6.10)の原形不定詞では発話者が認識している事態は、動詞が二つ用いられているにもかかわらず、一つであるという特性が見られる。(6.10a)を例にとると、そこで述べられている事態は「我々が笑った」ということにすぎず、動詞 *made* はその事態を引き起こした原因を語彙化しているにすぎない。その点が上で述べた(6.3)の *stand* などとの相違である。(6.3)では主語自身は *stand* という行為は行なわず、[the statue stand on the pedestal] 全体の原因であり、それは構文的に示されている。それに対して(6.10)では *his jokes* が原因であることが *made* によって明示され、[His jokes made] 部は後続の [us (=we) all laugh] という命題の原因として機能している。(b)の *have* は既に述べたように [him(=he) come] という事態が主語の領域の中に含まれることを示し、(c)の *let* は語源的な意味が “to let go through weariness, to neglect—OED” であることから推定できるように「手間をかけるのが面倒」といった意味であるから、命題 [her(=she) go] はそのまま認められているかたちとなる。

以上から(6.10)は述語動詞となっている使役動詞は後続する命題部分で述べられている事態の生起に対する主語（命令文では発話者）の主観的な査定をのべているとも考えることができる。ここで想起されるのが助動詞である。助動詞が文に対する発話者の主観を表すことは知られている。助動詞に後続する動詞の原形はその動詞によって表される事態が起こりうることあるいは起こることを想定されていることを表している。すくなくとも事態の生起に関して発話者は断定しているわけではない。使役構文において動詞が原形であるのは主語の命題に対する態度を表していることがその理由であろう。使役構文では後続する命題を *make* では意図的に生じさせ、*have* では命題部の状態がいわば中立的に主語の中に存在することを表し、そして、*let* ではそのまま放置するという態度を表していることになる。

(6.11)の知覚構文に移る。これも使役構文と同一の推論が可能である。原形が用いられていることは「見る」ことと「彼が部屋に入る」ことが一体の出来事としてとらえていることを示す。同時に、今述べた主語の査定という観点か

<sup>6</sup> 従ってこの意味では「本当のことをしゃべった」ことになるが、「子供を救うために本当のことをしゃべらなかつた」という解釈も可能と判断する母語話者もいるようである。



ら検討してみると、主語の「見る」「聞く」「感じる」という行為は命題部に対する査定そのものといえると思われる。主語は命題部の出来事を「見る」「聞く」「感じる」ことによって受け入れているからである。

#### 6. 1. 4 NP + V + NP + AP

この構造では動詞に後続する NP+AP 部は NP+(be)+AP すなわち形容詞を補語とする状態的命題を含む。従って、この状態的命題に対して主語が何らかの判断を下しているのかそれとも主語がその状態をいわば使役的にもたらしたのかという二通りが可能である。次例を見てみる。

- (6.14) a. I found your paper *interesting*.  
 b. I would like my steak *medium done*.  
 c. This job will make her *happy*.  
 d. I will have my car *repaired* at that gas station.  
 e. Leave me *alone*!

(6.14a)は[your paper (be) interesting]という命題に対して「それがわかった」という判断を下し、(b)は[my steak (be) medium done]という状態が「好きである」という査定を行なっている。それに対して(c)は主語 *this job* が[her(=she) be happy]という命題の原因である。しかし上で述べた(6.3)の使役構文とは異なり、主語が述語動詞で述べられている出来事(make)をもたらす原因であるということである。すなわち、この文は、判断を表す(a)や(b)と異なり、主語と述語動詞の[NP+V]部が後続の[NP+AP]で表されている命題の原因となり、[NP+AP]はその結果を表す。同様のことは(d)についてもあてはまる。興味深いのは(e)である。この語には既に用いられなくなっているが、次の意味が OED には掲載されている。

- (6.15) “4. † a. To neglect or omit to perform (some action, duty, etc.); = *to leave undone* (see 3d); also with inf. to omit *to do* something. *Obs.*” —OED

その他 OED には *leave* の語義・用法として次の(a)をあげ、用例として(b)を掲載している。

- (6.16) a. “5b. With *obj.* and *inf.*: To allow (a person or thing) *to* do something, *to* be done or dealt with, without interference. –OED
- b. “1895 *Law Times Rep.* LXXIII. 22/1 The court . . . left the parties to take their own course.” –OED

このように *to* 不定詞すなわち動詞が後続する用例があり、これは上の(6.10c)の *let* に酷似している。すなわち、*let* は動詞が後続するのに対して、*leave* は形容詞を後続させるというように機能が分化したように思われる。この *leave* は [me(=I) (be) alone] という命題を放置するという判断が行なわれていることになる。

さて、以上見て来たところから NP+V+NP+XP 構造は[NP+V]と[NP+XP]の二つに分けて考えることができる。そして、この形式には二つの意味があることも述べた。一つは前半の[NP+V]部は主語の判断に関係し、後半の[NP+XP]はその対象となる命題を表す。もう一つは前半部と後半部が因果関係によって結合しているケースである。実はこの因果関係が NP+V+NP+XP 形式を保つ大きな要因であることが考えられ、この形式の多くの構文はこの因果関係という意味を持つ。それが最も端的なかたちで表しているのが次の自動詞を用いた構造である。

- (6.17) a. When he broke his back he *laughed* it off and told Lotus he was fit for a test drive. –BNC
- b. They would have *laughed* Philip out of such a hopeless misalliance... even so, he could have married his colleen and it wouldn't have mattered because he was the youngest son... –BNC

(6.17)の述語動詞は自動詞であるから目的語を後続させることは不可能である。それにもかかわらずこのような見せかけの目的語が許されるのは、前半部と後半の命題部とが因果関係によって接続されているからにほかならない。これはさらにいわゆる「結果構文」と呼ばれる構文に適用できることになる。

- (6.18) a. Jasmine pushed the door open. –Levin1993:100
- b. The silversmith pounded the metal flat. –*ibid.*

c. The guests drank the teapot dry.

–*ibid.*

これらの構文にいずれも因果関係が関連していることは明白であろう。繰り返しになるが、因果関係は二つの命題の間にのみ成立する意味的なあるいは認知的な関係である。命題には動詞が含まれていることは必須条件であるから、二つの動詞が文の中で用いられている場合にはその関係が成立していると考えてもよいであろう。

### 6.1.5 NP + V + NP + PP/ NP + V + NP + NP

これまで上で扱った構文は動詞に後続する NP+XP 部が *be* 動詞的叙述関係を意味的に含んでいた。本節で扱う NP + V + NP + PP/ NP + V + NP + NP の2種類の構文は、叙述関係ではなく所有関係を表している。但し、この構文で用いられる前置詞はいわゆる場所を表す *in, on, over* などの前置詞ではなく、*to, of, for, from, with* である。その理由を明らかにするため前置詞について簡単ではあるが述べる必要があるであろう。

#### 6.1.5.1 前置詞の種類

前置詞が「閉ざされた類(Closed Class)」に属すると言われているが、その場合、何よりも一語の前置詞を想定していると思われる。事実、このような一語の前置詞は、上で言及した *considering* や *given* といった「例外」はあるものの、その成員にそれほど出入りがあるわけではなく、ある程度固定していると考えてよい。まして一音節から成る前置詞はリストとして列挙することはそれほど困難なことではない。例えば Quirk *et al.* (1985)は次を例示している。

(6.19) as, at, but, by, down, for, from, in, like, near (to), of, off, on, out, past, per, pro, qua, re, round, sans, since, than, through, till, to, up, via, with

上のリストに新しく付け加えるべきものも前置詞としての機能を示さないものも、おそらく、ないであろう。しかし、これらの単音節の前置詞は語源的には次の二種類に分類することができる。

(6.20) a. at, by, for, from, in, of, on, to, with

b. as, but, down, like, near (to) off, out, past, per, pro, qua, re, round, sans,

since, than, through, till, up, via

OEDによれば、(6.20a)に含まれる前置詞は語源がOEに由来するのに対して、(b)の類は語源的には次のいくつかのタイプがあることがわかる。

- (6.21) a. 複合語的な構成要素を持つもの : *as, but, since*  
 b. 他品詞に由来するもの : *down, like, near (to), out, past, than, till, up*  
 c. 他言語から借用したもの : *per, pro, qua, re, round, sans, via*  
 d. その他 : *off, through*

まず(6.21a)から見てみよう。*As*はOE時代の *all-swá* に由来し、本来は2語からなる。その意味は‘wholly so, quite so, just so’という指示詞的な語である。従って、これは(b)に含めることも可能である。*But*はOEでは *be- útan, bútan, búta* などの形式であるが、注意すべきは語頭の *be* が前置詞 *by* に相当しているということである。従って *but* は語源的には現代英語の *by means of, by virtue of, by way of* のような複合的な前置詞と考えることができる。意味は、‘on the outside, without’である。最後の *since* も語源的にはいくつかの要素によって形成されている。Wyldによれば、この形はOE *sið+ðan+s* ‘late+that+s’ という3つの要素から成るものである。<sup>7</sup> 語尾の *s* はいわゆる副詞的属格(adverbial genitive)の呼ばれ、*besides, always* などに見られる *s* と同類である。

次に(21b)に移る。*Down*は副詞 *dúne, dún* に由来するが、このもとの形は *adúne* であり、これは‘off the hill or height’を意味する。つまり名詞を基体としている複合語であるということが出来る。*Like*は語源は形容詞あるいは副詞であり(ちなみにOEDは *like* に前置詞という範疇を与えてはいない)、*near*は副詞 *néah* の比較級形 *néar* に由来する。*Past*は動詞 *pass* の過去分詞形(OEDでは perfect tense と呼ぶ)、*than*のOE形は *þanne, þonne, þænne* であり、*then*と同じ語つまり時間を表す副詞ということになる。*Till*はOEでは‘fixed point, station’などを表す名詞であり、*up*は副詞からの転用である。

(6.21c)では、OF借用の *sans*を除けばすべてラテン語から借用されたものである。

最後に(6.21d)の *off* と *through* をみよう。これらの語は純粹のOE起源であり、

<sup>7</sup> Henry Cecil Wyld ed. *The Universal English Dictionary* (1961)参照。

合成語でもない。しかし *off* は知られているように OE の *of* に由来し、*OED* によれば *off* という形で使われ始めたのは 13-14 世紀頃であると思われ、それはしかも副詞としての用法であった。前置詞として用いられ始めたのは 17 世紀以降のことである。従って前置詞としての *off* は副詞からの転用と考えてよいであろう。*Through* は OE でも *ðurh, purh* として前置詞であった。しかしこの語で興味深いのは、類語として「穴」を表す *thirl* を持ち、*OED* によればゴート語、古高ゲルマン語に遡ることができることである。すなわち、*through* は名詞あるいは動詞と関連する可能性が考えられるということになる。

以上を結論的に述べるならば(6.20b)の前置詞は、(i)語源的に前置詞以外の語との関連が密接にあること、(ii)外来語からの借用という 2 点にまとめることができる。すなわち語源的な観点からみると(6.20b)は OE からの前置詞とみなすことはできないということになる。従ってこれは(6.20a)の前置詞（ここでは中核前置詞と呼ぶ）が文法的に重要な機能を果たすと同時に意味的に明確さを欠くものに対して、(6.20b)の前置詞の表す意味が具体的かつ一義的で明確であるという相違と関連する。また、これは(6.20b)の前置詞句が文構造において付加詞 (*Adjunct*)として用いられるものが多いという事実とも関連するであろう。

さて(6.20a)の中核前置詞は統語的にも重要な働きをするが、ここでは意味的な側面に焦点を絞り、それぞれの特性を考察したい。<sup>8</sup>

### 6.1.5.2 中核前置詞の意味特性

すでに述べたが、これまでの前置詞に関する研究は、統語的および意味的アプローチを問わず、(6.20a)のような中核前置詞とその他の前置詞を全く区別することなく行われてきた。その当然の帰結として、中核前置詞が示す種々の特性は見落とされることとなる。さらに、これらの前置詞は以下のような意味的な点でも他の前置詞とは著しく異なる。

前置詞に対するもっとも一般的な考え方は、すべての前置詞にはそれぞれ特定の中核的意味があるという想定である。そしてその中核的な意味が様々な方式で拡張し、多様な意味を持つという説明がなされてきた。すでに挙げた文献はほとんどがその前提に立つものであるが、ここではその典型を *Dirven*(1993) にみてもみよう。彼は前置詞の意味は前置詞が固有に有する中核的意味から *time, state, area, means/manner, circumstance, cause/reason* へ拡張するという前提に立

<sup>8</sup> 統語的な特性については *Wada*(to appear)を参照されたい。

つ。しかし、そこでも扱われている前置詞は、単音節前置詞ばかりではなく、*about*, *over* など多音節の前置詞及び *out of* といった 2 語の前置詞も含まれ、より重要なことには *to*, *for*, *of* は考察の対象とはしていないなど恣意的な印象は拭えない。ところが中核前置詞に着目するとある意味的な特性が浮かび上がってくる。以下の(11)は Dirven が提示する表に *to*, *for*, *of* を付け加えたものである (\*印は筆者による追加)。

(6.22)	time	state	area	means manner	circum- stance	cause reason
<i>at</i>	+	+	+	+	+	+
<i>on</i>	+	+	+	+	+	+
<i>in</i>	+	+	+	+	+	+
* <i>for</i>	+	-	-	-	-	+
<i>from</i>	+	-	-	-	-	+
<i>by</i>	+	-	+	+	+	+
* <i>to</i>	-	-	-	-	-	+
* <i>of</i>	-	-	-	-	-	+
<i>with</i>	-	-	+	+	+	+

—Based on Dirven (1993)

(22)の表で注目されることがいくつかある。<sup>9</sup> まず、第一に *at*, *on*, *in* が *time*, *state*, *area* などすべての意味拡張を示すということ、第二は、*for*, *from*, *by* は *time* を意味拡張として共有するのに対して *to*, *of*, *with* にはそれが無いこと、第三に *by* には *time* の意味拡張がみられ、*with* にはそれがみられないが、この両者はそれ以外の点では区別がないことである。仮にこれらの前置詞を以下のように分類し、以下でその根拠を述べよう。

- (6.23) a. *at*, *on*, *in*  
 b. *for*, *from*, *by*

<sup>9</sup> もっとも注目すべき点は表中の前置詞すべてが *cause/reason* という拡張の意味用法を持つということである。Dirven には細部に関して検討すべき問題も少なくないが、もしこれが正しいとすればきわめて重要な意味を持つ。しかし以下の議論ではこの拡張の意味は考慮の対象とはしない。

## c. to, of, with

まず(6.23a)とそれ以外の前置詞との相違は明白であろう。前置詞(6.23a)の *at, on, in* が *time, state, area* などすべての意味拡張を示すのに対して、(6.23b, c)にはそのような拡張がみられない。意味拡張とは、その字義通りの意味からして、中心的な意味を持つ語にのみ限られた現象であると考えるべきであろうから、この相違は、(6.23a)の前置詞は何らかの意味を持つものに対して、意味拡張を示さない(6.23b, c)はそもそも拡張すべき意味そのものが欠如していることを示唆している。(6.23a)が意味を持つ前置詞であるとすればその選択は原則として求められている意味に応じ行なわれる。それに対して意味が欠如している可能性が大きい(6.23b,c)の前置詞はどのような原理によって選択されるのであろうか。本書でこの大きな問題に対して明確な解決策を提案することはできないが、所有構造という観点から分析し、一つの方向性を提示してみたい。というのは(6.23b,c)の六つの前置詞は所有という概念と関連するからである。

## 6.2 所有構造

英語では動詞 *give* などは次のような構文をとる。

- (6.24) a. John gave Mary a little present.  
 b. John gave a little present to Mary.

これは「与格移動(Dative Shift)」「与格交替(Dative Alternation)」などと呼ばれる現象である。この構文の最大の特徴は(6.24a)のよう動詞に後続する構造が (V+)NP+NP のように二つの名詞句が隣接していることにある。通常英語では同一範疇が何も介在することなく互いに直接隣接することは許されない。例えば *the key the lock* や *bread butter* では *the key to the lock* のように何らかの前置詞や *bread and butter* のように接続詞が必要である。それにもかかわらず、この構文では二つの NP の直接隣接が可能であるのはなぜであろうか。

それと関連する最大の要因は動詞の直後の NP が [+Human] あるいは [+Animate] という意味的な素性を持つ名詞に限られていることにある。そのことは次の例文のように人間を表さない名詞では前置詞を伴った構文のみが可能であることから明らかであろう。

- (6.25) a. \*John sent London the news.  
 b. John sent the news to London.

もう一つこの構文で注意する必要があるのは、いわゆる二重目的語構文と言われる(V+)NP+NPの形式を許す動詞は英語本来の動詞に限られ、ラテン系言語など借用語は困難なことである。このことは Green (1974), Levin (1993)など多くの研究者が言及している。ここでは Gropen *et al.* (1989)を見てみる。Gropen らは次の例を示している。

- (6.26) <giving>: John gave/\*donated/\*contributed him some money  
 <communication>: She told/\*explained/\*announced him the news  
 <sending>: She sent/\*transported him the goods  
 <creation>: He built/\*created/\*designed him a toy.  
 <obtaining>: She bought/\*purchased/\*collected him some food.

–Based on Gropen, *et al.* 1989

明らかなように上の各種類の動詞の中で Gropen らが指摘するようにラテン系の動詞はこの構文には用いられない。この二重目的語という特殊な語順とラテン系の動詞にはこの構文が困難であるという二つの特徴は実はこの構造が英語特有の構造であるという点に集約される。英語固有の構造であるがために古くからの英語に由来する動詞は許されるのに対して、英語にはまだ馴染みの薄い外来語では困難であり、英語特有の構造であるために英語特有の二重目的語という語順が可能なのである。

しかし、英語特有の構造ではあるが、さらにこの構造には重要な特徴がある。それは動詞に直接後続する目的語が<人間> [+Human]を表す名詞に限定されるということである。<sup>10</sup> この特性が「所有」という概念と密接に関連することはある意味では当然であろう。そもそも所有は人間特有の関係概念であると思われるからである。また本書では既に動詞の後続する命題部には叙述関係と所有関係の二つの関係が観察できるということを見て来た。(V+) NP+NP 構造では所有

---

<sup>10</sup> 広くは動物を表す名詞や比喩的に用いられた場合なども含むが、ここでは「人間名詞」 [+Human]として記述を進める。また本節における[+THING]は<モノ>を表す名詞の意味であり、認知文法でいうところの THING とは異なる。



関係含まれることになる。

ところでこの所有関係は次のような構造をとる。

(6.27) Possessive Structures (1)

- a. NP + V + NP1[+HUMAN] + WITH + NP2[+THING] *provide*
- b. NP + V + NP1[+HUMAN] + NP2[+THING] (Positive Possession)
- c. NP + V + NP1[+HUMAN] + NP2[+THING] (Negative Possession)
- d. NP + V + NP1[+HUMAN] + OF + NP2[+THING] *deprive*

(6.28) Possessive Structures (2)

- a. NP + V + NP2[+THING] + FOR + NP1([+HUMAN]) *buy, provide*
- b. NP + V + NP2[+THING] + TO + NP1([+HUMAN]) (Positive Possession)
- c. NP + V + NP2[+THING] + TO + NP1([+HUMAN]) (Negative Possession)
- d. NP + V + NP2[+THING] + FROM + NP1([+HUMAN]) *steal*
- d'. NP + V + NP2[+THING] + OF + NP1[+HUMAN] *ask*

(6.27)は[+HUMAN]という素性を持つ名詞が動詞の直接後続する形であり、(6.28)は逆に<モノ>つまり被所有物が直接目的語となっている構造である。それぞれに対応する主な動詞は以下である。

- (6.29) a. credit, entrust, furnish, issue, leave, present, provide, serve, supply, trust; arm, burden, charge, compensate, equip, invest, ply, regale, reward, saddle,
- b. feed, give, lease, lend, loan, pass, pay, peddle, refund, render, rent, repay, sell serve, trade; advance, allocate, allot, assign, award, bequeath, cede, concede, extend, grant, guarantee, issue, leave, offer, owe, promise, vote, will yield; book, buy, call, cash, catch, charter, earn, fetch, find, gain, gather, get, hire, keep, lease, leave, order, phone (doctor), pick (fruit, flower), pluck (flower), procure, pull (a beer), reach, rent, reserve, save, secure, shoot (game), slaughter (animal), steal, vote, win,
- c. cost, deny, forbid, refuse, save, spare, take,
- d. absolve, acquit, burgle, cheat, cleanse, con, cure, defraud, denude, deplete (a pond of fish), deprive, disabuse, disarm, dispossess, divest, drain, ease,

exonerate, fleece, free, milk, pardon, plunder, purge, relieve, rid, rob, strip, swindle, unburden, wean,

上の(6.29)の動詞を見て(b)と(c)の二重目的語の構文に現れる動詞にOE由来の動詞が多く、(a)と(d)の動詞にはラテン系の外来語が多い傾向にあるということは言えるであろう。

ところで所有には「肯定的所有(Positive Possession)」と「否定的所有(Negative Possession)」の二種類がある。前者は通常の「与える」など所有の状態に至らせる意味を持つ動詞であり、後者の否定的所有は所有状態を解消するすなわち「奪う」という一群の動詞である。例えば *deny* という動詞がその代表的なものである。この動詞は次のような構文をとる。

- (6.30) a. She denies her child nothing.  
 b. She denies nothing to her child.

意味は「子供には何も与えないものはない」つまり「何でも与える」という意味であり、しかも *give* と全く同じ構造をとる。このような場合一般的に *deny* は「否定する」という意味と「与えない」という意味に多義的であると思われるかも知れない。事実辞書では必ずこの二つの意味が掲載されている。例えば次は *Cobuild*<sup>1</sup> の記述である。

- (6.31) If you **deny** someone something that they need or want, you prevent them from having it. EG *The government exploited their labour while denying them social equality.*  
 –*Cobuild*<sup>1</sup>

しかしこのような場合「与えない」の意味が(6.31)から明らかなように“**If you deny someone something**”という構文で用いられた時に限定されていることに注意すべきである。つまり、「与えない」という意味は動詞 *deny* の直後に人間を表す名詞句が生じている(V+)NP+NP という形式に限られるのである。ということは、*deny* は「否定する」という意味の動詞であり、「与えない」という意味は持たないという推論も成立する。それでは何が否定されているのであろうか。それは既に明らかであろうがまさに「所有関係」という命題が否定されているのである。動詞 *deny* は「否定する」、正確には「何かが真実ではないというこ

と(When you **deny** something, you say that it is not true. –*Cobuild*<sup>1</sup>)」という意味であるから、「否定」の対象として命題が背後に存在しているはずである。従って(6.30a)は「子供が何かを所有するという関係にはない」という命題が否定されていることになる。

ついでながら、(6.30b)において前置詞 *to* が用いられていることも注目すべきである。この前置詞 *to* が所有関係を表す標識として機能していることは明らかではないかと思われる。すなわちこのような *to* はそれ自体の意味によって使用の動機付けが与えられるものではなく、関係概念を表す標識と考えるべきである。

肯定的及び否定的所有は他にもある。例えば次の文を参照されたい。

- (6.32) a. She lost a single set to her opponent.  
 b. The incident lost him the seat.  
 c. The book won him fame.

(6.32a)はテニスなどのセットを失ったという意味であり、この構文は *to* が用いられている。この場合動詞 *lose* は必ずしも *give* と同じような参与名詞句を3つ必要とする3項動詞ではない。それにも関わらず上のように一見3項動詞と同様の構造を示しているのは、一セットが相手の所有物となるという命題の原因となっているのが「負けた」という述語動詞で述べられているもう一つの命題である。すなわちここには二つの命題の間に因果関係という関係概念が隠されていることになる。これは肯定的所有関係である。それに対して(6.32b)は彼が所有していた議席を奪ったことを意味し、これは *deny* と同様の否定的所有関係である。ここでは主語である *the incident* も注目すべきである。なぜならばこれ自体が「何らかの出来事が起こった」という命題的な意味を持っているからである。従って次のような文は「*John* が(何かをおこなったことが)原因となって」結果的な議席を失うという意味以外の解釈は不可能である。

- (6.33) John lost Mary the seat.

このような解釈の修正は構文の力によってもたらされたということになる。同様のことは(6.32c)についても当てはまる。その本によって彼は名声を博したということになる。

このように見てくると(V+) NP+NP 部が持つ所有関係という意味が肯定的な所有となるか否定的な所有となるかは述部の動詞が決定するようにも思われるが、それほど単純ではない。それを物語るのが動詞 *save* や *spare* である。

- (6.34) a. I will save you a little popcorn.  
b. You could save yourself a lot of work if you used a computer.

- (6.35) a. Can you spare me a few minutes?  
b. Spare him (from) trouble.

上の文では(a)が「与える」の意味の肯定的所有であり、(b)が「取り除く」という意味の否定的所有である。動詞は(a) (b)共に同一であるからどちらの意味となるのかは「所有物」の内容ということになるであろう。プラグマティックな要素がここに入り込む可能性があるであろう。

このようなことは、しかし、問題の構造に所有関係を認める立場を否定するものでは当然ない。むしろ否定的所有にしても肯定的所有にしても所有関係という意味がこの命題部には存在することは動かしようのない事実である。これらの文には二つの命題が基本的には存在し、その間にも因果関係が成立している。

最後に動詞 *envy* について触れておこう。この動詞は次のように二重目的語に類似した構造を後続させる動詞である。

- (6.36) I envy you your success.

しかしこの動詞が二重目的語動詞ではないことは次の文に見られるようにどちらかの目的語を省略することができることから明らかである。

- (6.37) a. I envy you  
b. I envy your success.

このようなことから Jespersen などは「二重直接目的語」という窮余の策を考える。

ところで(6.37a)の *I envy you* という文であるが、この目的語の *you* は単なる人

間を表すものとしての *you* ではないことに注意する必要がある。つまりここで  
 の *you* は *I love you*. や *I hate you*. あるいは *He will surprise you*. などの *you* とは異なり、  
 特定の状態にあるものとしての *you* であり、*you* についての背景的知识が前提となっ  
 ている。そもそも「うらやましい」などという感情表現にはその感情  
 を引き起こす原因が必要である。従って、(6.37a)がやや省略的な表現であると  
 すれば、(6.37b)はそうではない。そしてこの目的語の名詞句も *your success* のよ  
 うに所有格(代)名詞句が冠詞の位置に生ずるのが特徴である。名詞の所有格  
 はそれ自身が命題的な内容を含む。例えば *your arrival*、*your love of God* などに  
 対応する文が想定されていることは明らかであり、一見文が含意されていない  
 と思われる *your house*、*your book* などの場合ではまさに所有関係が含意されて  
 いる。以上のことから結論的に言えば動詞 *envy* の目的語は何らかの命題的内容  
 を持つ要素でなければならないということになる。<sup>11</sup>

### 6.3 所有関係と叙述関係の間

これまで本書では所有関係と叙述関係が二者択一であるかのような述べ方を  
 して来た。しかし興味あることにこの二つの命題的概念はそれほど明確に区別  
 できるとは限らないという現象があることについて最後に述べる。

例えば次の文を見よう。

- (6.38) a. Straight after your last cigarette your body will begin to cleanse itself of  
 tobacco toxin. - COBUILD<sup>2</sup>  
 b. The illness depletes the body of vitamins. - CIDE  
 c. He made a fortune swindling old ladies out of their life savings. - LDCE<sup>3</sup>  
 d. I'm still trying to wean my daughter off sugary snacks. - LDCE<sup>3</sup>

上の(a)は身体からタバコの毒がなくなることを述べ、(b)も身体からビタミン  
 がなくなることを述べている。すなわちこれらは否定的所有の例である。それ  
 に対して(c)は同じように生涯の蓄えをだまし取られることを意味しているが、  
 使用されている前置詞は *out of* である。そして(d)では甘い菓子を与えないとい  
 う意味であるが遠ざけるという位置的な表現となっている。つまり(d)では所有  
 の意味と叙述の意味とを明確に区別することが困難ということである。傾向と

<sup>11</sup> 因果関係については Givón (2003) を参照されたい。

しては *off* あるいは *out of* が次のように位置的な表現である。

- (6.39) a. Keep children *off* the premises.  
 b. Keep the dog *out of* our garden.

それに対して、*of* が次のように所有表現ということはいえそうである。

- (6.40) a. Mrs Clegg was severely beaten and *robbed of* all her possessions. –LDCE<sup>3</sup>  
 b. The illness *depletes* the body *of* vitamins. –CIDE  
 c. Jessie could *relieve* you *of* some of the chores. –LDCE<sup>3</sup>  
 d. Even whisky could not *cure* him *of* his anxieties. –LDCE<sup>3</sup>  
 e. Walking helped to *ease* him *of* his pain. –OALD<sup>5</sup> (excluded in 6<sup>th</sup>)  
 f. He *conned* me *out of* £5! –LDCE<sup>3</sup>  
 g. A lot of these children have been *deprived of* a normal home life. –LDCE<sup>3</sup>

しかし、周知の通り *off* と *of* は同一語源の語であることから上のような曖昧性が生ずるのも理由のないことではない。それ以上にここで重要なことは、所有表現と叙述表現とが時には区別が困難な場合もあるということである。

#### 6.4 所有関係と前置詞の選択

ところでこの所有構造に用いられる前置詞について最後に触れておこう。この前置詞は *to, of, for, from, with* が主である。この前置詞は上の(6.23)で述べたように(a)の *at, on, in* とは異なり意味はほとんどないといってよい。言い換えると *at, on, in* が有するような意味とは異なる、あるいは別の種類(*order*)の「意味」に関係していると述べるのがより正確であろう。それがどのような種類の意味であるのかについては今のところ分からない。既に述べたように、*at, on, in* など、あるいはその他の *over, under, above, below, along* などがそれぞれの持つ意味によって選択される。それに対して(b)の *for, from, by*、そして(c)の *to, of, with* はどのような理由によってそれぞれの使用が選択されるのであろうか。

本節において述べたことからこれらの前置詞が何らかの所有に関連していることは推測がつく。それをよく物語るのが、*with* である。この前置詞は *provide* などラテン系の動詞が用いられた所有構造で用いられる。

(6.41) a. Cows provide us *with* milk.

b. Cows give us milk.

上例は意味はほとんど同一であるといつてよいであろう。違いは用いられている動詞が(a)ではラテン系動詞であるのに対して、(b)では本来の英語が用いられている点である。二重目的語構文が英語特有の構文であることから英語本来の語彙である *give* を用いた(b)では(V+)NP+NP は問題がない。しかし(a)では、一般的な述べ方をするならば、外来語である *provide* を英語の構文に馴染ませるためには前置詞の助けが必要であるという言い方も可能であると思う。なぜならば V+NP+PP という形式はある意味では最も英語として安定した構文であるため（その意味では二重目的語構文は極めて例外的な構造をなしていることになる）それを保持するために前置詞の助けが必要である、ということになる。この位置の前置詞は英語の構造を成り立たせるために欠かすことのできない前置詞である。すると(6.23)の9つの前置詞の中でどれかを選択しなければならないということになる。その際に(a)の *at, on, in* の3個はそれぞれ特有の意味を持つために所有に関する表現からは排除される。前置詞 *at, on, in* はそれではどのような意味を持つのであろうか。この問題を論ずることは本書の予定の量と範囲を超える作業であるのでここでは結論だけを述べる。従来 *at, on, in* は基本的には場所的な意味があり、そこから種々の意味拡張によって様々な用法がもたらされるという議論が行なわれていた（例えば Dirven 1993 など）。しかし、筆者は *at, on, in* はそれぞれ<点(Point)> <非有界性(Non-boundedness)> <有界性(Boundedness)> を最も中核的な意味として持つと考える。<sup>12</sup> ここで大事なことは、この<点(Point)> <非有界性(Non-boundedness)> <有界性(Boundedness)> が場所的な意味と直接的には結びつかず、認知文法でいうところの「モノ(Thing)」としての概念であるということである。すると所有という概念が場所的な意味と密接に関連することから *at, on, in* は用いることは事実上困難ということになる。

そこで(6.23b, c)の6つの前置詞からの選択ということになる。(6.23)の(b) *for, from, by* と(c) *to, of, with* の相違は、まだ確定的なことがいえる段階ではないが、動詞の項構造にとって必須かそうではないかという点にあるように思われる。例えば次を見られたい。

<sup>12</sup> この主張のヒントは Miller (1985), Bennet (1983), Herskovits (1986)から得ている。

- (6.42) a. The garden provides us \*(with vegetables)  
 b. The garden provides vegetables (for us).  
 c. John gave Mary \*(some pieces of advice)  
 d. John gave some pieces of advice \*(to Mary).  
 e. Bill bought a digital camera (for Mary)  
 f. Bill bought (Mary) a digital camera.

特に(6.42)の(a)の動詞 *provide* では *with* 句は、(c)の *give* における目的語と同様に、必須である。またその他の例からも *for* は任意の要素である可能性が極めて高い。まだ仔細に検討する必要のある問題が多いが、前置詞 *with* が所有構造で選択されるのは、使用されている動詞が外来語の場合には、それが(V+)NP+NPという二重目的語構造に馴染まないため、*with* による支えが必要となる。

## 6.5 NP + V + XP

ここで扱う NP+V+XP 型の構造には二つの特徴がある。第一に動詞に後続する XP が副詞句(AdvP)あるいは形容詞句(AP)であることである。XP が名詞句 NP の構造は前節で扱った他動詞構造になり、XP が副詞句あるいは形容詞句であるとする自動詞が予想されるが、それにもかかわらずこの構造の動詞は他動詞であるということが第二の特徴である。いわばこの構造は他動詞が使われているにもかかわらず構文は自動詞構文をとるという曖昧な構文であり、後に見るところから分かるが、能動態と受動態との中間的な構文であることから中間構文といわれる特殊な構文である。

### 6.5.1 中間構文の特性

まず例を挙げよう。

- (6.43) a. My plays won't act. —Jespersen 1927  
 b. The meat cooks all the better if you cook it slow. —*ibid.*  
 c. Our exerciser folds and stand on end. —Fellbaum 1985  
 d. This dog food cuts and chews like meat. — *ibid.*  
 e. The paint sprays on evenly. —*ibid.*  
 f. This car handles smoothly. — *ibid.*



- g. The clothes wash with no trouble. —van Oosten 1977  
 h. I could tell it was a tangelo from the way it peeled. —*ibid.*  
 i. The book reads easily/well. —Fiengo 1980  
 j. Clay tablets decipher with difficulty. — *ibid.*  
 k. Pine saws well. — *ibid.*

(a)の文は「私の戯曲は上演に向かない」、(b)は「その肉は時間をかけて料理するとおいしくなる」、(c)は「当社の運動器具は折りたたみ可能で場所はとりません」、(d)は「このドッグフードは切って噛んでみると肉のようだ」といった意味であり、主語は動詞に対して意味的には目的語に相当する。通常意味的には動詞の目的語に相当する名詞句が主語となる構文は受動態のほうであるが、この構文では主語となっているのである。この構文については Jespersen は能動受動態(Activo-Passive)と呼び、Fellbaum などは中間態(Middle Voice あるいは中間構文(Middle Constructon)と呼ばれている。

中間構文の特徴は、まず第一に、他動詞であれば原則的には可能であるということをあげることができる。

- (6.44) a. The bureaucrats bribe easily. —Keyser and Roeper 1984  
 b. The chickens kill easily. —*ibid.*  
 c. The floor waxes easily —*ibid.*  
 d. Greek translates easily. —*ibid.*  
 e. The baggage transfers efficiently. —*ibid.*  
 f. Messages transmit rapidly by satellite. —*ibid.*

ここで用いられている動詞がいずれも他動詞であることに異論を挟むことは出来ないであろう。しかし、次の他動詞では容認度は極端に下がる。

- (6.45) a. \*French acquires easily. —Keyser and Roeper 1984  
 b. \*The argument assumes easily. —*ibid.*  
 c. \*The answer knows easily. —*ibid.*  
 d. \*The answer learns easily. —*ibid.*

(6.44)と(6.45)にみられる容認度の相違は用いられている動詞の特質に原因があ



- b. \*The wall paints. -*ibid.*  
 c. \*The chicken kill. -*ibid.*  
 (6.50) a. \* The meat cuts.  
 b. \*This dog food cuts and chews.  
 c. \* This scientific paper reads.

この例が示すように中間構文は動詞に後続する要素は必須である。

### 6.5.2 二種類の間接構文

この第三の特性は中間構文の最も重要な特性に関係している。(6.49)の例は副詞が省略された例であり、(6.50)は形容詞的要素が省略された例である。まず副詞の場合を検討してみる。

中間構文で用いられる副詞には一定の意味的な制約がある。

- (6.51) a. These chairs fold up easily/quickly/in a jiffy/\*clumsily/\*competently.  
 b. Russian novels read easily/like mysteries/\*by the fireplace/\*voraciously.  
 c. Our Japanese cars handle well/smoothly/easily/\*expertly/\*cautiously/  
 \*carefully.

(a)の副詞は人間が行なう動作についてそのやり方が「ぎこちない(*clumsily*)」あるいは「巧みである(*competently*)」ということであり、(b)と(c)では場所を表す副詞(*by the fireplace*)や読み手の心理状態に言及する副詞(「むさぼるように(*voraciously*)」「注意深く(*cautiously, carefully*)」)である。

他動詞であるとすれば、そこには通常はその主語となるべき動作主(*Agent*)が含意されてしかるべきである。しかし、中間構文で用いられる動詞が、他動詞であるにもかかわらず、*clumsily, competently, voraciously, cautiously, carefully*などの副詞が共起できないということは、中間構文には特定の動作主の含意はまったくないということを意味する。その概念があるとすればその行為あるいは動作に関わる可能性のある総称的な人一般ということになるであろう。

それに対して、同じ副詞であっても *easily, well* などのような副詞は、そしてそのタイプの副詞のみが、共起する。このような副詞は動詞で表される出来事や変化が生ずる様態に言及する副詞である。(6.44)を例にとると、「(a)官僚を買収するのはたやすい」「(b)鳥を殺すのは簡単」であり、「(c)荷物の搬送の効率は

よい」「(f)メッセージは効率的に伝達される」というように、出来事の生じ方あるいは主語が被る変化の様態そのものについて述べているのがこのような副詞である。このような中間構文をここでは「変化型」と呼ぶことにする。

従ってこの変化型中間構文では、まず、変化を表す動詞のみでは情報として不十分であるということがいえるであろう。しかし、さらに重要なことはそのように副詞を欠いた文には発話者の視点もしくは態度も欠如するということを指摘する必要がある。一般に文には発話者の発話に対する心的な態度が何らかの形で現れる。典型的な例が助動詞を用いた *John may come here today.* のような文である。この文は[John come here]という命題に対して発話者が「その可能性がある」という判断もしくは査定を下し、助動詞 *may* がその役割を担っている。同じことは助動詞を用いない *John comes here today.* についても当てはまる。*may* が推測的な査定を表す文であるのに対して、この文は「断定的」な査定を行っている。その標識となっているのが *-s* という 3 人称単数現在の標識である。<sup>14</sup>

ここで用いられる *clumsily, competently, voraciously, cautiously, carefully* などの副詞が発話者の主観的な態度をあらわすことによって、成立しているのがこの変化型中間構文である。

変化型の中間構文が動詞そのものが表わす出来事に主観的に言及するとすれば、形容詞類を後続させる中間構文はその主語について述べる構文である。(6.50)の非文法的文に形容詞類を補った次の文は問題がない。

- (6.52) a. The meat cuts tender.  
 b. This dog food cuts and chews like meat.  
 c. This scientific paper reads like a novel.

このタイプの文は動詞に直接後続する語が形容詞であることから、第 3 章で述べた *be* 動詞型の文であるという推測が可能である。そして事実(6.52)の文はいずれも動詞を *be* 動詞に置き換えることが可能である。

- (6.53) a. The meat is tender.  
 b. This dog food is like meat.

---

<sup>14</sup> Quirk *et al.* (1985)ではこのような平叙文にも無標ではあるが法性(Modality)があることを認めている。

- c. This scientific paper is like a novel.

この *be* 動詞型中間構文は次のような文とも類似する。

- (6.54) a. The paper feels rough.  
 b. That sounds interesting.  
 c. The flower smells sweet.  
 d. This dish tastes good.

さらに次のように通常は中間構文とは見なされない文とも共通する。

- (6.55) a. He grew tall.  
 b. The sun shines bright.  
 c. The natives go naked.  
 d. He married young and died poor.

第3章では形容詞が動詞に直接後続する文は主語の属性あるいは状態を述べるということ述べた。そのことは他動詞が述語動詞となっている中間構文についても当てはまることになる。それだけ形容詞の果たす役割が重要ということになる。

最後に時制についても述べておこう。中間構文は原則として現在時制形でのみ用いられる。<sup>15</sup> 一般に動詞の現在形は次のように主語の特性を表すことが多い。

- (6.56) a. Mr. Todd teaches singing. —安井 1982  
 b. He sings every day. —*ibid.*  
 c. He comes on time, and never breaks his words. —*ibid.*  
 d. Father reads the paper at meals. —*ibid.*

特に上のように動作を表す動詞が現在形で用いられると、動作を表さずに主語の習慣や特質を表す。それに対して状態を表す動詞は現在形においても過去形

---

<sup>15</sup> 例えば *The book sold well.* のように過去形で用いられるケースもある。

であっても表す意味は状態である。

- (6.57) a. John resembles his father.  
b. John weighs eighty kilos.  
c. It costs too much.  
d. Mary has blue eyes.

中間構文はこのように主語の変化の可能性について発話者の主観的な判断を表す変化型中間構文と今述べた **be** 動詞型中間構文との二種類が存在するが、それらに共通していることは主語の属性を述べるということになる。属性に関する判断であることから、出来事が生起するのかもしれないか、あるいは生起したのかもしれないのかという事実認定とは異なる。同時に現在時制という形式は主語の属性のみを表す時制であるという特性を持つ。これら二つの条件が合致したところで成立するのが中間構文ということになる。

## 第7章 自動詞型

従来、特に学校文法や各種辞書の記述では、動詞に直接前置詞句が後続する場合は自動詞と見なされている。例えば *look (at)* など前置詞動詞と呼ばれる一群の動詞である。動詞が名詞句を直接後続させる場合は他動詞であり、動詞に何も後続させることのない動詞は自動詞であるが、伝統的には、名詞句以外の要素、例えば前置詞句や形容詞句を後続させた場合もすべて自動詞とするという慣習的な扱いが行なわれている。そのような「割り切り方」はある意味において必要な場合もあるであろうが、他動詞と自動詞の根本的な相違を考慮に入れると、かえって事態を複雑にする可能性がある。例えば動詞 *die* は自動詞であるが、動詞 *look* も *die* と同じ自動詞であるとするのは大きな問題であろう。この問題については後に検討することとして、ここではまず、NP+V という構造を見ることにする。というのはこの構造も目的語名詞句を欠いているという形式的特性が必ずしも自動詞であるという保証にはならないからである。

### 7.1 NP + V 構造の多様性

Jespersen (1927: §16.0)は「他動詞の自動詞的用法」として以下のように分類している。

#### (7.1) <Object Omitted>

- a. I wrote (to him) a fortnight ago.
- b. She will pick up when she gets to England. [i.e. pick up health]
- c. Verreker shrugs. [rare, i.e. his shoulders]

この例は文脈から省略されている目的語が唯一的に復元可能な場合である。次は再帰代名詞が省略されているケースである。

#### (7.2) <Omission of Reflexive Pronouns>

- a. He behaved badly. Cf. Behave yourself!
- b. He behaved (\*himself) kindly to her.
- c. He bowed. Cf. He bowed himself out of the room.
- d. He declared against the proposal.

- e. I dressed and shaved.
- f. He hides behind the door.
- g. Do keep quiet!
- h. He qualified himself for office. [in American without *himself*]
- i. I overslept myself. [in American without *myself*]
- j. He overworked.

次は相互代名詞が省略されている例である。

(7.3) <Omission of Reciprocal Pronoun ‘each other’>

- a. They kissed and parted.
- b. They married in haste and repented at leisure.
- c. embrace/ greet/hug/know/kill/love/see, etc.

これらは目的語が省略されているということから他動詞であることには違はなく、従って自動詞的用法という Jespersen の呼称は間違いではないが、同じく Jespersen があげている次の例とは根本的に異なる。

(7.4) <The Move and Change-Class>

- |                                                    |                               |
|----------------------------------------------------|-------------------------------|
| a. move a stone.                                   | The stone moves.              |
| b. roll a stone.                                   | The stone rolls.              |
| c. change the subject.                             | The fashion changes.          |
| d. end the discussion.                             | The meeting ended at 10.      |
| e. stop the train.                                 | The train does not stop here. |
| f. boil water.                                     | The water boils.              |
| g. beat the child.                                 | The heart beat violently.     |
| h. The soldiers burned everything that would burn. |                               |

上の(7.1)から(7.3)の文では他動詞用法はもとより、「自動詞的用法」においても主語は意図的にその行為を行うという特性が共通に見られる。<sup>1</sup>すなわちこれ

---

<sup>1</sup> Jespersen には動詞で表されている出来事が意図的とは考えられない次のような例も含まれている。



らの文は本来目的語を必要とする他動詞であると考えることができる。

それに対して(7.4)の右側の文の構造は明らかに自動詞であり、(7.1)-(7.3)のように目的語は省略されてはいない。むしろ左側の構造からも明らかなように、例えば動詞 *move* を例に取り上げると、意味的には他動詞の目的語である *a stone* が自動詞では主語となり、逆に自動詞の主語が他動詞用法では目的語となっている。<sup>2</sup>

(7.4)の右側の文が有するその他の文との最大の相違点は、動詞の意味的な要因と構文的要因が互いに関連しているという点にある。他動詞構文 (NP+V+NP型) には主語の意図的な行為によって目的語が変化を被るという特徴があることは既に見た。従って、他動詞構文では影響を与える参与名詞句と影響を受ける参与名詞句との二つがなければならない。それは目的語が省略されていても変わることはない特性である。それに対して、(7.4)の右側の文は、左側の動詞と同一の動詞が用いられているにもかかわらず、主語の意図性は全くない。(a)であれば「石が動く」という事態を述べているにすぎない。誰かが動かしたということ、あるいは何らかの原因によって動いたということがあっても、それはこの文とは関係のないことである。言い換えるならば、主語にそのような属性があるという述べているのが右側の文である。

同じようなことは次の(7.5)についてもいえる。形容詞は、あるものや人などの状態を記述する。するとその状態が何らかの外的な原因によってもたらされたのかそうでないのかという二つの可能性が考えられる。例えば、同じく Jepsen が挙げている次の(7.5)を見てみる。

(7.5) <Verbs from Adjectives>

- |                                   |                          |
|-----------------------------------|--------------------------|
| a. cool one's enthusiasm.         | The earth cools down.    |
| b. warm an apartment.             | My heart warmed.         |
| c. heal a wound.                  | The wound healed slowly. |
| d. clear up a difficulty.         | The weather clears up.   |
| e. She brightens the whole house. | The prospect brightens.  |

---

a. I know / I see / I remember / I had forgotten / How can I tell?

b. The Ohio empties (itself) into the Mississippi.

(a)の *know*, *see* などは典型的な他動詞とはいえないが、文脈から省略されている要素が復元できることは明らかであり、(b)は一種の擬人的な表現であろう。

<sup>2</sup>このような動詞は非対格動詞(unaccusative verbs)と呼ばれている。Levin and Hovav(2005)等参照。

- f. He opened the door.                      The door opened.

(a)の動詞 *cool* を例にとると、左側の他動詞用法では、例えば *He had a wetted towel to cool his head.* (BNC)のように直接「頭を冷やす (熱をさます)」原因は「ぬれたタオル」という外的要因であり、右側の *The earth cools down.* にはそのような外的な要因は考えられてはいない。当然物理的あるいはその他の原因はあるのであるが、そのことが言語的に直接関連する意味を持つとは言えない。これは丁度、名詞の *grass seed* や *sand* が客観的には粒子であることから可算名詞であるはずであるが、言語的あるいは認知的にはそのような認識の必要性がないことと並行的な現象である。

変化の原因が外的な要因ではないとすると、それは必然的に内的な要因に求められることになるであろう。言い換えると、主語にその変化の原因が内在的に備わっているということになる。これが自動詞の最も重要な特性である。

次に Jespersen が挙げる他動詞の自動詞的用法は次のように名詞が関係しているケースである。

(7.6) <Verbs from Substantives>

- a. This railway *benefits* the community.  
The community *benefits* by (from) this railway.
- b. I shall be *delighted* to hear from you.  
He *delighted* to hear of all things.
- c. He could *board* somewhere else . . . two or three houses where he thought he could be *boarded*.

その他に彼は *board* 「宿泊する/させる」等を挙げているが、Quirk *et al.* (1985:1561)は名詞が動詞として用いられるケースについて次のような意味的な特性を指摘している。

- (7.7) a. ‘To put in/on N’: *bottle* [‘to put into a bottle’], *corner*, *catalogue*, *floor*, *garage*, *position*, *shelve (books)*, etc.
- b. ‘To give N, to provide with N’: *butter*, *coat*, *commission*, *grease*, etc.
- c. ‘To deprive of N’: *core*, *gut*, *peel*, *skin*, etc.
- d. ‘To . . . with N’: *brake*, *elbow*, *fiddle*, *hand*, *finger*, *glue*, *knife*

- e. 'To be/act as N with respect to . . .': *father, nurse, parrot, pilot, referee*
- f. 'To make/change . . . into N': *cash, cripple, group*
- g. 'To send/go by N': *mail, ship, telegraph; bicycle, boat, canoe, motor*

注目されるのはここで同書では、これらは多くが他動詞であるが、(d)の一部と(g)の'go by N'類である *bicycle, boat, canoe, motor* 等は自動詞も可能であると述べていることである。(7.7)が他動詞であることはそれぞれに与えられている(To put in/on N'といった意味から察することができるが、それらの一部が自動詞用法が可能であるというのは何を意味するのであろうか。まず(d)の動詞の自動詞用法を *OED* により見てみる。

(7.8) *brake: intr.* To be checked by a brake. Also with up.

1891 E. S. Ellis *Check 2134* ii. 13 He felt the train braking up for the Station. 1937 J. Squire *Honeysuckle & Bee* 149 A car suddenly braked to a standstill outside the door.

*elbow: intr.* To make an 'elbow' in one's path, go out of the direct way.

1804 Southey in Robberds Mem. W. Taylor I. 503, I would elbow out of my way to Norwich. 1839-40 W. Irving *Wolfert's R.* (1855) 149 Elbowing along, zig-zag.

*fiddle: intr.* To play the fiddle or violin; now only in familiar or contemptuous use. Also *fig.*

1836 W. Irving *Astoria* I. 216 They feast, they fiddle, they drink, they sing.

*hand: intr.* To go hand in hand, concur. *Obs.*

1624 Massinger *Renegado* iv. i, Let but my power and means hand with my will.

*finger: 3. intr.* To make restless or trifling movements with the fingers (const. *at*); also, to play or toy *with*. **to finger for:** (*fig.*) to grope for, hanker after.

**1858** KINGSLEY *Poems, Sappho* 22 She flung her on her face..And fingered at the grass. **1869** TENNYSON *Pelleas & Ettarre* 433 Pelleas..Fingering at his sword-handle.

*glue: 3. intr. a.* To stick together in virtue of some inherent property; to

adhere. Also *fig.* **b.** To admit of being fastened by glue.

**1885** *Spons' Mechanics' Own Bk.* 131 The wood glues well.

*knife:* **3.** *intr.* To move as with the action of a knife cutting or passing through.

**1920** W. CAMP *Football without a Coach* 107 If any of these three center men lunges through—‘knives’ through, as it is called—he opens the door on either side of him. **1971** *Flying* (N.Y.) Apr. 30/3 Skirting the coast for awhile before knifing northwest to Bordeaux.

以上の *OED* の例からこのような自動詞用法に関して一定の傾向を見ることができる。それは、第一に、これらの動詞が移動や状態の変化を表すものが多いということである。例えば *brake* は「列車や車が止まる」、*elbow* は「肘を使って進む」、*knife* は「波などを分けて進む」という意味である。Quirk らは(d)のすべてについて自動詞用法が可能であるとは述べておらず、おそらく自動詞用法を持たないとしている動詞が *hand* ではないかと考えられるが、(9.8)の *OED* の説明からもわかるようにこの動詞も過去に移動の意味があったことがわかる。

第二に、*fiddle* と *finger* に見られる特徴である。この二つの動詞は動作の対象を必要とする動詞であり、その行為は意図的に行なわれる行為である。意図的に行なわれる行為であるとすると、その行為の対象となる概念が必要とされる (cf. Radden and Dirven 2007:182)。それが *finger* では前置詞句(上例では *at the grass* 及び *at his sword-handle*) によって表されている。言い換えるとこの動詞は意味的には他動詞と考えられ、本来の自動詞とは異なるということになる。それに対して目的語を持たない *fiddle* では、統語的には目的語が存在しないが、この場合の目的語が極めて限定されていることは上の定義から明らかである。このような動詞の典型的な例としては *drink* があり、*fiddle* はこれと同様の特質を持つ。

第三は動詞 *glue* に関する特徴である。この動詞の自動詞用法の意味は上の説明からも明らかのように「そのような特質を持つ」ということを表す。そして与えられている例文 *The wood glues well.* も第 6 章で触れた中間構文であり、主語の属性を表している。動詞 *glue* は *OED* の他にも自動詞用法を掲載してはいる辞書もあるが、本来は他動詞であろう。

以上のことから用法としての自動詞とそうではない、つまり本来の自動詞と

の区別が浮かび上がる。前者の特徴としては、まず主語の行なう行為が意図的であること、従って多くの場合その意図は主語以外の対象に向けられていることをあげることができる。このような場合、その対象としての目的語が省略されている場合と、その対象が前置詞句によって表されている場合とがある。従来の辞書記述では、そして特に学校文法などにおいては、このように前置詞句を後続させる動詞はすべて「自動詞」とされているが、この種の動詞の主語はその行為を意図的に行なうという点で、極めて他動詞に近い意味的な特性を持つ。このことについては次節 7.3 で改めて論ずる。

それに対して(7.7)の *bicycle, boat, canoe, motor* は移動を表す(文字通りの)自動詞である。このタイプの自動詞の特性は、主語は意図的な行為者であるがその意図的な行為あるいは動作によって主語自身が移動するという点である。言い換えると主語は行為の原因者としての意味とその動作を受ける被行為者としての意味の二重性を有することになる。<sup>3</sup>

さて、以上のことを念頭に置きながら Jespersen の例(*benefit, delight, board*)をもう一度検討してみよう。

まず *benefit* と *delight* に関する *OED* の次の記述をみてみよう。

- (7.9) a. *benefit*: ‘*intr. (for refl.) To receive benefit, to get advantage; to profit.*’  
 b. *delight*: ‘*intr. (for refl.) To be highly pleased, take great pleasure, rejoice:*  
 a. *in or to do (anything).*’

ここで注目されるのがこれら二つの語がいずれも再帰形と関連するという点である。このことがどのような事実に基づいているのかは不明であるが、もしこのことが *benefit, delight* は *benefit oneself, delight oneself* という他動詞と無関係ではないということを意味するならば、*The community benefits itself by this railway.* のような構造を基底に想定することができる。つまり「*community* は自らに *this railway* によって *benefit* を与えている」ということになり、これは Quirkらの(7.7b) ‘*To give N, to provide with N*’に相当する。この推測が正しいとすると、

<sup>3</sup> Anderson(1977, etc.)による場所論的格文法はこの点の表示は極めてわかりやすい。例えば *John destroyed the window.* における主語は[erg(ative)]の格を、目的語は[abs(olutive)]の格を持つが、*John ran to the station* における *John* は[erg/abs]という二重格を持ち、それによって主語 *John* が行為の原因者であると同時に行為を受ける被動作主であることが示されることになる。

これらの動詞も Jespersen が再帰代名詞の省略とした(7.2)と同類となる可能性も否定することはできず、*benefit* は純粹の自動詞とは異なるということになる。<sup>4</sup>

もう一つの動詞 *delight* についてもおそらく基本的には *benefit* と同様の推測が可能であり、典型的な自動詞とはいえないであろう。しかも文 *He delighted to hear of all things.* では主語の状態が変化している点も *benefit* と共通の特性を示す。従って、物理的に移動の意味はないが、主語の状態が変化しているという点は移動動詞にも共通する特性である。さらにこの二つの動詞に関しては主語が *benefit* や *delight* の直接の原因となっているのではなく、*benefit* では *this railway* の存在が、*delight* では「彼がそのすべてを耳にしたこと(*for him*) *to hear of all things*」が、すなわち何らかの出来事(Event)が *benefit* や *delight* を与える原因となっている。このような動詞は心理動詞(Psych-verb)と呼ばれ、その主語は意味的には被動作主(Patient)とされている。<sup>5</sup> いずれにしても *benefit* と *delight* は主語の状態の変化を表すが、原因的な要素が前提として含意されているために純粹の自動詞とは異なる。

最後に動詞 *board* は主語が意図的な行為者であること、さらに、補部として場所を表す要素必要とすることから他動詞である。

以上、名詞が動詞として機能し、しかも自動詞の用法が可能か否かということは主語自体の状態あるいはその変化を表すか否かが鍵となっている。

それに対して、次の(7.10)は典型的な自動詞である。

- (7.10) a. His face *saddened*.  
 b. The tomatoes *ripened*.  
 c. My heart *quicken*ed with fear.  
 d. His eyes *widen*ed in surprise.  
 e. The snow *hardened* during the night.

NP+V という形式は主語の状態あるいはその変化を表すということになる。

be 動詞構文が主語の永続的な属性を表すのに対して、NP+V では一時的な状態

<sup>4</sup> Levin(1993: 83)は(7.6a)の *benefit* の2文の関係を Source Subject Alternation と呼び、文 *This railway benefits the community.* は Source である斜格名詞(*by this railway*)が主語となった文であるとする。Levin はこの交替は極めて少数であるとし、*benefit* の他には *profit* をあげているにすぎない。

<sup>5</sup> Levin and Hovav(2005)参照。

を表す点で、二つの文型は互いに相補的な関係にあると言ってよいであろう。

## 7.2 NP + V + AP

上では NP+V 型は主語の状態あるいはその変化を述べる文であることを述べた。それで文は完結するのであるが、自動詞でありながら動詞の後に次のように形容詞が続く場合がある。

- (7.11) a. The sun shines *bright*.  
 b. The train appeared *slow*.  
 c. come *close*, going *cheap*, fall *flat*, fly *high*, come *quick*, etc.

動詞は通常副詞によって修飾されるが、これらの文では *ly* がない形すなわち形容詞が後続している。このような語は「単純形副詞／平板副詞(Flat Adverb)」として知られている。この副詞という名称は、しかし、正確とは言えないであろう。例えば(7.11a)の *bright* は「太陽が明るい」という太陽の状態を述べる文であるが、それを *brightly* という副詞に変えると太陽の輝き方を述べることになり、必ずしも太陽の状態を述べているわけではない。そのような相違がより鮮明となるのが(7.11b)である。この文は(a)と同様には「列車は遅そうにみえた」という列車の状態を述べているが、*The train appeared slowly*.では「列車はゆっくりと現れた」というように動詞 *appear* の様態を述べることになる。常にこのような相違が明確に観察されるわけではなく、*ly* 語尾が常に省略することができるとは限らず、また「省略」された *ly* が常に復元できるということもない。例えば(7.11c)では対応する *ly* 副詞の付加は自然ではない。このような *-ly* 副詞は動詞を修飾し、その様態を述べるのに対して、形容詞は名詞である主語の状態を述べるという相違が両者の間に存在することは原則であろう。(7.11)は形容詞である。

既に *be* 動詞型の構文では主語の状態あるいは属性が述べられることをみた。ここでは一般的な動詞に形容詞が後続しているのであるが、この場合、その動詞は *be* 動詞化していることになる。

## 7.3 NP + V + PP

動詞に補部として前置詞句が後続するタイプは伝統的に（特に学校文法では）自動詞とされている。例えば動詞 *look* は *at* などの前置詞句を補部としてとり、

自動詞である。しかし、第一に、この構文の動詞は、主語の状態そのもの、あるいはその属性を表すという自動詞の特性を持たないこと、第二に、このような動詞は前置詞句を必要要素として必要とする 2 項動詞であること等から上で見た自動詞と同様に見なすことはできない。しかも *look* はその行為は主語の意図により行なわれる行為であり、既に言及した Lakoff があげた他動詞の主語の意味的な特性とほぼ一致する。相違は、そこで指摘されている他動詞性の特性の中では、その目的語が他動詞では動詞の行為によって影響を受けるか否かという点が異なるにすぎない。すなわち典型的な他動詞においてはそ目的語は主語の行なう行為により形状の変化や移動など影響を受けるのに対して、*look* ではそのようなことはない。

例えば次の(7.12a)において、*Mary* が状態の変化や移動といった影響はまったく受けてはいない。これは、一見動詞 *look* の意味的な特性、すなわち、視線を向けるという行為がその対象に対して何らかの影響を与えることを前提としているわけではないという意味的な特性に起因するとも考えられる。しかし、それは全く正しいとは言えない可能性がある。なぜならば次の文を比較してみよう。

- (7.12) a. John looked at Mary.  
 b. John looked Mary in the face.

文(a)では *John* は *Mary* に視線を送っているが、*Mary* がその視線を感じ、何らかの影響を受けている可能性は少ないのに対して、(b)の文は *Mary* が心理的な影響を受けている可能性は高い。当然 *look* という行為には変わりがなく、両文ともに視線の対象は *Mary* であることには相違がないことから、この意味の相違は構文の違い、すなわち、前置詞の有無によってもたらされた相違ということになる。

ところで動詞 *look* は *at* の他 *about, after, beyond, down, for, in, into, like, on, over, round, through, to, towards* などの前置詞をとる。例えば次の文を見てみよう。

- (7.13) a. Look *beyond* the tree.  
 b. Look *round* the tree.

(7.13)の文において、視線の対象が *tree* ではなく、それぞれそのさらに前方であ



り、その周囲であることは明らかである。すなわち、視線は前置詞によって表されている場所に向けられていることになる。もしそうであるとすると、(7.12a)の *at Mary* でも視線の対象は前置詞 *at* であるはずであるが、そうではない。これはどのように考えるべきなのであろうか。

本書 6.5 で述べたように、前置詞は大きく分けるとその意味が明確な類と極めて不明確で曖昧な類とに分けることができる。特に前置詞 *at* は「ゼロ次元 (DIMENSION-TYPE 0—Quirk *et al.* 1985:674)」つまり〈点〉を表すとされ、特定の場所を表す意味は持たない。従って、*at* は意味的には「空」と考えてよい。「空」であるから視線の対象はその目的語の *Mary* ということになる。しかし、問題は特定の意味を持たないにもかかわらずなぜそのような前置詞が存在し、*look* の後で用いられるのかということになる。

ところで、前置詞句を後続させる構文が自動詞構文であると考えすることは、正しくはない。なぜならば、典型定な自動詞は前置詞句を必要とはしないからである。例えば次の例を見てみよう。

- (7.14) a. Someone *laughed/smiled/snored/snorted*.  
 b. She *cried/wept/sobbed*.  
 c. He *hesitated*.  
 d. The door *opened*.  
 e. The flowers have *died*.  
 f. That tree has *fallen*.

これらの文は主語の状態を述べており、動詞は主語の状態そのものを述べるためにのみ必要であり、場所的な要素すら必要ではない。また主語は動詞による記述の対象としてのみ存在し、意図的な行為を行なう動作主ではない。このような本来の自動詞と前置詞を後続させることにより認定された「自動詞」との間には大きな相違が存在する。本書では前置詞を後続させる他動詞は前置詞付き他動詞と呼ぶことにする。

さて他動詞であるから、当然その動作が及ぶ対象を持つことになる。しかし、繰り返しになるが、通常他動詞が目的語に対して状態の変化や移動といった影響を当てるのに対して、前置詞付き他動詞ではその目的語（すなわち前置詞の目的語）は動詞によって影響を受ける可能性はない。言い換えると、前置詞が一種のバリアとして機能しているとも考えることが可能である。

以上のことを念頭におくと動詞 *look* に関しては次のような帰結を導くことが可能である。第一に、*look* は「対象に視線を向ける(*direct your eyes—COBUILD*<sup>1</sup>)」ということからその対象である目的語は何らかの影響を受けるということはない。第二に、視線の対象は前置詞の目的語ではなく、前置詞それ自体である。*at* も例外ではない。*look at* の場合その目的語があたかも視線の対象であると考えられるのは前置詞 *at* は意味的に「空」であるという *at* の特殊性に起因する。<sup>6</sup>

それではなぜ *at* や *on* といった前置詞がバリアとなり、他の *in* にその可能性がないのであろうか。筆者は前置詞 *in* は<中>という意味の他に<形>という意味を持つことを提案した。<sup>7</sup> 例えば次の文が典型である。

(7.15)a. We live *in* Kobe

b. They (=the daffodils) stretched *in* never-ending line (Wordsworth)

(7.15a)は神戸という地域の中>で居住という行為(状態ではあるが)を行っているのであるが、(b)の *in* は「果てしなく線状に広がっている」という<形>の意味である。このような意味を持つ *in* は、他に *paint in oils/write in pencil [English] /print in red/in a circle* などがある。<sup>8</sup> つまり、前置詞 *in* が持つ<中>という意味は文字通りその<中>で起こる出来事・状態であり、<形>も、主語及び動詞による動作の結果新しく生じた状態であり、その状態が変化を被っているわけではない。<sup>9</sup> 言い換えると、*in* の持つ<中>や<形>というかなり明確な意味が、動詞による結果的な状態の含意と整合し、状態の意味は排除されるということになる。注意すべきはこの<中>と<形>の二つの意味は互いに相互依存の関係にあることである。すなわち、<中>は<形>を前提として成立する概念であるように、<形>も<中>を前提としなければ成立することはない。この二つの意味に共通する要因は<有界(性)>(Boundedness)である。前

<sup>6</sup> 「視線を向ける」ということでは *watch* も同様であるが、この動詞は前置詞を要求しない。これは *look* の対象がモノであるのに対して *watch* のそれが場面や状況であるという相違によるものと思われる。

<sup>7</sup> 和田 (2005, 2006) 参照。

<sup>8</sup> 興味あることに、これらの動詞は何かを作り上げる意味を持ち、Jespersen (1924) がいうところの「結果の目的語(Object of result)」といわれる目的語を取る動詞に類似する。例えば *paint a flower* は「花の絵を描く」という意味であり、「ドアにペンキを塗る」の意味の *paint the door* とは区別される。Levin (2003)なども参照。

<sup>9</sup> Jackendoff (1990: 187) はこのような *in* を「結果の *in* (RESULTING IN)」と呼んでいる。

置詞 *in* はつきつめるならばく有界 (性) > という中核的な意味を持つと考えられる。

それに対して、*at* と *on* にはそのような意味はない。上で見たように *at* は「ゼロ次元」であり、*on* は「二次元」を表す。しかし、「ゼロ次元」と「二次元」という概念は、*in* との対比で考えた時、いずれも「境界(Boundary)」を持たないことがわかる。厳密な定義の問題は別にして、一般的には「ゼロ次元」とは「点」を表すと考えることができるであろうから、境界性とは全く無関係の概念である。従って、前置詞 *at* はく非有界 (性) > (Non-boundedness) を表すことになる。一方、*on* が表すとされる「二次元」は概念としては無限と考えられ、従ってく無界 (性) > (Unboundedness) と考えることができる。<sup>10</sup> すなわち、この二つの前置詞にく有界 (性) > という概念がないとすれば、*in* の場合とは異なり結果的な状態を示すことはない。

興味深いことに、類似の現象は動能交替(Conative alternation)と呼ばれる交替現象にも見られる。以下の例が動能交替の典型とされる。

- (7.16)a. Paula hit the fence.  
 b. Paula hit at the fence.  
 c. Margaret cut the bread.  
 d. Margaret cut at the bread. —Levin (1993:41)

この構文は多くの場合前置詞として *at* を後続させるがその他に *on* なども次のように可能である。

- (7.17) a. I pushed at/on/against the table  
 b. The mouse nibbled at/on the cheese. —Levin (1993:42)

動能構文の特性は、まず、第一に、動詞が本来は他動詞であるにもかかわらず前置詞句を後続させることにより自動詞構文となること、第二に、前置詞を

<sup>10</sup>このような Boundary という概念が実は場所的な意味とは直接関係しないことにも注意すべきである。前置詞は従来場所的な意味を持つということが疑いようのない前提とされ、そこからすべての用法が比喩的に拡張するとされてきた。しかし前置詞のすべてが場所的な意味を持つということはなく、*of* や *to* にはそれが疑わしく、これらは通常の語彙とは異なる次元の意味(より正確には機能)を持つと考えるべきである。和田(1990, 1991a, 1991b, 1992, 1993, 2006)参照。

伴う構文では動詞の行為が意図通りに実現したわけではなく、従って目的語も移動や状態の変化などの含意を持たないこと、という点にある (cf. Levin 1993:42)。

この構文に現れる動詞が他動詞であることから、その主語には意図的な働きかけの意味がある。従って、前置詞付き他動詞文では、主語が実行する行為は目的語に何らかの結果的な状態変化をもたらすものではなく、目的語に対する「はたらきかけ」という意味を表すことになる。言い換えると、結果的な状態を含意として持たない前置詞である *at* あるいは *on* が選択されることにより、目的語は状態変化から守られるということになる。

ついでながら前置詞 *on* は次のような構文で興味深い用法を持つ。

- (7.18) a. An attack *on* the group is like one on me personally  
 b. He turned *on* me with one of his nastiest looks.  
 c. He muttered something, turned his back *on* me, and strode on to the tenth tee. —BNC

上文の *attack*, *turned*, *turned his back* で表された出来事はいずれも *me* に対する何らかの影響を意図して行われた行為である。他によく知られた例は *He played a trick on me*. などがある。これまで述べた例は主動詞による「はたらきかけ」がみられる現象であった。しかし、このような *on* は、意図的に起こされた出来事に限られない。例えば次の例のような場合にも見られる。

- (7.19) My car broke down *on* me. —Jackendoff (1990:187)

Jackendoff (1990:187)はこのような *on* を「不利益の *on* (Adversative *on*)」と呼ぶ。Jackendoffはこの用法を「利益の *for* (Beneficiary *for*)」と共に、時間、場所、及び様態を表す主節に対する付加要素(Adjunct)のひとつと見なしている(cf. Jackendoff 1990:280)。通常付加要素は時間、場所、様態などを表す。付加要素として<人>を表す名詞が生ずるということはどういうことであろうか。既に本書では人を表す名詞が所有関係と密接に関連することを見た。そしてその所有には肯定的所有(Positive Possession)と否定的所有(Negative Possession)の二つのタイプが存在することも見た。すると付加要素である「利益の *for* (Beneficiary *for*)」と「不利益の *on* (Adversative *on*)」は、それぞれの前置詞の目的語が<人>を表

す名詞に限定されることから、所有の変異形と考えることもそれほど無理ではない。もう一度文(7.19)を見てみよう。この文は[My car broke down]という命題部と *on me* という付加部とから成る。つまり命題部と<人>とが前置詞 *on* によって結合されていることになる。

前置詞 *on* がなぜこのような構造で用いられるのかという問題は興味深い問題であるが、*on* の目的語が<人>を表す名詞であるということ、及び所有の概念が何らかの重要な役割を果たしている可能性がある。

本題に話しを戻す。典型的な他動詞が目的語の状態を変化させるということは既に何度か言及した。しかし、他動詞のすべてがそのような特性を常に示すわけでもない。これは十分に考えられることである。その直後に前置詞句を従える前置詞動詞として Huddleston & Pullum (2002:278) は以下のリストを掲げている。

- (7.19) *abide by, account for, ask after, ask for; bank on, believe in, break into, break with; call for, call on, come across, come between, come by, come into, come under, consist of, count on; dawn on, decide on, dispose of, draw on, dwell on; fall for, feel for, fuss over; get at, get over, get round, go off, grow on; hit on, hold with, hope for; keep to; lay into, look after, look for; make for; part with, pick on; run into; see about, see to, stand by, stand for, stem from, stick to; take after, tamper with, tell on, testify to, wait for, wait on, etc.*

上のリストからいくつか注目すべき点がある。まず第一は、やはりこのような前置詞動詞は自動詞に特有の意味、すなわち、主語自体の意志によらない状態の変化や属性を表す、といった意味を全く持たないということである。例えば、自動詞とされている *abide* を見てみる。その意味は「留まる」という意図的な行為を表し、場所を表す語句が必須であり、主語の無意志的な属性を意味しているわけではない。

第二に、この前置詞動詞は基本的には前置詞句を要求することによって 2 項動詞となると考えてよいであろう。そしてそのことは関係する動詞が自動詞であり、基本的には前置詞は自動詞を他動詞化する機能を果たすことになる。しかし上のリストには他動詞に前置詞が後続した前置詞動詞も数多く見られる。例えば *break* を取り上げてみる。この動詞が他動詞であることは誰しも疑わないであろう。従ってあえて前置詞によって 2 項動詞にする必要はないはずである。

ではなぜ *break into/with* のような前置詞動詞が生まれるのであろうか。目的語はどこへ行ったのであろうか。この場合一つの可能性として、*break+with* で新しい別の語彙が形成されるという考え方もできる。これはいわばこれらの語句を熟語あるいは慣用句として見なす実用的な考え方である。実用的ではあり、それで何ら問題はないのであるが、なぜその前置詞が選ばれるのかという問題は残るであろう。*Break into* と *break with* の意味の相違は、当然のことながら、前置詞に起因している。この二つの前置詞のどのような意味的な要素がそれぞれの意味の相違をもたらすのかというミクロの問題は、いずれ別に考察する必要のある問題であろう。

第三の前置詞動詞の主語の問題に移ろう。これも上の2項動詞とも関連するが、前置詞動詞が2項動詞であるとする、まず第一に、主語が目的語に相当する前置詞の目的語に対して、何らかの働きかけを行っている可能性が考えられる。「働きかけ」ということは主語が人間あるいは生物名詞であることを予想させるが、それはおおむね事実である。*The thought came across my mind that I had met him before.* のように一見無生物名詞を主語とする語もあるが、これは比喩的な用法である。興味深いのは *consist of* である。この語は *OED* によれば、語源は‘stand, stop short’の意味のラテン語 *consit-ère* であり、‘To come to a stand, stop short’の意味で人間を主語とした例文が見られる(cf. 1625 *Serm.* 3 Apr. 26 We shall neuer knowe where to stop, where to consist.)。その他の動詞も無生物名詞のみを主語とすることはなく、生物名詞を主語としてとる。上のリストの中で唯一ともいえる例外が *dawn on* である。*OED* によればこの語が現れたのは1499年であり、それまでは今は古語となった *daw* が用いられていた。この *daw* は名詞 *dawning* の逆成語である。これらはいずれも「明るくなる」の意味を持つ。ところで *daw* は元々非人称動詞であり、それに取って代わった *dawn* も *the day dawned* と並んで *it dawned* 「夜が明けた」のように非人称動詞としての用法を残している。従って、この動詞は極めて特殊な動詞と見なしてよいであろう。

以上のことから、これらの前置詞動詞は、基本的には、人間を表す名詞を主語とする2項動詞であり、しかも、動詞はその主語の意図的な行為を表すと考えられる。前置詞動詞は前置詞付き他動詞である。この点は *look* と共通するが、(7.19)の前置詞付き他動詞は目的語に対して何らかの影響が及んでいる可能性が高い。例えば *break into*, *dispose of*, *pick on*, *tamper with* などである。その他にも多くの動詞が受け身が可能であることがそのことを物語る。

このようにみると前置詞付き他動詞は自動詞と他動詞の中間的な特質を持つ

ことがわかる。しかし、自動詞に前置詞句が後続することにより 2 項動詞となる可能性はそれなりに理解はできるが、元々 2 項動詞である他動詞がなぜわざわざ前置詞句を直接後続させる必要があるのか、なぜそれぞれ特有の前置詞が選択されているのか、という点については依然として不明である。

#### 7.4 NP + V + *to* - *do*

最後に動詞に前置詞句が後続する構文として *to* 不定詞構文を簡単に取り上げる。*To* 不定詞が前置詞句と見なすことに抵抗を覚える向きもあるであろうが、不定詞（正確には不定詞の標識）という名称にもかかわらずこの *to* の語類は前置詞である。前置詞 *to* の機能は、結論的に述べるならば、その前後に位置する二つの要素をそれぞれ互いの意味的必然性によって結合させることにある。例えば *the key to the door* を考える。鍵はそれによって開閉する対象物としてドア（に必ずしも限定されるわけではないが）が必要であり、ドアには鍵が付属物としてついている。この両概念の間には、例えば *the man in the room* では *the man* と *the room* との間に成立している一時的な位置関係とは根本的に異なる意味的な必然性を見て取ることができる。<sup>11</sup>

今これを次のように表記して考えてみる。

##### (7.20) X *to* Y

ここで X と Y は任意の語類であり、これらは互いに意味的な必然性を *to* によって保たれている。今例示した *the key to the door* では *to* の前後の要素は名詞句であるが、X が動詞で、Y が名詞の場合もある。典型的な例が *go to the station* である。ここでは移動を表す *go* には到達点の概念が必須であり、それが *to* によって導かれている。逆に X が名詞、Y が動詞という場合もある。例えば、*the book to read* などがそれに該当する。ここでは *read* の必須要素としての目的語が *the book* である。さらに *the man to come* における *the man* は後続する *come* の必須用

<sup>11</sup> 詳しくは和田(1992, 1993 など)を参照されたい。また、本書で詳しく言及する余裕はないが、類似の機能を持つ前置詞として *of* がある。例えば *the leg of the table* において *the leg* と *the table* は互いに他者を必要とするとと言える。しかし、この場合は *leg* は *table* の一部であり、この二つの概念はいわゆる譲渡不可能所有 (*inalienable possession*) として「部分と全体の関係 (Part-whole relation)」にある。これに対して *the secretary to the president* では *secretary* は *president* の文字通りの一部を形成しているとは言えない。このタイプの前置詞にはこのような認知的な相違が関連している。

である主語である。ここで詳述することはしないが、前置詞 *to* を含む構造ではこのような意味的な必然性が関係していると思われる。

それでは NP+V+to-do のように動詞に直接 *to do* という *to* 不定詞が後続する場合にはどのような必然性が観察できるのだろうか。まず、*to* 不定詞を後続させる代表的な動詞を次ぎに列挙してみる。

- (7.21) (not) abide, ache, afford, agree, aim, appear, apply, apply oneself, arrange, ask, aspire, attempt, can't bear, beg, begin, bother, not care, cease, chance, choose, claim, come, commence, condescend, consent, conspire, continue, contract, contrive, dare, decide, decline, deign, demand, deserve, design, desire, determine, disdain, dread, elect, endeavour, endure, expect, fail, fear, forbear, forget, get, guarantee, happen, hasten, hate, have, help, hesitate, hope, intend, learn, like, long, love, lust, manage, mean, need, neglect, offer, omit, ought, plan, plot, pray, prefer, prepare, presume, pretend, proceed, profess, promise, propose, prove, purport, purpose, reckon, refuse, regret, rejoice, remember, request, resolve, say, scorn, seek, seem, (not) stand, start, strive, struggle, swear, tend, threaten, trouble, try, turn out, undertake, volunteer, vow, want, warrant, wish, yearn, etc.

このリストは主として Hornby(1956)、Declerck(1991)、Palmer(1974)、Quirk *et al.*(1985)を参考としているが、個々の動詞についてはさらに慎重に検討する必要がある。しかし、一定の傾向を見て取ることは可能である。‘Subjectless infinitive clause as direct object’ (Quirk *et al.* 1985), ‘Catenative’ (Palmer 1974:189)などと呼ばれ、学校文法では不定詞の名詞的用法と呼ばれる構造であるが、まず第一に、そのほとんどが *want*, *hate*, *try* など<人間>を表す名詞を主語とする動詞であり、それが多数を占めることである。つまり、行為に対する意欲を表す動詞であることからこれらの動詞及びその構造は ‘Modality verbs’ (Givón 1984)、‘Modal (FOR) TO complement’ (Dixon 1991, 2005)などと呼ばれる。本書第一章において動詞は文中では定形か非定形かのいずれかの形態をとること、そして定形はすべて法性に関わることを述べた。すなわち動詞の原形は常に法的な要素とともに用いられるということである。問題のこの構文で用いられる *want*, *hate*, *try* などは主語の意欲を表すことから法性と無関係ではない。不定詞部の動詞は原形であることから法的な意味を持つ動詞がその前に位置するのは意味的に必然性があると考えられる。但し、法的な意味を持つとはいえ、この場合



の法は発話者の心的な態度を表しているのではなく、主語の心的な態度を表すことから疑似法的(Quasi-modal)と呼ぶべきである。

暫定的ではあるが上のリストには、しかし、人間名詞を主語とする動詞ばかりが含まれているわけではない。人間以外の名詞をとる動詞も *appear, prove, seem, threaten, turn out, tend, begin, cease, chance, continue, happen, help* など少なくない。しかし、これらの動詞はおよそ二つに類別することができる。一つは *appear, prove, seem, threaten* など発話者の判断に関わる動詞であり、他方は *begin, cease, continue* など動作や出来事の開始や終結を表す動詞である。前者は *to* 不定詞部で表される出来事に対して、例えば「へしそうだ」といった発話者の判断を表す。これは今上で述べた *want* などの疑似法的動詞が主語の心的な態度を表すのとは異なり、発話者の判断に関わる点でより法助動詞に類似している。従って、不定詞部の原形動詞との意味的な関係は強いと言える。それに対して、後者は動詞の「相(aspect)」に関する意味を持つ。相は動詞の意味においては法と同様に最も欠かすことの出来ない特性である。名詞や形容詞など他の品詞と動詞を区別する意味的な特性がこの相であると考えてもよいであろう。

以上のことから(7.21)の動詞はいずれも不定詞部の原形動詞とは意味的な必然性を有すると考えられ、以下のように分類することが可能である。<sup>12</sup>

## (7.22) a. QUASI-MODAL VERBS

### i. SUBJECT ORIENTED VERB (= *can* or *will*)

Positive: *ache, agree, aim, apply, arrange, ask, aspire, attempt, beg, bother, condescend, consent, conspire, contract, contrive, dare, decide, deign, demand, design, desire, determine, elect, endeavour, guarantee, hasten, hope, intend, like, long, love, lust, manage, mean, offer, plan, plot, pray, prefer, prepare, presume, pretend, profess, promise, propose, purport, purpose, reckon, remember, request, resolve, seek, strive, struggle, swear, try, undertake, venture, volunteer, vow, want, warrant, wish, yearn, etc.*

<sup>12</sup>この動詞の分類は暫定的である。また、この構文に生ずる動詞をすべて網羅し手いるわけでもなく、この分類に当てはまらないと思われる動詞もある。例えば *abide, afford, stand* などが *to* 不定詞を後続させる場合には助動詞 *can (not)* の後に生ずる。*To* 不定詞が動詞に後続する場合には助動詞との共起関係に一定の傾向が見られる。この点に関しては和田(2007)を参照されたい。

Negative: bear, decline, disdain, dread, endure, fear, forget, hate, help, hesitate, neglect, omit, refuse, regret, scorn, trouble, *etc.*

Neutral (=will): choose, claim, expect, need, *etc.*

ii. SPEAKER ORIENTED VERBS (=must, may)

need, deserve to, have to, ought to, *etc.* ;

appear, prove, seem, stand, threaten, turn out, tend, *etc.*

b. ASPECTUAL VERBS

begin, cease, chance, come, commence, continue, fail, get, happen, learn, proceed, start, *etc.*

詳細を述べる紙幅はないが、このような動詞はまず疑似法的動詞(Quasi-modal vreb)と相的動詞(Aspectual verb)に分けることができる。疑似法的動詞はまず主語の意志や意欲に関わる動詞(Subject oriented verb)があり、これには *try* や *want* など積極的に行為の実現に関わる(positive)場合と、*hate* や *hesitate* のように消極的あるいは否定的な態度を表す(negative)場合、そして、その両者に関しては中立的(neutral)と思われる *choose* や *expect* などがある。それに対して *need* や *seem* などは発話者の判断に関連するのタイプ(Speaker oriented verb)である。

ここで注目すべきことは、この疑似法的動詞はおよそ助動詞に対応している可能性があることである。周知の通り助動詞の後には原形動詞が生ずるが、これは言い換えると、動詞の原形はその左側に助動詞を要求するということでもあり、*to* 不定詞の原形動詞についても同様のことが当てはまるといことになる。

このように、動詞が直接 *to* 不定詞を後続させる構造は前置詞 *to* の最も基本的な機能によって動機付けが与えられていることになる。

## 第8章 結びにかえて

### 8.1 文の単位

文が一定の構造を有することを否定することはできない。構造を有するが故にわれわれはそれを作り出し、その意味を認識・理解することができる。今、文を物理的な一つの構造体例えば本棚に喩えてみる。目の前の本棚は何枚かの板によって作られている。点板、底板、側面板によって枠組みが作られ、そして棚板が枠組みに組み込まれる。

当然これらの大小の板は雑然と寄せ集められているわけではなく、一定の秩序あるやりかたで結合され組み合わされている。しかしそれらの結合の方式は意外に単純であることに気がつく。例えば枠組みとなる板は釘などで固定され、棚板は特定の位置に取り付けられたダボの上へのせられるか、側面板の溝にはめ込むこともある。それらの板は接着剤によって接合されるとさらに強度は増す。もちろんその他にも結合の方法はあるのではろうが、日常的にわれわれが二つの物体をつなぎ止める手段は「釘打ち」「はめ込み」「接着剤」のような単純な方法に限定される。すなわち、部品はごく限られた方式によって結合され、さらに大きな構造体となるのである。

文が構造体であるとする、それを構成する「部品」は名詞句、動詞句、形容詞句、そして前置詞句ということになる。(副詞句は文型には関与しない。)これまで文型は主語(S)、述語動詞(V)、目的語(O)、補語©などのような用語によって類別されてきた。しかし、第一章で述べたように、これらの用語は機能的な概念を表すものであり、かならずしも文を形式の観点から分類するものではない。しかも、主語、目的語、補語という概念は定義付けが極めて困難であった。あえて定義を与えるとすれば、主語は述語動詞の前に位置する名詞句であり、目的語は述語動詞の直後に生ずる名詞句、補語は **be** 動詞に後続する形容詞句ということになるであろう。従って、文型としてわれわれが認識するものは文の構造としての文形にすぎない。

注意すべきことは、文の構成要素が名詞句や形容詞句そして動詞句であり、名詞、形容詞、動詞などの語ではないということである。ここで句と語の違いについても一度再確認しておく。語類に開かれた類と閉ざされた類との二つのタイプがあることも既に述べたがここではまず開かれた類について考える。この類は成員の数は特定することができないという特徴を持つ。これはその言語社会の必要度に応じて語彙が変動することを意味する。端的に述べるならば、

これらの類の語は言語外の世界に指示する対象を有するということでもある。ここでいう言語外の世界とは単なる客観的な現実世界のみを意味するとは限らず、抽象的な観念あるいは思惟の世界も含む。物質世界にしても観念あるいは思惟の世界においても伝達すべき対象は記号化する必要がある。すなわち記号とその対象には、Saussure のいうところの恣意性があるとはいうものの、一対一の対応関係が存在する。

しかし対象を記号化したとはいえ、それがすなわち言語記号かというとは必ずしもそうではない。対象の記号化は対象のラベルであり、いわば代用にすぎない。それは依然として観念の世界である。言語化するためには主体である人間によって手を加える必要がある。一つ一つの記号をどの順番で表現するのかということもそのような操作の一つではあるが、ここで述べたいことは、語を文構造の一部として取り込む際には人間による主体的な働きかけが行なわれるという語順以前の段階が必要であるということである。この段階は、上の本棚の例に置き換えるならば、板をそれぞれの目的に応じた大きさに切り揃える準備段階の操作に相当する。そのような人為的な操作によって、いわば生のすなわちラベルが棚板として部品化すなわち言語化される。この言語化された形式が句である。語はこのように句の形をとることによって初めて文の一部として用いられ、そこに意味が生ずる。<sup>1</sup>

別の観点から述べるならば、ラベルはその言語社会の必要性によって作り出された社会的な産物であるのに対して、言語化された記号は発話者の個人的な道具である。その意味で、句には発話者の主観が反映されていると言ってよいであろう。例えば名詞句を見る。名詞句と名詞の相違は前者が限定詞類を持つものに対して、後者の名詞はそれを持たない裸の概念そのものであるという点にある。定冠詞や不定冠詞の選択は発話者によって行われる主観的な操作である。動詞句と動詞においても同様である。これら二つの相違は、起こる事態に対する査定に関わる法的な判断、動詞句には時制の判断（実はこの判断も法的な判断の一つである）などが付加されるかされないかという点にあり、形容詞句においても程度の判断が加えられている。例えば *The man was old.* という文があるとする。ここには *old* が句の形式を成していないように思われる。しかし、*very old* のように発話者の判断をさらに加えることは、文中の形容詞にはそのような

---

<sup>1</sup> Wittgenstein(1953: § 43)が「語の意味とは、言語内におけるその慣用である」（藤本隆志訳）と述べているのはこの意味においてであろう。

程度表現の共起を可能にする位置が与えられ、句であることを示している。文における形容詞が表面上「裸」であるのは状態に対する判断が抽象的であるとともに主観に直接関わる判断を表すことがその要因である。

## 8.2 形式の意味

本書では文の形式に専ら焦点を当ててその形 (=型) を分類してきた。かつての初期の変形文法では例えば受動文に用いられる *be* 動詞や *by* 句は「変形操作」によって導かれるということが行われていた。また Fillmore(1968)では所有を表す *have* は特有の格の枠を持つ構造に挿入されていた。すなわちこれらの語は文の意味解釈に直接関与することのない、言い換えると意味を持たない要素と考えられていた。確かにこれらの語は意味的には限りなく無に近い側面も持つであろう。しかし、本書では *be* や *have* は英語の構文において最も基本的な役割を果たすものと想定している。その結果、*be* 構文と *have* 構文という二つの構文は英語の構文が有するいくつかの意味の中でも最も基本的なタイプの意味、すなわち場所的存在関係と所有関係を表すことが判明した。しかも、第3章と第4章から明らかなように、*be* 構文と *have* 構文は、主語の属性を述べるという共通性をも持つことが明らかとなった。例えば *John is a student.* という文は「John は学生という属性を有する」という意味であり、*John has blue eyes* は「John の目は青い」ということを意味している。この二つの相違は、*be* 動詞構文は *John* を *John* に外在する対象あるいは特質を引き合いに出しながら、それが *John* の属性であるという判断を行っているのに対して、*have* 構文では *John* に内在する特質に言及し、それが *John* の一部であるということ述べているという点にある。

このように考えると、この二つの構文は基本的には属性という概念を表し、そこから共起する要素の形式によって非属性的な表現 (例えば *John is in his office.* や *John has a doggy in his hands.* など) に拡張することができ、あるいは、逆に、*be* 動詞構文は基本的に存在を表し、*have* 構文は所有を表す、という捉え方も可能である。そのどちらかという問題の解決は急ぐ必要はないであろう。しかし重要なことは、「*—*が*—*に存在する」という意味にしても「*—*が*—*を所有する」という意味にしても、これらは認知的にも最も基本的な関係概念であるということであり、英語はこのような関係概念は閉ざされた類に属する語 (より正確には形態素) によって表すということである。本章の冒頭で述べた言語化のプロセスにおいても、判断は人間と対象との間に成立する関係概念

に他ならない。従って限定詞類や助動詞類などの閉ざされた類の語彙（形態素）を英語は用いる。

関係概念はその性質上名詞や動詞、形容詞などといった通常の語彙化とは馴染まない。従って、時にはまったく語彙に頼ることなく表現されることがある。この存在関係と所有関係はその代表的なものである。*be* 構文と *have* 構文はその他の構文、例えば動詞に後続する NP+XP という構文についてもそれらの意味的痕跡が認められることである。すなわちこの NP+XP という構造は存在をあらわすか所有を表すかのどちらかであるという可能性が極めて高い。もしそうであるとすると、(NP+V+)NP+XP という形式それ自体が存在と所有というプロトタイプの意味を持つことになる。<sup>2</sup>

以上みてきたことから、句を結合する原理についても一定の仮説が導きだせる。すなわち、存在関係と所有関係が根本的な原理として機能し、これらは必ずしも語彙化される必要がないということである。これらの関係概念は、英語では *be* 動詞と *have* 動詞で表される。この二つは状態や属性を述べるが、それに対して、その対極に位置するのが *do* 型の動詞である。

### 8.3 まとめ

英語の文は上でみてきたような文形式は英語のいわば骨組みとでも言うべき形であり、それぞれの形はそれ自体で特有の意味を持つことをみてきた。それをまとめると次のようになる。

1. *Be* 動詞型と *have* 動詞型は、基本的には、*be* 動詞型は場所的な位置あるいは一時的な状態を述べ、*have* 型は所有を表すが、主語の状態や属性・特質を述べるという共通性を持つ。
2. 他動詞型 NP1 + V + NP2 は、基本的には NP1 の意図的な行為(V)により NP2 が甚大な影響を受けることを表す。
3. 他動詞型 NP1 + V + NP2 + XP では、基本的には、NP2 + XP の間に上の(1)の関係、つまり *be* 動詞か *have* 動詞という意味的な関係が存在する。
4. 他動詞型 NP1 + V + NP2 + XP において、目的語に[+Animate]の名詞があるときには「所有関係」が成立する。
5. 自動詞型 NP + V (+ XP)は、基本的には、NP の状態あるいは状態の変化を述

<sup>2</sup> この点に関しては Goldberg(1995)、Jackendoff(1990)、Goldberg and Jackendoff(2004)などとの比較検討が急務であるが、別の機会に譲りたい。

べる。

上のような意味を持つ構造にそれぞれの語彙特に動詞が挿入されることにより多様な意味がもたらされることになる。

#### 8.4 例示

以下、参考までに John le Carré, *The Spy Who Came in from the Cold* (Sceptre edition 1999)より、実例を挙げておく。

形から見た文型のまとめ

##### I. *Be* 動詞型

- |                                 |                                                                                                                                                                            |
|---------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| i. NP <i>be</i> NP[+Def]        | This is my best-kept secret.                                                                                                                                               |
| ii. NP <i>be</i> XP             |                                                                                                                                                                            |
| a. NP <i>be</i> NP[-Def]        | Leamas was not a reflective man and not a particularly philosophical one.                                                                                                  |
| b. NP <i>be</i> AP              | You've been very good.                                                                                                                                                     |
| c. NP <i>be</i> PP              | He's on the run.                                                                                                                                                           |
| d. NP <i>be</i> V- <i>en</i>    | If Allies weren't there the Wall would be gone by now.                                                                                                                     |
| e. NP <i>be</i> V- <i>ing</i>   | A policeman was standing at Leamas' side.                                                                                                                                  |
| f. NP <i>be</i> <i>to do</i>    | If he were to walk into a London Club the porter would certainly not mistake him for a member.                                                                             |
| iii. NP <i>be</i> AP PP         |                                                                                                                                                                            |
| a. NP <i>be</i> AP PP           | They spoke as if they were afraid of being overheard.                                                                                                                      |
| b. NP <i>be</i> AP <i>by</i> NP | And what were the names which would be used by the agent?                                                                                                                  |
| c. NP <i>be</i> AP <i>to do</i> | The debutant secretaries, reluctant to believe that Intelligence Services are peopled by ordinary mortals, were alarmed to notice that Leamas had become definitely seedy. |

##### II. *Have* 型

- |                      |                                                       |
|----------------------|-------------------------------------------------------|
| i. NP <i>have</i> NP | Intelligence work has one moral law – it is justified |
|----------------------|-------------------------------------------------------|

- by results.
- ii. NP *have* NP XP
- a. NP *have* NP V-*en* No amount of washing would remove it, so that in the end Leamas had his hair cut short to the scalp and threw away two of his best suits.
- b. NP *have* NP V We can have the polizei contact the Agency.
- c. NP *have* NP V-*ing* (I won't have you saying such things about my sister.)
- d. NP *have* NP *to*-V Elsie said in the canteen that poor Alec Leamas would only have four hundred pounds a year to live on because of his interrupted service.
- iii. NP *have* VP
- a. NP *have* V-*en* The darkness had fallen.
- b. NP *have to do* You'll have to move away from her.
- III. 「他動詞型」
- i. NP V NP Rightly as it turned out, for Mundt had killed him.
- ii. NP V NP XP (主述関係) (前置詞が *with, of, to, for, (from)* 以外)
- a. NP V NP PP (主述関係) Then, totally unexpected, the searchlights went on, white and brilliant, catching Karl and holding him in their beam like a rabbit in the headlights of a car.
- b. NP V NP AP (主述関係) They shot her dead in the street as she left a West Berlin cinema.
- c. NP V NP VP (主述関係) Leamas watched Karl lean his bicycle against the railing.
- iii. NP V NP PP (所有関係)
- a. V + NP[+Animate] + *with* + NP Kiever had provided Leamas with luggage.
- b. V + NP[+Animate] + *of* + NP He became a solitary, belonging to that tragic class of active men prematurely deprived of activity; swimmers barred from the water or actors banished fro the stage.
- She reminded Leamas of an old aunt he once had who beat him for wasting



string.

- c. V + NP + *to* + NP[+Animate] Mundt nodded, lit a cigarette and gave it to one of the sentries to pass to Leamas.
- d. V + NP + *for* + NP[+Animate] Fielder was walking like a man led in his sleep, into the net which Control had spread for him.
- e. V + NP + *from* + NP([+Animate])(The thief stole the money from the bank.)
- f. V + NP + *of* + NP([+Animate]) (May I ask a favor of you?)
- g. V + NP[+Animate] + NP The American handed Leamas another cup of coffee.
- h. V + NP + *from* + NP (=III,ii,a) The standard dropped in the last few months; think they'd begun to suspect him by then and kept him away from the good stuff.

iv. NP V NP PP (その他)

- a. V + NP[+Animate] + *of* + NP You were blackmailed by British Intelligence; they accused you of stealing money and then coerced you into preparing a revanchist trap against myself.
- b. V + NP[+Animate] + *for* + NP (She blamed him for the accident.)
- c. < Whole-part 構文 > (He tapped me on the shoulder.)
- d. < *One's way* 構文 > He drove seventy kilometers in half an hour, weaving between the traffic, taking risks to beat the clock, when a small car, a Fiat probably, nosed its way out into the fast lane forty yards ahead of him.

v. NP V PP PP

*apply to N for N / compete with N for N / struggle with N for N / talk to N about N*, etc.

IV. 「自動詞型」

i. NP V XP

- a. NP V [+Agentive] PP Leamas stared through the window of the check point.
- b. NP V AP She fell asleep in the armchair and did not wake

- until it was nearly light, feeling stiff and cold.
- c. NP V PP                    He looked like a man who could make trouble.
- d. NP V *V-ing*                The two stood together talking.
- e. NP V *V-en*                  She looked a little embarrassed.
- ii. NP V            It is said a dog lives as long as its teeth.

V. *to* 不定詞型

- A. CAUSE AND EFFECT USES                    Thus he killed in the name of the people to protect his fascist treachery and advance his own career within our Service.
- B. QUASI-MODAL USES                        I want to speculate for a moment on Mundt's technique.
- C. ASPECTUAL USES                            Suddenly Liz began to sob uncontrollably.

## 参考文献

- Anderson, J. M. 1977. *On Case Grammar*. London: Croom Helm.
- . 1980. 'Anti-unaccusative, or: Relational Grammar is Case Grammar.'  
Reproduced by Linguistic Agency University of Trier.
- Anderson, J. M. 1997. *A Notional Theory of Syntactic Categories*. Cambridge:  
Cambridge University Press.
- Andrews, A. 1985. 'The Major Functions of the Noun Phrase.' In Shopen 1985,  
62-154.
- Bennet, D. 1975. *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions: An Essay in  
Stratificational Semantics*. London: Longman.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan eds. 1999. *Longman  
Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Bolinger, D. 1967. 'Adjectives in English: Attribution and Predication.' *Lingua* 18:  
1-34.
- Chametzky, R. 1985. "NPs or Arguments: Exocentricity vs. Predication." *CLS*  
21:26-39.
- Comrie, B. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. 2nd edition. Chicago:  
University of Chicago.
- Curme, G. 1931. *Syntax*. Boston: D.C. Heath and Company.
- Dill, L. B. 1986. *English Prepositions: The History of a Word Class*. Ph.D. Thesis,  
University of Georgia. Tokyo: Yushodo.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo:  
Kaitakusya.
- Dixon, R. M. W. 1984. 'The semantic basis of syntactic properties.' *BLS* 10: 583-595.
- . 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*.  
Oxford: Clarendon Press.
- . 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University  
Press.
- Emonds, J. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax. Root,  
Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York/ San  
Francisco/ London: Academic Press.
- Fellbaum, C. 1985. "Adverbs in Agentless Actives and Passives." *CLS 21, Part II:  
Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the*

*Twenty-First Regional Meeting*, 21-31.

- Fillmore, C. J. 1968. 'The Case for Case.' In E. Back and R.T.Harms eds. *Universals of Linguistic Theory*, pp.1-88. New York: Holt Rinehart and Winston.
- Fiengo, R. 1980. *Surface Structure*. Harvard University Press.
- Givón, T. 1984. *Syntax: A Functional-typological Introduction*, vol 1. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- . 1990. *Syntax: A Functional-typological Introduction*, vol 2. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Goldberg, A. and R. Jackendoff. 2004. 'The English Resultative as a Family of Construction.' *Language* 80:3, 532-68.
- Green, G. M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press.
- Gropen, J., S. Pinker, M. Hollander, R. Goldberg, and R. Wilson. 1989. 'The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English.' *Language* 65: 203-257.
- Herskovits, A. 1986. *Language and Spatial Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hornby, A. S. 1956. *A Guide to Patterns and Usage in English*. Tokyo: Kenkyusya.
- Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦. 1984. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館.
- . 2000. 『「日本語論」への招待』東京: 講談社.
- Jackendoff, R. 1973. "The Base Rules for Prepositional Phrases." S.R.Anderson and P. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*: 345-356. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- . 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass: The MIT press.
- Jaworska, E. 1986. "Prepositional Phrases as Subjects and Objects." *Journal of Linguistics* 22:355-374.
- Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. New York: W.W.Norton. (Reprint 1965)
- . 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part VI, part IV.

- London: George Allen and Unwin. (Reprint 1961)
- Keyser, S. and T. Roeper. 1984. 'On the Middle and Ergative Constructions in English.' *Linguistic Inquiry*, Vol.15, No. 3: 381-416.
- 近藤健二. 1975. 「記述の対格—その起源と発達—」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）25: 29-43.
- 小西友七編.1980.『英語基本動詞辞典』東京：研究社.
- Lakoff, G. 1977. "Linguistic Gestalts." *CLS* 13:236-287
- Langacker, R. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar, vol. 1*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, B. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Levin, B. and M. R. Hovav. 2005. *Argument Realization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, J. 1985. *Semantics and Syntax: Parallels and Connections*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Onions, C.T. 1971. *Modern English Syntax*. London: Routledge. (New edition of *An Advanced English Syntax*, prepared from the author's materials by B. D. H. Miller.)
- Palmer, F.R. 1974. *The English verb*. London: Longman.
- Pustet, R. 2003. *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman
- Radden, G. and R. Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Radford, A. 1981. *Transformational Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, T. (ed.).1985. *Language typology and syntactic description* (Three volumes). Cambridge: Cambridge University Press.
- Swan, M. 1997. *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- van Oosten, J. 1977. 'On Defining Prepositions.' *BLS* 3:454-464.
- 和田四郎. 1990. 「場所的認識と前置詞」六甲英語学研究会『語法研究と英語教育』第12号 pp.44-55.
- . 1991a. 「前置詞 to の機能と意味」『神戸外大論叢』第42巻 第5号

- pp.1-20. 1991年10月
- . 1991b. 「前置詞句主語文と前置詞」安井稔博士古稀記念論文集編集委員会編『現代英語学の歩み』pp.141-150.
- . 1992. 「To 不定詞における「方向性」」『神戸外大論叢』第43巻第4号 pp.65-87.
- . 1993. 「To 不定詞の「目的」と「結果」用法」加藤文彦・上村哲彦編『ことば・意味・かたち 英米文学 - 批評と読解』pp.1-18.
- . 2005. 「Teach-in の文法」田中実・神崎高明編『英語語法文法研究の新展開』pp. 141-6. 英宝社.
- . 2006. 「前置詞意味論序説」『神戸外大論叢』第57巻第1-5号 pp.41-60.
- . 2007. 「目的語」としての to 不定詞構文と助動詞の共起関係」『六甲英語学研究』10: 278-82.
- Wada, S. (to appear) 'Usage-based' Approach to English Prepositions - with Special Reference to Semantic and Syntactic Differences between *to* and *in*. In *Proceedings of 22<sup>nd</sup> Scandinavian Conference of Linguistics*.
- Wittgenstein, L. 1953. *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell. 『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』(藤本隆志訳) 東京: 大修館 (1976)
- 安井稔. 1982. 『英文法総覧』東京: 開拓社.
- . 1996. 『英文法総覧—改訂版—』東京: 開拓社.
- . 2001. 『英語学を考える』東京: 開拓社
- . 2008. 『英語学の見える風景』東京: 開拓社.
- Zelinsky-Wibbelt, C. ed. 1993. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

## Dictionaries

*Cambridge International Dictionary of English*, 1995. (CIDE)

*Collins Cobuild English Language Dictionary*, 1987. (COBUILD<sup>1</sup>).

*Collins Cobuild English Language Dictionary*, 1995. (COBUILD<sup>2</sup>).

*Longman Dictionary of Contemporary English*. (LDCE<sup>3</sup>)

*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 2000. (OALD<sup>5</sup>)

*OED Online* (<http://dictionary.oed.com/>) (OED)

『新編英和活用大辞典』1996. (『活用辞典』)

『ジーニアス英和辞典 改訂版』1994. (『ジーニアス』)

和田 四郎 (わだ しろう)

神戸市外国語大学教授

専門：英語学・意味論・語法研究

## 研究叢書 第44冊

2009年3月24日 印刷

2009年3月31日 発行

発行所

神戸市西区学園東町 9-1  
神戸市外国語大学外国学研究所

印刷所

神戸市兵庫区下沢通 4-7-30  
株式会社 ルネック

Monograph Series in Foreign Studies, Vol. 44

# The Meaning of Formal Patterns of Sentences

WADA, Shiro

Research Institute of Foreign Studies  
Kobe City University of Foreign Studies

2008